

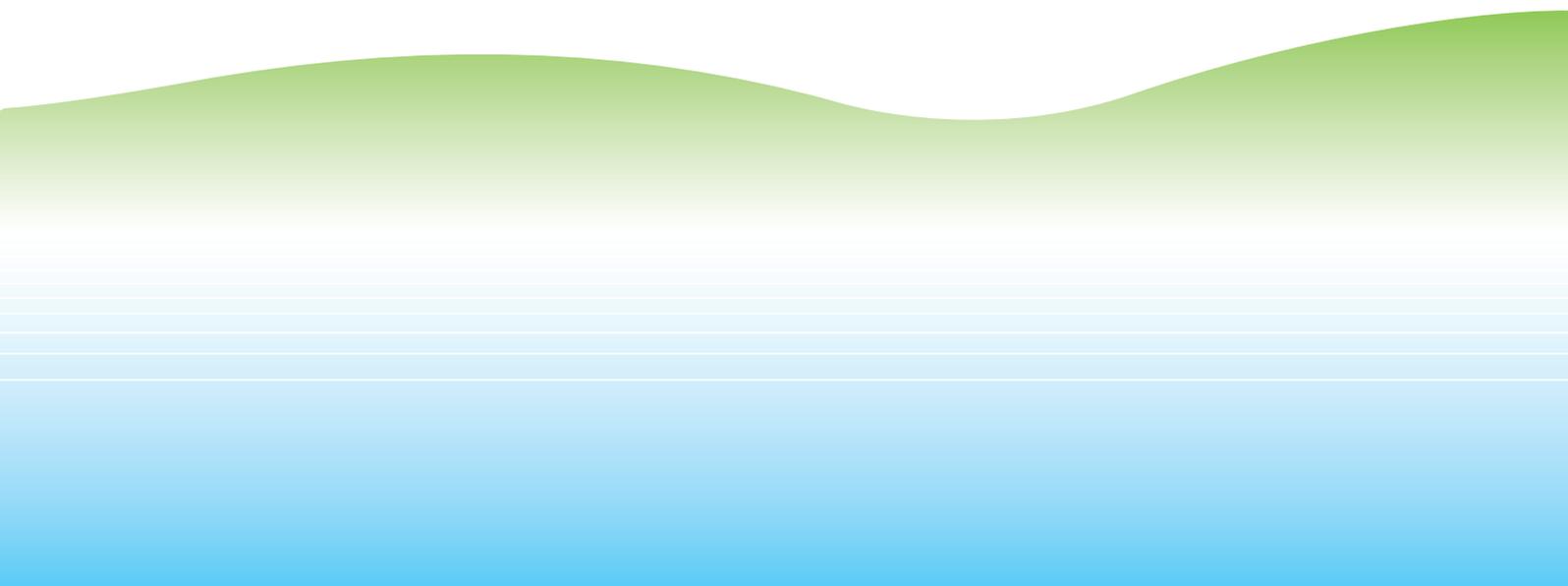
# 年報 京都大学フィールド 科学教育研究センター

---

Annual Report

Field Science Education and Research Center,  
Kyoto University

No.5 2007



年 報

京都大学フィールド科学教育研究センター

第5号

2007



# 目 次

組 織 .....	1
教育研究部 .....	2
<b>1. フィールド研活動の記録</b>	
(1) 主な取り組みの紹介	
1) 第4回時計台対話集会「むしに教わる森里海連環学」 .....	4
2) 神戸大学・京都大学合同市民公開講座 「森と海をめぐる市民公開講座～人・社会・自然を考える～」.....	7
3) 由良川フォーラム .....	8
4) 21世紀COEプログラム「昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生」 .....	9
5) 京都大学2007年度シニアキャンパスへの参加 .....	10
6) 和歌山研究林における社会連携活動 .....	11
7) 京大白浜水族館における社会連携活動 .....	12
8) 尾池総長の北海道研究林視察 .....	13
9) 全学共通科目（リレー講義） .....	14
①「海域・陸域統合管理論」 ②「森里海連環学」 ③「森林学」 ④「水圏生物学入門」 ⑤アンケート結果	
10) 森里海連環学実習 .....	20
①実習A「芦生研究林－由良川－丹後海コース」 ②実習B「紀伊半島の森と里と海」 ③実習C「夏の北海道実習」 ④アンケート結果	
11) 少人数セミナー .....	30
①C. W. ニコルの“アフアの森”に学ぶ ②フィールド実習“森は海の恋人” ③木造校舎を造る：木の文化再生へ ④河口域の生態学 ⑤海岸生物の生活史 ⑥海洋生物の多様性 ⑦魚類心理学入門 ⑧原生的な森林の働き ⑨森のつくりだすもの ⑩森里海のつながりを清流古座川に見る ⑪森林の再生と動態 ⑫豊かな森をめざして！ ⑬節足動物学入門 ⑭有機農業の可能性…持続可能な農業をめざして ⑮アンケート結果	
(2) 外部資金の導入 .....	53
(3) 2007年度 フィールド科学教育研究センターにおける主な取り組み（日記） .....	56
<b>2. 各施設における活動の記録</b>	
(1) 教育，社会連携，特記事項	
1) 芦生研究林 .....	62
2) 北海道研究林 .....	63
3) 和歌山研究林 .....	64
4) 上賀茂試験地 .....	65
5) 北白川試験地 .....	66
6) 徳山試験地 .....	66

7) 紀伊大島実験所 .....	67
8) 舞鶴水産実験所 .....	67
9) 瀬戸臨海実験所 .....	68
10) 各施設職員の受賞等 .....	69
(2) 各施設を利用した学生実習等 .....	70
(3) 各施設を利用した社会連携教育および野外学習等 .....	74

### 3. フィールド研教員の活動の記録

(1) 新人紹介 .....	77
(2) 研究成果 .....	79
(3) 学会と社会における活動 .....	99
(4) 国際活動 .....	108
(5) 教育活動 .....	113
(6) その他フィールド研関連事業における活動 .....	118

### 4. 資料

(1) 職員配置表 .....	123
(2) 常設委員会名称及び委員一覧 .....	124
(3) 全学委員会等 .....	125
(4) 運営委員会 .....	126
(5) 協議員会 .....	126
(6) 新聞記事 .....	127
(7) 各施設利用許可数 .....	131
(8) 各施設利用人数 .....	131
(9) 人事異動 .....	132
(10) 規程の改正等 .....	133

# 組 織

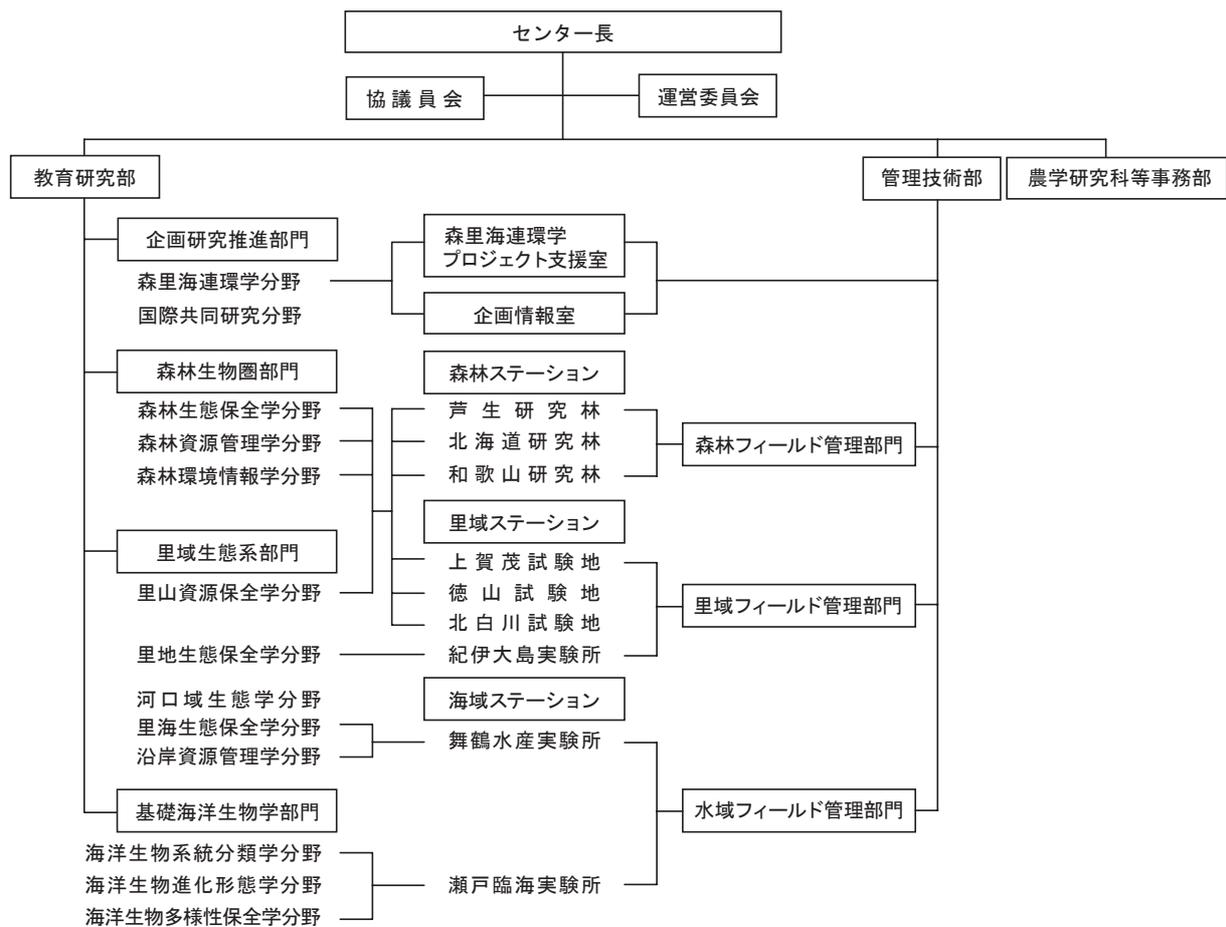
## ■ センターの組織

教育研究部と管理技術部からなる。センター本部は本学北部キャンパスに置かれ、森林、里域、海域の各ステーションを構成する9の施設が、太平洋側から日本海側に至る近畿圏を中心に広域に位置する。

## ■ 教育研究部

企画研究推進部門，森林生物圏部門，里域生態系部門，基礎海洋生物学部門の4部門，13分野から構成されている。森－里－海の連環を軸とした教育・研究を進める。

■ 管理技術部 企画情報室と，森林，里域，水域の3フィールド管理部門，9施設からなる。フィールドの管理・運営および基礎情報の収集，情報管理，技術開発，教育研究支援を行う。



# ●●● 教育研究部 ●●●

## 企画研究推進部門

森里海連環学分野と国際共同研究分野から構成される。センターが共通の理念の下に機能的に統合化され、森－里－海連環学の創出を目指す。さらに、国際的にもオープンな組織へ自己革新するための役割を担う。とくに、来るべき環日本海時代を展望した日・中・韓の国際共同研究や、異質気候帯における比較研究のための東南アジア熱帯域における共同研究の展開を図る。

### 森里海連環学分野

森林域、里域および沿岸海洋域を対象として、隣接する生物圏相互の関連に焦点を当てた研究部門間の共同研究を促進する。多様な共同研究を基礎に、森－里－海の連環に関する研究プロジェクトを企画し、全国の関連研究機関との連携の下、新たなフィールド科学の創出と展開を図る。

### 国際共同研究分野

東アジアならびに東南アジアを主なフィールドとして、陸域と海域の連環を柱とした地球環境問題に関する国際共同研究を展開し、海外における連携拠点の構築を図る。当面は、世界規模で展開される沿岸域の生物多様性の総合調査(NaGISA・CoML)のリーダーとしての活動を通じて、国際共同研究の基盤を固める。

## 森林生物圏部門

本部門では、森林科学ならびに森林資源科学に関する大学院レベルの多岐にわたるフィールド研究ならびに教育が行われている。具体的には、森林資源情報学の統合的理解とシステム解析、自然環境や生態的構造、社会経済的状况に基づく森林景観の機能的評価と空間ゾーニング技術、持続的森林資源管理技術の体系化、林学の観点からの森林資源上の持続性と生態系としての生産性の向上、が含まれる。

### 森林生態保全学分野

森林生態系が示す種・個体（遺伝子）、個体群、群集、集水域、景観といった階層性に注目し、各階層における多様性とシステムの形成維持メカニズムや多様な森林生物種の生活史の解明を主とした教育研究を行う。また野外操作実験を実施し、森林生態系の保全と生物資源の持続的な再生利用のための手法の提示も目指す。

### 森林資源管理学分野

森林が有する環境、生物、文化としての資源の機能を評価し、これに基づく森林資源の持続的な管理理論の構築と管理技術についての実践的な教育研究を行う。特に当面の課題としては、近年、管理圧の低下から荒廃しつつある人工林・二次林の持続的管理手法の確立に向けた研究を行う。

### 森林環境情報学分野

持続可能な森林管理に向けて、環境影響評価基準・指標の定量化、GIS/GPSによる森林利用機能区分、LCI/LCAによる環境低負荷型生産技術、森林認証・ラベリング等を中心とした実践的・問題解決型研究を展開する。

## 里域生態系部門

山間部から沿岸部に至る広く、変化に富む地域は、人間の関与が様々な強度で継続しており、自然と人間の相互作用、もしくは人間と自然との共生によって生み出される特有の生態系を形成する。この生態系には、農業、林業、水産業という人間の生活を維持するために必要な基本的な生業による二次的自然が含まれるほか、居住域としての農山漁村や都市も含まれる。これらの人間が与えるインパクトを把握することは、現在の地球環境問題の本質の把握にも通じるものであり、本部門ではそのために不可欠な人間－自然相互作用環の解明を多くの視点から実践し、その共生システム構築のための教育研究を行う。

### 里山資源保全学分野

生活圏に接する森林において、人間との相互作用により成立した生態系の特性や機構を明らかにするとともに、多面的なアプローチから、生物多様性および森林の保全、森林と人間との新たな共存に向けた幅広い教育研究を行う。

### 里地生態保全学分野

人里と一部に里山と里海を含む、いわゆる里地に分布する攪乱依存性植生ならびに攪乱依存性植物の起源と歴史および生態的特性を明らかにし、それらの管理保全体系ならびに持続的利用に関する考察を行う。

### 河口域生態学分野

陸域と海域の接点にあたる河口域は、多くの海洋生物の再生産に極めて重要な場であり、生物多様性の宝庫でもある。しかし、一方では人間の生活と生産活動の様々なインパクトが集積する場所でもある。有明海などのモデル的な河口域を対象に、資源生物学的ならびに保全生態学的教育研究を行う。

### 里海生態保全学分野

陸域からの影響も含めた沿岸域の環境特性を把握し、生息する資源生物の生産生態との関係を解明する。とくに、藻場、砂浜域、干潟域などでの仔稚魚の分布、行動、摂餌、成長、生残等を明らかにし、魚介類の成育場としての里海の役割を定性、定量的に評価する。

### 沿岸資源管理学分野

若狭湾西部海域をフィールドとして主要な資源生物の個体群動態を研究し、海洋環境構造や海況変動の影響を明らかにする。さらに、資源生物の分類と生活史・生態特性を調べ、それらの資源変動機構の解明に取り組む。

## 基礎海洋生物学部門

本部門では、主に温帯性海産無脊椎動物を材料として用い、分類学・進化生物学・発生生物学・生理生態学・生物地理学といった様々な基礎生物学的な研究教育活動を、分子レベルから生態系レベルにわたって広範囲に展開している。更なるその研究フィールドを熱帯域・北方域へと地球規模に広げながら、環境生物学や保全生物学といった応用的な領域へと、その研究教育活動の内容を拡大している。

### 海洋生物系統分類学分野

系統分類学は、生物の多様性を認識する基本であり、1922年の瀬戸臨海実験所の創設以来、連綿と続けて来た研究分野である。海洋生物の多様性は非常に高く、多くの未知の事柄が残されている。このような多様性の包括的な解明を目指して教育研究を行う。

### 海洋生物進化形態学分野

形態観察は、生物の多様性を認識するために必須の作業である。本分野では、最新の装置を用いた精密な比較・機能形態学的研究や、分子生物学的手法による形態形成のメカニズムを解明する研究と教育を行う。

### 海洋生物多様性保全学分野

海洋生物の多様性を保全するために、多様な生物が環境の変動に対してどのように反応するのかを明らかにするとともに、瀬戸臨海実験所島島実験地における30年以上にわたる長期観察や、地球規模の環境変動を把握するための国際共同研究の中核的役割を果たす。

# ●● 1. フィールド研活動の記録 ●●

## (1) 主な取り組みの紹介

### 1) 第4回時計台対話集会「むしに教わる森里海連環学」

森林資源管理学分野 吉岡崇仁 教授

芦生研究林を対象として京都大学の21世紀COEプログラム「昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生」研究が実施されている。第4回時計台対話集会は、この研究プログラムとの共催で企画することになった。今回のタイトルである「むしに教わる森里海連環学」は、人類の誕生のはるか以前から地球で生まれ、多様性、生息数ともにきわめて大きな昆虫が、その進化の中で勝ち取ってきた智恵と環境への対処法をわれわれは学ぶべきであり、そのことによってフィールド研が掲げる「森里海連環学」の構築に資するものがあるのではないかと発想で採用されたものである。

フィールド研の白山義久センター長による開会の挨拶、尾池和夫京都大学総長の挨拶に続き、解剖学者でありまた昆虫にも造詣の深い養老孟司東京大学名誉教授による基調講演Ⅰ「虫から見える“森里海”連環」があった。数多くの珍しい昆虫の写真を前に、参加者に語りかけるような講演であった。昆虫分類学者顔負けの内容に加えて、地球環境問題に対する考え方は多くの共感を呼ぶものであった。

来賓講話は、株式会社村田製作所の村田泰隆会長にお願いした。養老氏と同様昆虫少年であった村田会長、「蝶と環境」と題して海外での経験をもとに話された。また、村田製作所の「ムラタセイサク君」の実演もあり、休憩時間中には舞台周辺に多くの参加者が集まり、彼の動きに見入っていた。



養老孟司名誉教授による講演



村田泰隆会長による講演

21世紀COEプログラムの拠点リーダーである藤崎憲治京都大学教授による基調講演Ⅱ「昆虫から見える地球温暖化」では、気温の上昇によって昆虫の分布が変化してきていることを実感させられた。

引き続き、フィールド研における森里海連環学の研究プロジェクトについての現地報告が、仁淀川流域圏：柴田昌三教授、由良川流域圏：山下洋教授、古座川流域圏：梅本信也准教授によってなされた。

最後に、会場との対話が、アウトドア・ライター・天野礼子氏の司会により、会場からの質問に各講演者が答えるという形で進められた。

当日の参加者は、430名を越え、会場となった京都大学百周年時計台記念館の百周年記念ホールはほぼ満席となった。

昨年9月にフィールド研の上賀茂試験地において開催した夏の一般公開で昆虫の観察を行った際、子供のみならず大人の中にも数多くの昆虫ファン、昆虫少年のいることが浮き彫りになったことに加えて、環境を物語るには、次世代を担う子供たちや若者にも訴えかけることが重要であると考えられることから、今回は京都市内の中学校、府内の高等学校にも直接ポスターやチラシを配布して参加を呼びかけた。その甲斐あってか例年は少ない10代から20代の年齢層の参加が多い結果となった。

今回、フィールド研の取組を現地報告という形で紹介したが、参加者へのアンケートでは、具体的な話が聞けたことを高く評価する意見が多く、今後も積極的に成果の発信を心がける必要が強く感じられた。



藤崎憲治教授による講演



“森里海”連環の現地報告



参加者との対話



パネル展の様子

第4回 時計台対話集会

むしに教わる森里海連環学

もり、さと、うみ。

2008年3月15日(土) 13時~16時30分

パネル展  
村田幸雄 展「蝶の写真」  
フィールド研・昆虫COEの  
活動紹介とフィールド研の  
施設及び活動紹介  
午前11時~午後11時  
2階国際ホールにて

- 会場：京都大学百周年時計台記念館 百周年記念ホール
- 主催：京都大学フィールド科学教育研究センター 問い合わせは TEL.075-753-6414・6420 FAX.075-753-6451 E-mail: joho@kais.kyoto-u.ac.jp
- 共催：21世紀COEプログラム「昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生」
- 後援：京都府教育委員会、京都市教育委員会 ●特別協賛：株式会社村田製作所
- 協賛：京都・まいづる立命館地域創造機構、NPO法人エコロジー・カフェ、全日本空輸株式会社、サイファーアソシエーツ株式会社、株式会社大伴社(順不同)

●入場無料(一般公開)：定員 先着500名 申込 不要

当日リーフレット

## 2) 神戸大学・京都大学合同市民公開講座「森と海をめぐる市民公開講座～人・社会・自然を考える～」

里海生態保全学分野 山下 洋 教授

関西地区で日本財団から助成を受けている京都大学フィールド科学教育研究センター（寄付科目；森里海連環学，海域・陸域統合管理論）と神戸大学海事科学部（寄付科目；総合海洋学）が協力して，神戸市内で2回の市民公開講座を開催した。京都大学フィールド研では，沿岸海域の健全な環境の保全と生物資源の持続的な利用のためには，陸域の環境や人間活動との関係が極めて重要であること，また，経済や法律などの視点からいかに陸と海を総合的に管理すべきかについて教育している。神戸大学海事科学部では，港湾都市としての神戸の成立から，海上検疫，海の安全保障，国際海運まで，総合海洋学という科目名の通り，海に関する極めて広い分野から総合的な講義を行っている。本公開講座は，それぞれの大学で学生を対象として行っているこれらの講義の内容を，市民向けに易しく解説することを目的とした。とくに，パネルディスカッションに多くの時間をとり，具体的な問題をとりあげて講師と参加者が質疑・意見交換し，海の環境と資源の管理について，環境学や生物学に加えて環境行政，環境法学，海底鉱物資源管理など多様な観点から理解を深めた。第1回には市民・学生76名，第2回は神戸では珍しい雪にもかかわらず80名の参加があり，会場はほぼ満席となった。本市民公開講座は日本財団からの助成金により開催した。プログラムは以下の通りである。

### 第1回；

開催日時 平成19年11月18日（日）午後13時30分～16時50分

開催場所 神戸国際会館 403号会議室（4階）

講演題目 瀬戸内海に里海をつくる 松田 治（広島大学名誉教授）

わが国の海洋政策と海洋問題 坂元茂樹（神戸大学大学院法学研究科）

パネラー 松田 治，坂元茂樹，山下 洋（京都大学フィールド研）

司会 福島 朋彦（海洋政策研究財団）

### 第2回；

開催日時 平成20年2月3日（日）午後13時30分～16時40分

開催場所 神戸国際会館 402号会議室（4階）

講演題目 二酸化炭素の排出と海洋環境 白山義久（京都大学フィールド研）

海洋鉱物資源の利用と課題 福島朋彦（海洋政策研究財団）

パネラー 白山義久，福島朋彦，石田廣史（神戸大学大学院海事科学研究科），山下 洋（京都大学フィールド研）

司会 深見裕伸（京都大学フィールド研）



### 3) 由良川フォーラム

里海生態保全学分野 山下 洋 教授

京都大学フィールド科学教育研究センターは、河川を通じた森、里、海の生態学的なつながりの機構を解明することを目標に、新しい科学領域として「森里海連環学」の創生に取り組んでいる。由良川の源流が発するフィールド研芦生研究林と由良川河口の舞鶴市にある舞鶴水産実験所では、森里海連環学の核となる研究プログラムとして、由良川流域を中心とした「若狭湾・流域プロジェクト」を実施している。一方、京都府は、平成16年10月の台風23号により北部地域に甚大な被害を受けたことから、災害に強い地域作りを長期的な視点で進めるために、「京都モデルフォレスト運動」など森と流域に関するいくつかの事業を展開している。そのような中で、京都府の北半分を占める由良川流域の様々な情報の整理、環境保全のために活動するNPOなどの諸団体の実態の把握、学官民の交流と学習などを目的として、京大フィールド研は京都府と共同して由良川フォーラムを設立した。

第1回フォーラムを由良川中流に位置する綾部市（平成17年9月3日）、第2回を下流となる舞鶴市（平成18年8月26日）で開催し、平成19年度には第3回を流域の中心都市である福知山市で9月2日に開催した。本フォーラムには毎回120～180名の参加があり、地域に関する情報収集や勉強の場として定着してきているが、第4回（平成20年度）開催地は再び綾部市に戻る予定である。また、京大フィールド研と交流協定を結んでいるNPO法人「エコロジーカフェ」を中心に、京都府漁業協同組合連合会、由良川流域ネットワーク、里山ねっと・あやべ、福知山環境会議、間伐材研究所、山悠々森林サポート舞鶴など、多くのNPO団体の協力を頂いている。第3回までの講演は以下の通りである。

第1回：「森・里・海の連携ー由良川流域エコネットワークの形成に向けて」

- ・ 川の環境を考えるー縄文の川、弥生の川ー 新潟大学工学部 教授 大熊 孝
- ・ 由良川について 舞鶴工業高等専門学校 川合 茂
- ・ 由良川源流の森林の現状 京都府指導林家 小林直人

第2回：「森と川の今を考える」

- ・ 由良川の魚の多様性とルーツ 近畿大学農学部 教授 細谷和海
- ・ いま日本の森の何が問題かー過剰な期待と進まない対策の間で何ができるのかー 東京大学農学生命科学研究科講師 蔵治光一郎

第3回：「森と海へのいざない 心と体の癒しを求めて」

- ・ 身近な里山を利用した健康づくりー森林療法の現状と可能性を考えるー 東京農業大学農学部 准教授 上原 巖
- ・ 若狭湾に出現する生物の多様性と季節変化ー海から発信する地産地消ー 京大フィールド研 准教授 益田玲爾



#### 4) 21世紀 COE プログラム「昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生」

森林環境情報学分野 中島 皇 講師

このプログラムは2004年度に採択になり、今年度で4年目になる（センター年報第3号 p.9 参照）。フィールド科学教育研究センター（フィールド研）ではCOE事業推進担当者が退職等で少なくなっているが、2つのプログラムを実施した。

##### 1. 大学院生が企画し、教える自然観察会

2007年9月1日に上賀茂試験地 夏の一般公開自然観察会（p.62も参照）が開催された。大学院生は研究者の「たまご」という一面を持つと同時に、中学校・高校・大学の先生として後進の指導に当たる教育者の「たまご」の一面も持っている。研究の基礎を積み、誰も知らないことを一つ一つ明らかにして研究者として成長していくことは勿論であるが、そのみでは不十分で、自分の行っている研究を社会に向けて発信し、どのように生きるべきかについての「人生哲学」を語れるような教育者の資質も兼ね備える必要がある。

このような観点から、今回は午後のプログラムの立案や会の進行方法、下見・打合せなど裏方の仕事も含めた実行委員を院生諸君から募るという一歩進んだ教育プログラムを、上賀茂試験地としては季節毎の一般公開の夏バージョンという位置付けで行った。参加者募集は上賀茂試験地が担当し、ポスター、ホームページや新聞報道などによって、京阪神一円から定員と同じ50名の応募があり、45名が参加した。

夜の森での一般公開は、フィールド研でもあまり行われておらず、上賀茂試験地としても初めての試みであった。班によっては、各自の懐中電灯を消してじっと耳を澄まし、目を凝らしてみた。多くの人にとって真っ暗な森は、初めての経験だったようである。林道脇に準備したライトトラップには多くの虫が集まり、この森に色々な種類の昆虫がいることが実感出来た。



真っ暗な林道を歩く参加者

第4回 21世紀COEフィールド科学教育研究センター  
上賀茂試験地  
【夏の一般公開自然観察会】

開催日：2007年9月1日(土) 13:00～21:00  
場 所：京都大学フィールド科学教育研究センター 上賀茂試験地  
内 容：昆虫や森林について、実物を見たり、触ったりしながら、大学院生や試験地職員から解説を聞きます。また、夜の森でも観察を行います。

対 象：小学4年生～高校生及び保護者  
定 員：50名 参加費：無 料

プログラム(主要部分)

◎午後の部  
「昆虫・森林に関する実習と解説」  
福島慶太郎(森林育成学D)  
横井 智之(昆虫生態学D)  
堀井 理(生物顕微鏡化学D)  
石井ゆかり(森林生態学D)ほか  
◎夕食(後自費)

◎夜の部  
「夜の森林観察と昆虫観察」  
高橋 美穂(森林育成学D)  
高田 聖三(昆虫生態学D)  
鈴木 紀之(昆虫生態学D)  
上賀茂試験地技術職員ほか

申し込み方法  
開催日時：小学4年生～高校生及び保護者  
募集方法：必要事項(氏名・学年(年齢)保護者  
の氏名)・性別・住所・電話番号)を申込の上、  
返信ハガキかメールにて、お申し込み下  
さい。

場 所：9月1日(土) (必着)  
集合時間がございますので、詳細は下記申すま  
たは上賀茂試験地(075-781-2404)にお問い合わせ  
下さい。

主 催：21世紀COEプログラム「昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生」  
京都大学フィールド科学教育研究センター

<http://fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/kami/>  
または<http://www.21coe-msect.kais.kyoto-u.ac.jp/>

ポスター

##### 2. 第4回時計台対話集会 「むし」に教わる森里海連環学 (p.4 参照)

2008年3月15日に、毎年恒例の対話集会が昆虫COEとの共催で行われた。参加者430名を越え、時計台記念館のホールがほぼ満席となった。環境を語るには、次世代を担う子供たちや若者にも訴えかけることが重要であると考え、京都市内の中学校、府内の高等学校にも直接ポスターやチラシを配布して参加を呼びかけた。その甲斐あってか例年は少ない10代の参加者が多い結果となった。講演者の魅力もさることながら、むしの人気の高さと一般の人にとって馴染み深いものであことに驚かされた。ただ少し残念だったのは、力作揃いのポスターが時間的な制限があって十分活用されていなかったことで、今後検討をすべきであろう。

どちらのプログラムもフィールド科学教育研究センターとして、昆虫COEの教育プログラムに大きく貢献したと自負している。

## 5) 京都大学 2007 年度シニアキャンパスへの参加

里山資源保全学分野 柴田昌三 教授

京都大学が 2005 年度から開催しているシニアキャンパスに、フィールド研は 2007 年度も積極的に参画した。昨年度までの二年間は上賀茂試験地を舞台にしたフィールド学習「森を考える」を提供していたが、今年度は南丹市美山町を舞台としたコースであるフィールド学習「芦生をめぐる」が設定されることとなり、そのコースの一部として芦生研究林を訪問地として組み込んだ。シニアキャンパスのいくつかのコースの中で、本部から遠く離れた地が訪問地として設定されたのは初めてのことであるが、京都府のご協力のもとに成功裡に行くことができた。このコースでは日帰りではなく、美山町内に宿泊する日程が組まれた。その結果、このコースの参加者は周辺の自然と文化を存分に堪能してから町内の宿泊施設に宿泊することとなったが、翌日は午前中に吉田キャンパスで行われる行事に間に合うように帰学する強行軍となった。

芦生研究林への訪問者は 11 名であった。午前 9 時に吉田キャンパスを出発した美山町を訪問する二班は、11 時頃に南丹市美山町の中地区に到着し、ここで、市内の茅葺き集落を見学する班と芦生研究林を訪問する班に分かれた。芦生研究林訪問班は、ここで芦生研究林から迎えにきたマイクロバスに乗り換え、芦生研究林最奥部の長治谷を目指した。長治谷への到着は昼頃であり、ここで芦生研究林長芝正己准教授の解説を受けたのち、やや遅めの昼食をとった。このコースを選択された参加者はすべてが自然を心から愛でる方々であり、わずかな滞在時間ではあったが、その間に長治谷周辺の自然を満喫していただけたと信じている。また、滞在中には様々な意見や質問が飛び出した。その多くは、自然の荒廃を憂えた上での積極的意見、目の前に広がる自然に対する感想などであり、参加者の熱心な雰囲気がスタッフの気苦労を晴らしてくれる雰囲気を作り出していただけたことはうれしいことであった。



## 6) 和歌山研究林における社会連携活動

森林生態保全学分野 徳地直子 准教授

紀伊半島の山岳地帯に位置する和歌山研究林は、1926年の開設以来、スギ・ヒノキの植栽を中心として、人工林施業に関する演習の場として活用されてきた。そのため、人工林率は全域の平均でも50%を超えており、本センターの研究林のうち最も高い。しかし、近年は、林業や地域のありかたそのものが変化する中で、大学における研究と教育だけではなく、地域に開かれた社会連携活動にも力を入れている。

2002年度から実施している「ウッズサイエンス」は、和歌山県立有田中央高等学校清水分校と共催して3年生の希望者を対象に実施している林業に関する週1回2時間の授業である。彼らは清水分校から約30分かけ、毎週1日午後いっぱいをして和歌山研究林で過ごすためにやってくる。授業では、地域の主要な産業である林業について学習し、森林内での実習を通して自然の素晴らしさに触れ、「緑を守ることの大切さ」を身につけ、また、身の周りの自然環境について自ら考えまとめる力の習得を目指している。主な内容は、「森の仕組みと働き」、「木材利用の現状と日本林業」などの講義と、コンパスを使っての測量、樹木識別、チェーンソーなどの林業機械を使っての間伐作業などの実習である。都会からみると山村では森林は身近にあるように思えるが、普段森林と接することが少なくなっており、講義を通じて故郷を再認識する機会になっているようだ。

その他、研究林を学びの場とする社会貢献活動として、同じく有田中央高等学校清水分校の1年生には、5月に「総合的な学習」として、森林ウォークと樹木観察、「森林の役割について」の講義を行った。また、夏休みには、清水を離れて他地域の自然・産業・文化を体験することによって、ふるさとの課題を理解し、その将来について考えることを目的に、京都府にある本センターの芦生研究林への1泊2日の体験旅行も実施している。芦生研究林の森林散策をし、夜には文化体験として芦生の伝統行事である火祭り（あげ松）を見学した。

また、有田川町立の八幡小学校5年生と田殿小学校4年生に対して、「森は友だち 森林の町清水」および「森とあそぶ・まなぶ」をテーマとして、樹木識別学習や植林体験、間伐作業体験、「森林について」の講義などを実施した。さらに、田殿小学校においては、小学校に研究林教職員が出向いて、森の大切さを水から学ぶ「雨と川の水の違い」について学習会を行った。



## 7) 京大白浜水族館における社会連携活動

海洋生物多様性保全学分野 白山義久 教授

瀬戸臨海実験所は、1930年より実験水槽室を水族館（通称：京都大学白浜水族館）として一般公開している。観光地白浜という土地柄から、以前は年間10万人を超える来館者を数えたが、近年はバブル経済の崩壊によって白浜への観光客が減少したために、水族館を訪れる人も減少の一途をたどり、平成15年度には、5万人台にまで落ち込んだ。この減少傾向に歯止めをかけるべく、瀬戸臨海実験所では平成16年度から職員教員が一体となって取組みを始めた。

まず4月から開館時間を従来より30分延長し、9時から17時30分までとした。これは夏季の観光客をあてこんだもので、幸い同年度の入場者は年末まで前年比約4%増で推移していた。さらに同年度から職員の勤務体制を工夫して、従来は閉館していた正月休み（12月29日から1月3日）も水族館を開館し、完全年中無休で営業することとした。この期間の今年の入館者数はちょうど2,000名で、大きな成果をあげることができた。

また、平成16年度より当館では小・中学校の長期休業期間に、実験所教員と飼育展示担当の技術職員の8名が交替で展示生物や飼育設備を解説するイベント、解説ツアーを開催している。平成19年度の冬休みには、一般に馴染みの少ないサンゴ、カニ、タコ、ウニなど無脊椎動物の特徴・生態などを解説する無脊椎動物解説ツアーと、水槽の裏側に入り濾過槽や循環ポンプなど飼育設備を見学する水族館の裏側ツアーを、ほぼ毎日開催した。期間中は小中学生の入館料を無料とし、広報活動としてポスターを周辺市町の学校、町商工会、マスコミに配布している。テレビ・新聞等の取材を受けることもある。今年度は16日間で延べ289人の参加があり、一般に定着してきたことがうかがえる。従来から開館していた日の入場者数も昨年度より増やすことに成功した。今後も瀬戸臨海実験所では京都大学最大の市民への窓口として（水族館の入館者数は、本学総合博物館のほぼ3倍にのぼる）水族館の入館者を増やすためのあらゆる努力をしていきたいと考えている。



水族館地階のポンプ室で各種機器の機能を解説する太田満技術職員



水族館第2水槽室裏で水族館の水管理システムを解説する山本泰司技術職員

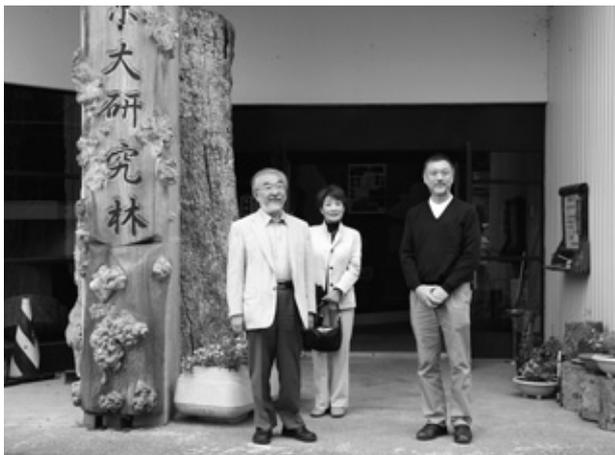
## 8) 尾池総長の北海道研究林視察

海洋生物多様性保全学分野 白山義久 教授

平成19年8月18日から19日の日程で、尾池和夫総長が御夫人とともにフィールド研の北海道研究林を視察された。18日は、佐藤技術班長の運転で、釧路市内のホテルを出発し、まず釧路湿原の景観をご覧になり、その後北海道研究林標茶区に到着された。標茶区では、川合事務掛長から概要説明を受けた後、研究棟、機材倉庫、学生宿舎、職員宿舎などを見学された。総長は特に研究棟の入口に置いてある、巨大なミズナラの丸太に大いに感激されていた。また機材倉庫では、古い“製材用のこぎり”などに関心を持たれていた。学生宿舎については、現状が男女別室になっていない点について、男女共同参画社会の形成が政府の方針となっていることから、早急に改修する必要があるとの指摘をされた。また職員宿舎については、十分な耐寒仕様になっていないのではないかと心配をされた。施設見学後、長尾前総長がおみえになったときと同様に記念の植樹をしていただいた。まだ2メートル程度の樹高のミヤマザクラを植えられた後、「花を見にまた来たい」とおっしゃっていた。そして、再度研究棟内にもどられてから、「大地」と視察の印象を総括された色紙をしたためていただいた。その後、周辺に広がる牧場に隣接して設置されているキャンプ場の中にあるレストランで食事をされ、摩周湖を観光してから鶴居村の宿舎ホテルへと戻られた。

19日は鶴居村のホテルを出発し、標茶町コッタロでタンチョウヅルの餌付けをされている中本夫妻宅を訪れ、タンチョウヅルを間近でご覧になり説明を受け感激されていた。その後白糠にむかわれて、北海道研究林白糠区の5・6林班を車中から見学され、天然木の太いトドマツに感心されていた。その後白糠で昼食を取られ釧路空港より帰京された。

今回の視察には、事務部長、秘書室、北海道研究林の職員のみなさまなどに大変お世話になった。総長は京都大学におけるフィールド実習の重要性を常日頃から強調されているが、北海道研究林の管理・保全する森林の高い価値を大いに評価され、もっと学生がここを訪れる機会が増えるよう、われわれの努力を大いに期待されていた。フィールド研としても、森里海連環学実習をはじめとする多様な実習だけでなく、大学院教育や全国の研究者による自然史研究などにおいても、この貴重な研究林をより活用できるようにしていく必要があると考えている。



標茶区研究棟玄関前にあるミズナラの巨大な丸太の前で尾池総長夫妻と筆者



記念植樹をされる総長夫妻

## 9) 全学共通科目 (リレー講義)

### ①「海域・陸域統合管理論」

海洋生物多様性保全学分野 白山義久 教授

「海域・陸域統合管理論」は、リレー講義形式により、平成19年10月5日から平成20年1月11日まで13回、吉田南総合館共北27号室（金曜日3限目13:00～14:30）において開講された。対象は、文系、理系を問わず1回生以上のすべての学年とした。講師、内容は以下の通りである。

- |           |              |                      |                                 |
|-----------|--------------|----------------------|---------------------------------|
| (1)       | 10/ 5        | イントロダクション            | － 白山義久 (フィールド研教授)               |
| (2) (3)   | 10/12, 10/19 | 沿岸海洋学の基礎             | － 白山義久 (フィールド研教授)               |
| (4) (5)   | 10/26, 11/ 2 | 河川管理と沿岸海洋との連環        | － 萱場祐一 (国土木研究所自然共生研究センター長)      |
| (6) (7)   | 11/ 9, 11/16 | 森里と沿岸海洋との連環          | － 西村和雄 (フィールド研講師)               |
| (8) (9)   | 11/30, 12/ 7 | 森里海の持続的な経済マネジメントシステム | － 有路昌彦 (アマタ株式会社持続可能経済研究所・主席研究員) |
| (10) (11) | 12/14, 12/21 | 沿岸管理と法律              | － 磯崎博司 (明治学院大学教授)               |
| (12) (13) | 12/26, 1/11  | 統合的沿岸環境管理論           | － 松田 治 (広島大学名誉教授)               |

受講者の人数は73名と昨年よりも残念ながら減少した。受講者の学部の分布状況を見ると、理科系が31名（農学部、理学部、工学部、医学部、総合人間学部）、文科系は42名（経済学部、文学部、法学部、教育学部）であり、むしろ文科系学部生の関心の高さが顕著であった。とくに、経済学部の学生が29名を占めて学部別ではトップであり、講義がめざす「将来の経済界を支える学生に統合管理の基礎知識を修得させる」という目標が達成されつつあるといえよう。一方、理科系では農学部が圧倒的多数を占めており、他学部へのさらなる浸透の努力が必要であると考えられた。学年の分布を見ると、1回生が47名、2回生以上が25名となっており、森里海連環学に比べて高学年の学生が多い。

登録した73名のうち、合格して単位を得たものは51名と比較的高い合格率（70%）であった。このことは、講義の内容が充実していて、学生に継続して興味を持たせることができたものと評価できる。また今年度は大学コンソーシアム京都に本講義が開放され、3名が受講して全員が単位を取得した。講義の最終回にアンケート形式で収集した結果をみると、「本講義により知的に刺激された」が91%、「内容をよく理解できた」が85%、「国土の環境管理に関する問題点が理解できた」が80%など、今回の講義に対する学生の評価は非常に高いものであった。



## ②「森里海連環学－森里海のつながりと分断－」

里海生態保全学分野 山下 洋 教授

リレー講義形式により、平成19年10月5日から平成20年1月11日まで13回、吉田南総合館共北27号室（金曜日4限目14:45～16:15）において開講された。対象は、文系、理系を問わず1回生から4回生までとした。

受講者の人数は94名であり、学部の分布状況を見ると、理科系は49名（農学部、理学部、医学部、薬学部、総合人間学部）、文科系は45名（経済学部、文学部、法学部、教育学部）であった。平成19年度は理科系と文科系の受講生割合がほぼ同じとなったが、昨年度の理科系58名、文科系81名（合計139名）と比較すると総数の減少が大きく、特に文科系の学生の受講が減少した。文科系の学生の減少の原因として、講師の意識がどうしても理科系に偏るために、文科系の学生には難しい内容となっている可能性が考えられる。また、環境変化に直接関係することになる工学部からの受講生が無かった。来年度以降の課題として、環境経済、環境法学、環境社会学などの文系的要素をより強めること、環境修復など工学的視点を入れることの2点を検討し、地球環境を考えるうえでの基礎的教養科学をわかりやすく伝える工夫の必要がある。学年の分布を見ると、1回生が73%を占めた。将来の方向性に自由度があり知識旺盛な学生が、この講義をきっかけとして環境や生態系を広い視野で見ることの重要性を認識することを期待している。

- |      |       |                       |                                 |
|------|-------|-----------------------|---------------------------------|
| (1)  | 10/ 5 | 森と里山の生態               | － 柴田昌三（フィールド研教授）                |
| (2)  | 10/12 | 森里海間の物質循環 栄養塩         | － 徳地直子（フィールド研准教授）               |
| (3)  | 10/19 | 森里海間の物質循環 水と土砂        | － 中島 皇（フィールド研講師）                |
| (4)  | 10/26 | 森の恵みと海の恵み             | － 畠山重篤（牡蠣の森を慕う会代表、フィールド研社会連携教授） |
| (5)  | 11/ 2 | 森里海の連環と経済             | － 浅野耕太（人間・環境学研究科准教授）            |
| (6)  | 11/ 9 | 里海の生態と保全              | － 山下 洋（フィールド研教授）                |
| (7)  | 11/16 | 森里海間の物質循環 ミネラル成分      | － 中野孝教（地球研教授）                   |
| (8)  | 11/30 | 森林の利用と保全              | － 芝 正己（フィールド研准教授）               |
| (9)  | 12/ 7 | 森から未来をみる              | － C. W. ニコル（作家、フィールド研社会連携教授）    |
| (10) | 12/14 | 河口域の物質循環 栄養塩          | － 藤原建紀（農学研究科教授）                 |
| (11) | 12/21 | 河川生態系の構造と機能           | － 竹門康弘（防災研准教授）                  |
| (12) | 12/26 | 流域環境における人間・自然相互作用系の研究 | － 吉岡崇仁（フィールド研教授）                |
| (13) | 1/11  | 沿岸海洋域の生態              | － 白山義久（フィールド研教授）                |



## ③「森林学」

森林生態保全学分野 徳地直子 准教授

近年の生活様式の変化や、地球規模での環境変動は、身近な近郊林だけでなく遠隔地にある森林生態系にも大きな変化をおよぼしている。この講義では、森林について、森林をとりまく社会情勢、林業の現状、森林の生態学的把握、森林の生み出す機能、森林をよりよく利用するための方策など、多方面から森林を解析し、総合的に森林に対する理解を深めることを目的としている。講義の形式は、森林を考える場合、自然科学の面のみならず、林業などを含んだ人間とのかかわりを考えることが欠かせないため、各分野の専門の教員によるリレー講義としている。

講義では、まず、安藤信准教授により日本の森林・植生の特徴について紹介された。次いで、柴田昌三教授により日本の森林の現況やわが国の森林面積の4割を占める人工林とその施業について、さらに西村和雄講師から里山の現状といった、人との関わりの深い森林について講義がなされた。これらの森林が成立する過程や維持機構について、寄元道徳助教が森林のダイナミズムと樹木の生態（2回）について紹介し、中島皇講師により森林と水・土（2回）の関係について述べられた。さらに徳地直子によりそれらが生み出す森林生態系の機能（2回）について考えた。また、今後の森林とのかかわりの上で、重要な森林政策について農学研究科国際農林経済学の川村誠准教授が講義され、芝正己准教授による森林認証・CoC制度と生産システムについての考察、坂野上なお助教による木材の消費・流通システム（2回）が考察され、森林の持続可能な利用についての総合的な講義が行われた。



## ④「水圏生物学入門」

海洋生物進化形態学分野 宮崎勝己 講師

前年度に引き続き、全学共通科目として「水圏生物学入門」を、前期（木曜・4限）に提供した。

担当講師は全員が前年度からの引き続きで、地球の水圏、すなわち「水の世界」に生息する様々な生き物たちの特徴とその営み、そして地球環境との関連について、それぞれの観点から解説・論究を行った。全講師が二年目ということで、担当の各講師の講義内容も更に洗練され、受講生の満足度の高さも前年度に引き続き高かったことが、レポートの内容からもうかがえるが、今年度新たに二点の問題点が生じた。

一点目は教室の容量の問題である。最終的な履修登録者数は431名に達したため、定員125名の教室から254名の教室に変更したが、毎回イスに座りきれない学生が、通路で講義を受ける事態となってしまった。次年度からは、最大教室（定員376名）での開講や、受講制限などの対応を考えている。

もう一点の問題は、不正レポート疑惑である。講義の最後に提出させ出席確認ともしているレポートの中に、字体・文面が酷似した複数組のレポートを発見されたため、受講生全員に警告のメールを流し、またレポート用紙についても、一人一枚ずつ厳密に配布するという処置を行ったところ、とりあえず以降の疑惑レポートは見出されなくなった。

本年度は、以下の順番・題名で講義を行った。（各講師の所属・役職はいずれも当時のもの）

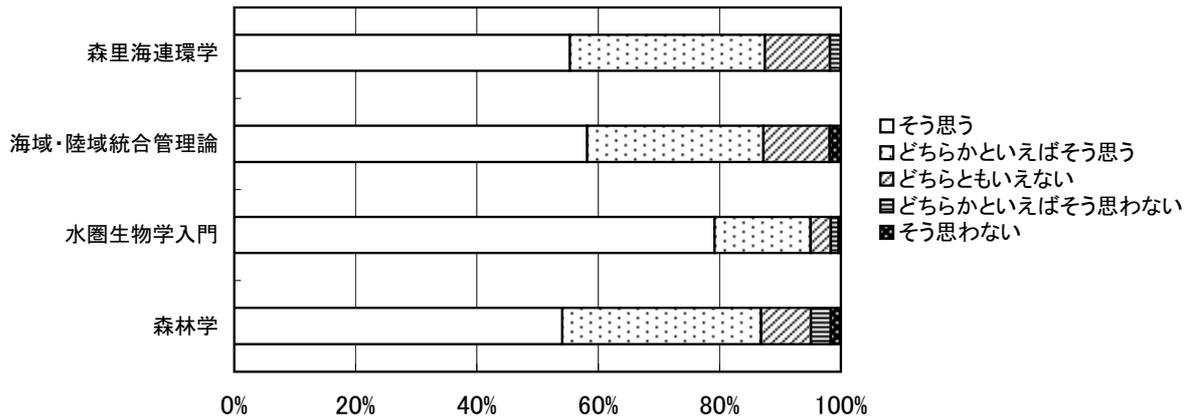
- |                                   |                           |
|-----------------------------------|---------------------------|
| (1) 水圏生物学入門オリエンテーション              | 宮崎勝己（フィールド研・瀬戸臨海実験所・講師）   |
| (2) 深海の生物学                        | 白山義久（フィールド研・瀬戸臨海実験所・教授）   |
| (3) 渚の自然史                         | 加藤 真（人間・環境学研究科・教授）        |
| (4) ミクロ生態系の大きな働きーフィールドで探る，地球規模で探る | 永田 俊（生態学研究センター・教授）        |
| (5) 海産生物の生き残り機構                   | 山下 洋（フィールド研・舞鶴水産実験所・教授）   |
| (6) クラゲの生物学                       | 久保田信（フィールド研・瀬戸臨海実験所・准教授）  |
| (7) 魚の初期生活史：小さな卵から大きな体へ           | 田川正朋（フィールド研・河口域生態学分野・准教授） |
| (8) 潜水調査の可能性と限界                   | 益田玲爾（フィールド研・舞鶴水産実験所・准教授）  |
| (9) 水圏の植物学：磯焼けと藻場造成について           | 鯨坂哲朗（農学研究科・助教）            |
| (10) 川と海を移動するエビ類の生物学              | 大和茂之（フィールド研・瀬戸臨海実験所・助教）   |
| (11) サンゴの生物学                      | 深見裕伸（フィールド研・瀬戸臨海実験所・助教）   |
| (12) 日本海と太平洋：生物の分布と環境             | 上野正博（フィールド研・舞鶴水産実験所・助教）   |
| (13) ウミグモの生物学/水圏生物学入門総括           | 宮崎勝己（フィールド研・瀬戸臨海実験所・講師）   |



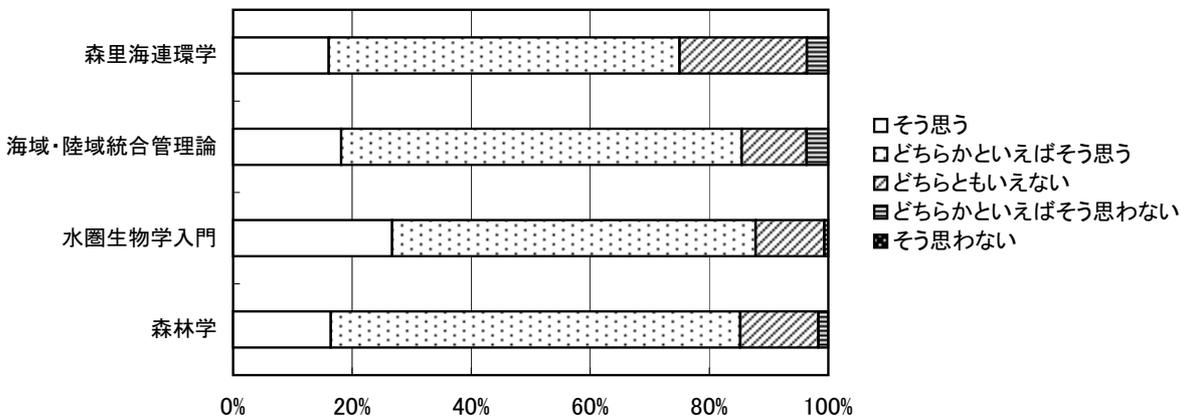
⑤全学共通科目に対するアンケート結果

このアンケートは、フィールド科学教育研究センターのリレー講義を今後より充実したものにしていいため、学生の率直な意見を求めたものである。有効回答者数は、森里海連環学：56名、海域・陸域統合管理論：55名、水圏生物学入門：303名、森林学：61名であった。以下、設問ごとに、集計結果をグラフで表示した。

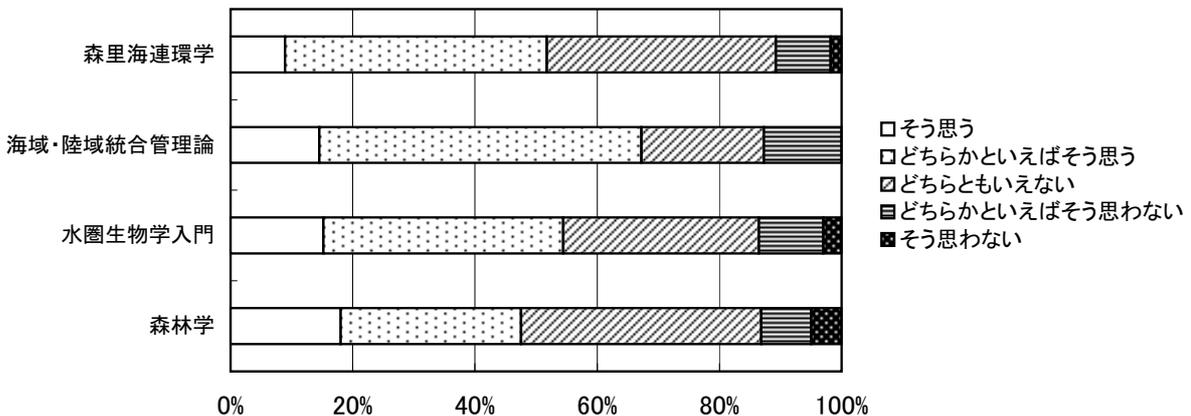
○この授業にはほとんど出席した



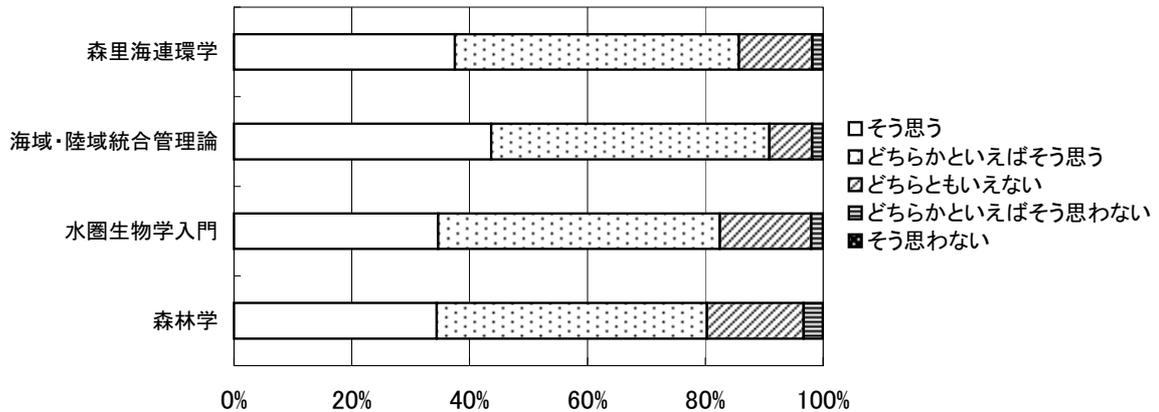
○この授業の内容はよく理解できた



○この授業は体系的であった

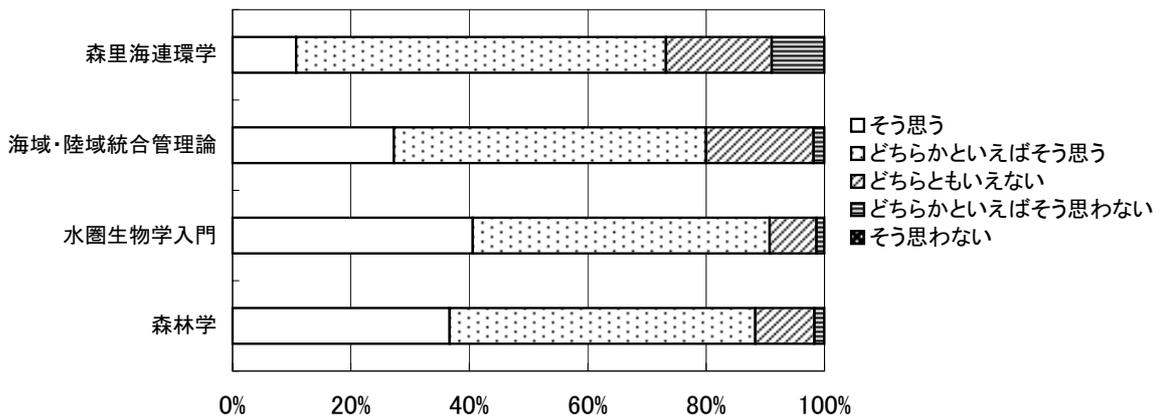


○この授業で知的に刺激された

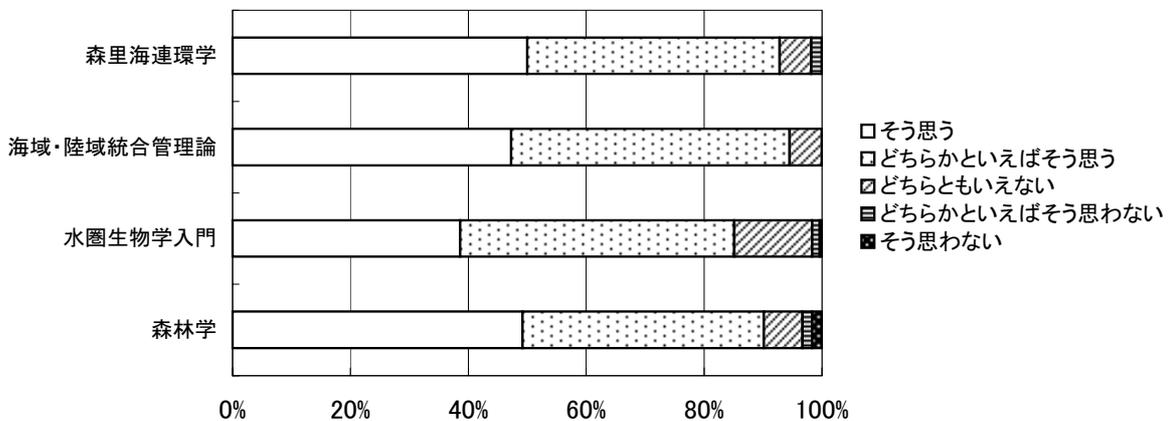


○この授業で森から海までのつながりの機構と問題点がよく理解できた (森里海連環学)

- 〃 国土の環境管理に関する問題点が (海域・陸域統合管理論)
- 〃 水圏にすむ生物の特性や生きざまなどが (水圏生物学入門)
- 〃 森林の機構と問題点が (森林学)



○この授業は自分の学習にとって有益であった



## 10) 森里海連環学実習

### ①森里海連環学実習 A「芦生研究林－由良川－丹後海コース」

里海生態保全学分野 山下 洋 教授

京都府の北部を流れる由良川は、京都大学芦生研究林を源流とし若狭湾の西部（丹後海）に注ぐ。本実習では、森林域、里域、農地、都市などの陸域の環境が、由良川の水質、生物多様性、沿岸域の生物環境にどのような影響を与えているかを分析し、川を通じた森から海までの流域を生態系の複合ユニットとして、科学的に捉える視点を育成することを目的としている。芦生研究林、大江山と舞鶴市内の人工林における森林構造観察、由良川に沿って源流域から中流域の和知、綾部、福知山を經由して河口域までの水質（水温、塩分、電気伝導度、溶存酸素、COD、硝酸態窒素、アンモニア態窒素、懸濁物質）調査、魚類、水生昆虫などの水生生物調査および土地利用様式の調査を行った。陸域から河川への物質流入、源流域から河口までの水圏環境の変化と水生動物の群集構造や多様性との関係を分析し、森林管理や人間活動との関係も含めて考察した。実習に参加した学生は10名（医学部1名、総合人間学部1名、理学部2名、農学部6名）であり、これに加えて、高等学校教育講座第10期研修生として、京都府立海洋高等学校教諭3名が参加した。

日程と実習内容は以下の通りである。

8月6日（月）

京大農学部発芦生研究林へ移動（バスの中でガイダンス）、芦生研究林、由良川源流域調査（杉尾峠～長治谷～下谷）、講義「芦生研究林の構造」

8月7日（火）

由良川上中流域調査（芦生～綾部）、講義：「由良川流域の里山と農村」

8月8日（水）

舞鶴市の人工林と大江山の人工林観察、由良川下流域調査、標本分析及びデータ解析法の説明

8月9日（木）

水質分析、魚介類・水生昆虫・汽水性無脊椎動物同定、データ解析、レポート作成

8月10日（金）

レポート作成と研究報告会、反省会の後京都大学農学部へ移動



## ②森里海連環学実習 B「紀伊半島の森と里と海」

里地生態保全学分野 梅本信也 准教授

本実習は、紀伊半島南部の古座川流域と河口沖に広がる串本湾岸域までの自然域と里域（里山，里地，里海，里川）を対象に、フィールド調査の理論と実践的手法を学び、現地観察や聞き取り、各域から得られる各種サンプルの分析データに基づいて、当該地域の連環の諸相について考究する実習である。フィールド研紀伊大島実験所を宿泊拠点として、古座川上流に位置する北海道大学北方生物圏フィールド科学センター和歌山研究林と共催で開催している。今年度は、9月21日（金）～9月27日（木）に開催し、北海道大学生10名、京都大学生9名（農学部生6名・工学部生2名・総合人間科学部生1名）が参加した。参加教職員は、北大和歌山研究林林長：野田真人，北大技術職員1名，フィールド研：梅本・徳地・宮崎・大和・深見，日程と実習内容は以下の通りである。

- 21日（金） 13時半，JR 串本駅前に集合，14時から紀伊大島実験所にてガイダンス，15時から串本湾岸，古座川流域の巡検（マイクロバス），ミニ講義・質疑応答
- 22日（土） 森・里・川・海およびその相互連環性の高いテーマを参考にした仮説（課題）作り，KJ法を活用した実習班分け（「外洋と河川」「人と川の暮らし」「ダムのある川とない川の生物相比較」「ダム上流下流域の諸比較」を中心課題とする3～6名からなる4チームを編成），それぞれの担当教員と共に巡検。
- 23日（日）～24日（月） 4チームそれぞれに，テーマ別現地調査ならびに分析，検証，作戦会議，議論（上流地域に関係する2チームは北大和歌山研究林を調査基地とし，2泊）。
- 25日（火） 古座川合流地点で4チームを集結し，合同実習として，チーム単位で河川の水質，流量測定や生物多様性を調査した。教員による専門的なミニ講義（環境，生物，地質，文化）も河川敷で実施された。午後には紀伊大島実験所に全員が戻り，紀伊大島に位置する江戸期からの魚付林を海側から見学した。夕食以降はそれぞれのチームが収集した諸データを全員で共有した。学生たちは明日の発表に備えた。
- 26日（水） 朝8時半から紀伊大島実験所講義室で各班が交替で調査内容を発表し，活発な質疑応答が行われた。参加教員の専門的意見や森里海連環学解説を踏まえて，各チームは追加現地調査や資料収集を行い，夕刻前から各自による報告書作成が始まった。
- 27日（木） 片付け，報告書作成提出・アンケート提出，解散。

今回の森里海連環学実習・紀伊半島編では，これまでの反省をふまえて，室内講義的実習を現場発見を誘導しながらのプロジェクト型実習にした。また，議論を不活性化する大人数メール会議を止め，実質責任者が早め早めに膝を詰めて相談，さらに教員との意識や認識の共有を図った。今後さらに，教員による実習と実習地域に対する理解を深化させることも必要である。



古座川中流の一枚岩前で



支流の小川での流速分布測定

### ③森里海連環学実習 C 「夏の北海道実習」

森林資源管理学分野 吉岡崇仁 教授

9月2日から8日に森里海連環学実習Cを実施した。この実習は、京都大学フィールド科学教育研究センターの北海道研究林標茶区と北海道大学北方生物圏フィールド科学研究センターの厚岸臨海実験所を拠点とし、森から沿岸までの生態系の間および人間活動との連環を野外観測によって学ぼうとするものである。2007年度は、京都大学工学部・農学部・総合人間学部の1~4回生、北海道大学理学部・農学部・水産学部の1回生、計16名の受講生が参加した。

実習課題は、「水源域の森林・土壌調査」（樹木の識別、天然林の毎木調査、天然林の土壌調査、天然林と人工林の比較）、「牧草地の土壌調査」、「上流（自然）域の水質・水生生物調査」、「中流（牧草地）域の水質・水生生物調査」、「下流（湿原）域の水質・湿原堆積物調査」、「厚岸湖の水質・水生生物と河口域の湿原堆積物調査」であった。

（担当教員は、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター：柴田英昭・北海道大学：向井宏名誉教授・フィールド研：吉岡崇仁・安藤 信・中山耕至・甲斐嘉晃）

#### 実習の概要

実習を始めるにあたり、実習生は、4名ずつの班構成とし、最終発表において、各班にそれぞれ「森」「川」「海」「里」という異なる場の観点にたって森里海の連環について考察することを課した。

京大フィールド研の北海道研究林（標茶区）での実習では、毎木調査（樹種同定・胸高直径）、下層植生（ササ）の現存量推定、土壌断面の観察などを行った。研究林に隣接する民間酪農地を借りて牧草地の土壌断面を観察し、森林土壌との違いを学んだ。また、研究林内を流れる溪流では、水質調査と水生生物の観察を行った。

別寒辺牛川調査では、上流から下流にかけての数点にわたり、水質調査、河川生物採取を行った。魚類採取にあたっては、投網・三角網の使用方法を学んだ。採取された魚類のうち、大型個体については、胃内容物を現場で採取したのち川に戻し、小型の個体及びエビなどはホルマリン固定し、厚岸臨海実験所での種の同定と食性解析に供した。また、途中の湿原では、堆積過程についての解説を受けた上で、湿原堆積物をコア採取し観察した。

厚岸湖では、海草藻場での水生生物の採取のほか堆積物コア採取を行った。北大北方生物圏フィールド科学センター厚岸臨海実験所では、別寒辺牛川および厚岸湖で採取した水生生物の同定と魚類の食性解析を行った。

実習の内容は、森林・土壌・河川・湖沼における生物・化学・物理と盛りだくさんであり、参加学生は連日遅くまでレポート作成に取り組んでいた。最終発表にむけて、各班はそれぞれの観点に立って、生態系や人間活動の連環について、実習で得られた結果をもとに考察を行った。とりまとめの時間は限られたものであったが、新鮮な感覚で実習中に得たデータと経験をもとに発表がなされ、観点の違いによる発表内容を相互に比較することで、森・川・海・里の連環学の概要を習得した。



林床植生（ササ）調査と森林土壌調査

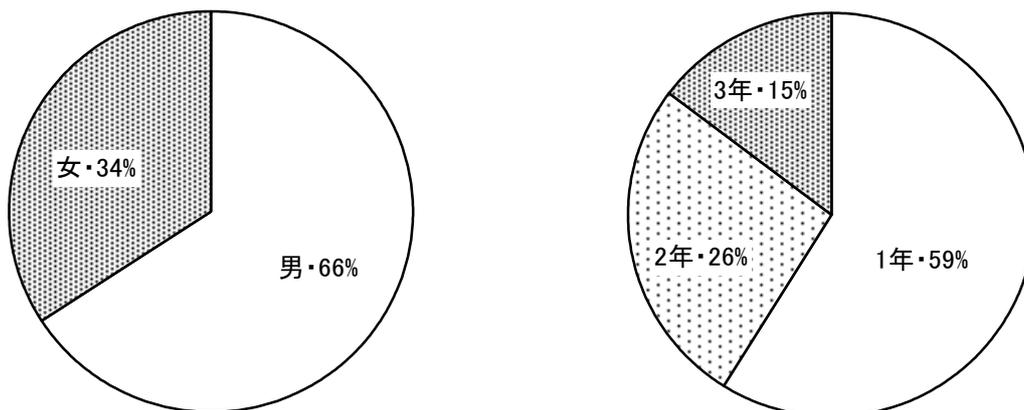


別寒辺牛川での水生生物採取

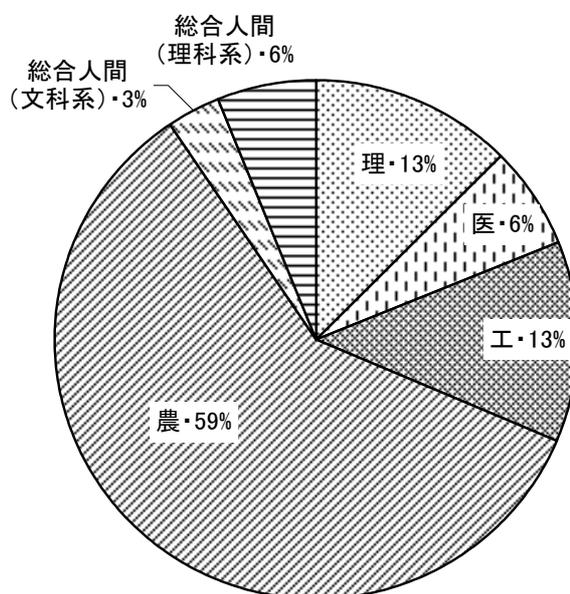
④森里海連環学実習（ABC）に関するアンケート結果

このアンケートは、フィールド科学教育研究センターの森里海連環学実習を今後より充実したものにしていくため、学生の率直な意見を求めたものである。アンケートは10設問からなっており、有効回答者数は35名であった。以下、設問ごとに、集計結果をグラフで表示した。

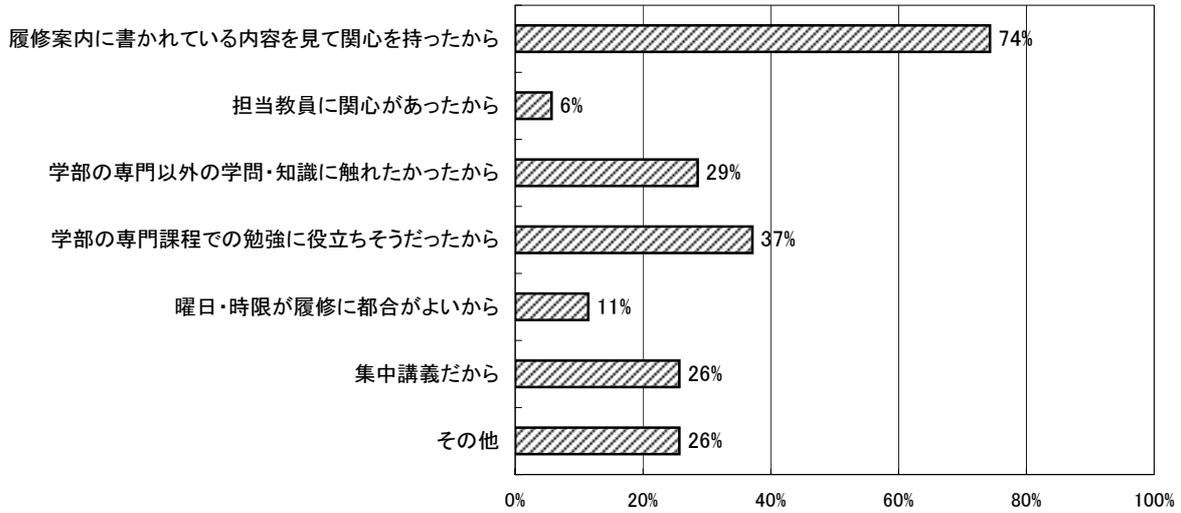
Q1 あなたの性別と学年を答えて下さい。



Q2 あなたの所属学部を答えて下さい。



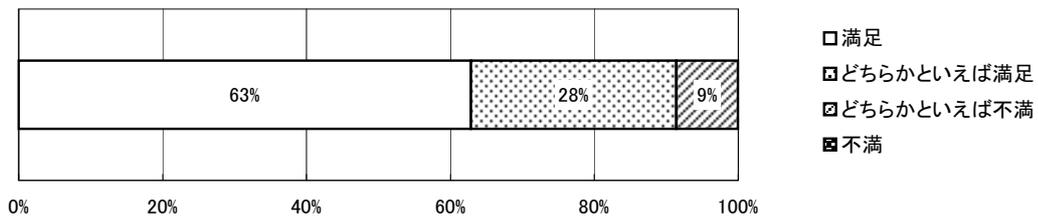
Q3 この実習を受講することにした理由を教えてください。(複数回答可)



「その他」…… ・フィールドワークを体験したかった。  
・今後の調査の参考

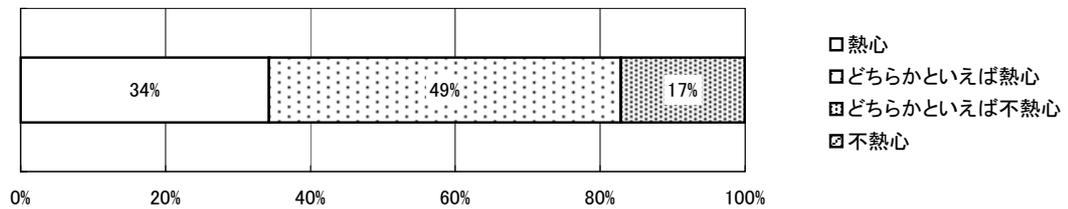
Q4 この実習を受講しての感想をうかがいます。

(1) この実習の授業内容に満足していますか。

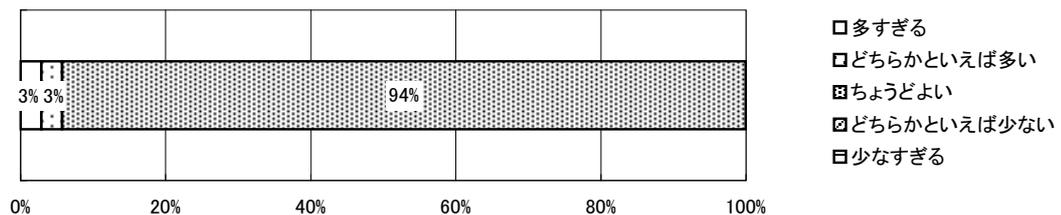


「不満」の理由…… ・河川調査に偏りがあった。(C)

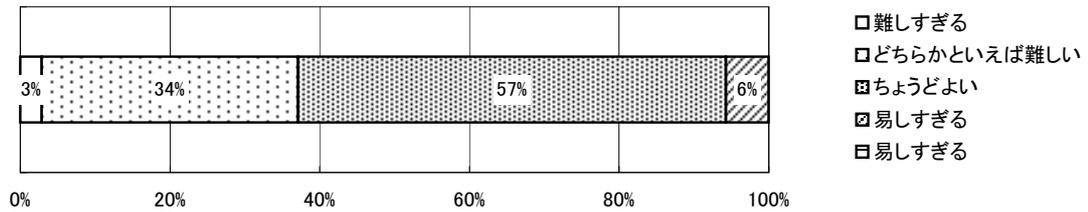
(2) あなた自身の受講姿勢はどうだったと思いますか。



(3) この実習の学生数についてはどう思いますか。

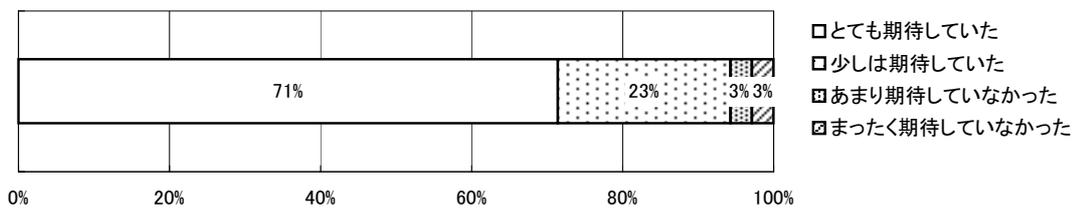


(4) 授業の難易度はどうでしたか。

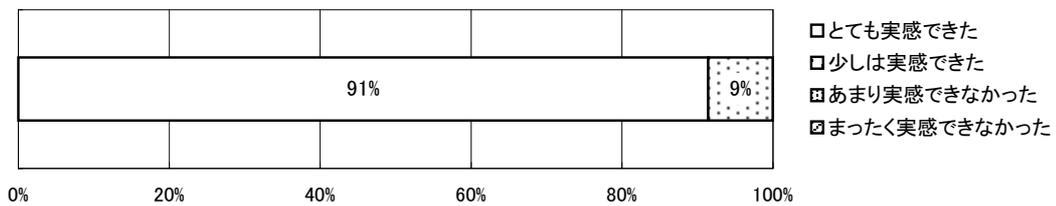


Q5 森里海連環学実習の授業形式についてうかがいます。

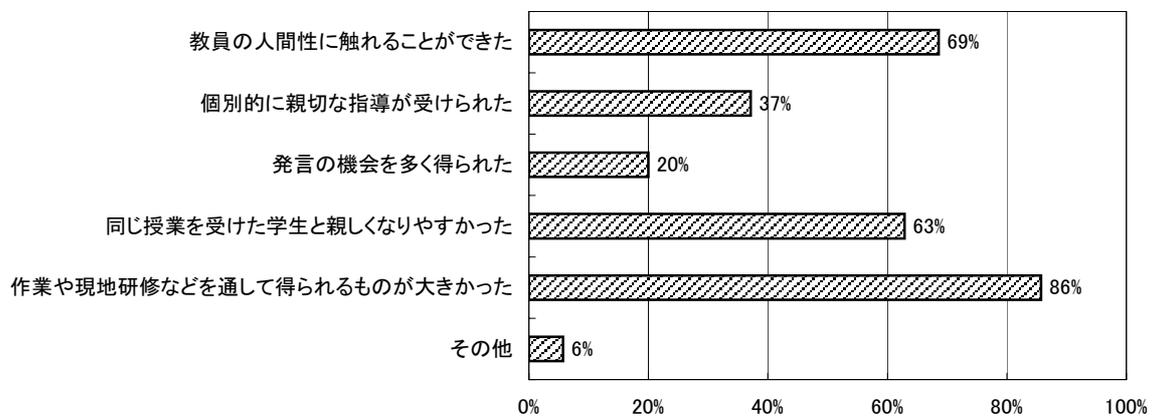
(1) この実習を受講する前、講義などの授業よりも多くのものが得られることを期待していましたか。



(2) では、実際に受講してみて、この実習でしか得られないものがあると実感できましたか。

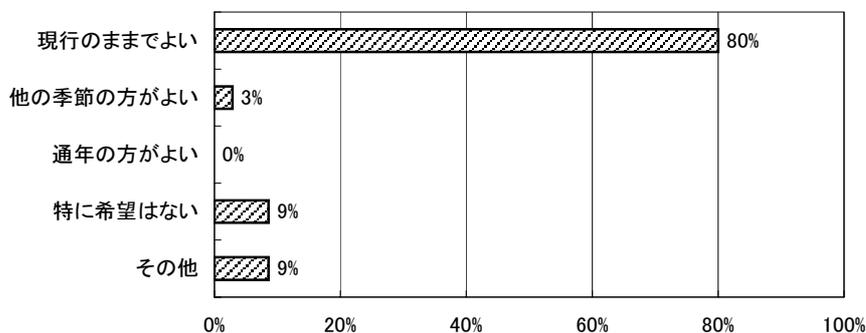


(3) 前問(2)で「とても実感できた」または「少しは実感できた」を選んだ方にうかがいます。この実習でどのような点がよかったと思いますか。(複数回答可)

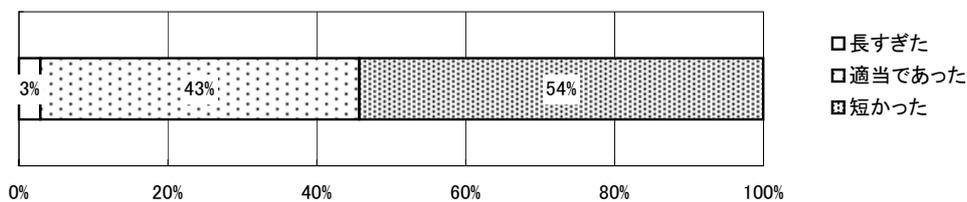


Q6 森里海連環学実習の実施方法等についてのご意見をうかがいます。

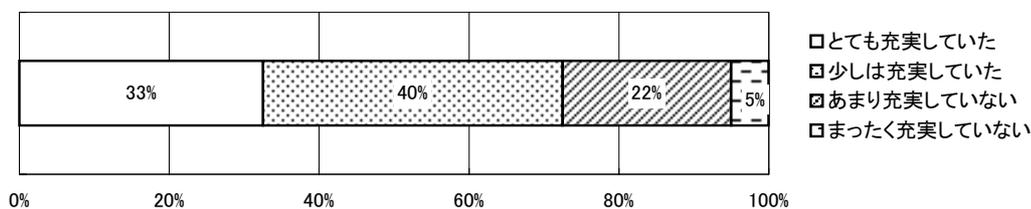
(1) 今回の実習の開講時期についてはどう思いますか。



(2) この実習の実施期間についてどう思われますか。

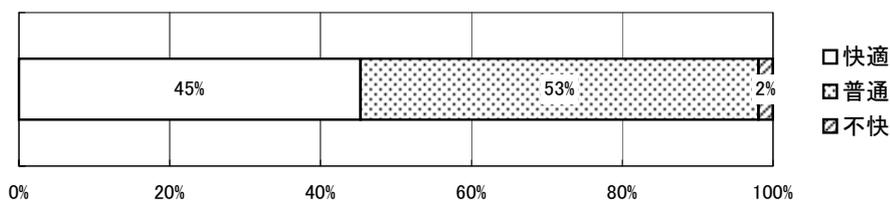


(3) この実習の実施場所の実験設備や実験器具についてどう思われましたか。

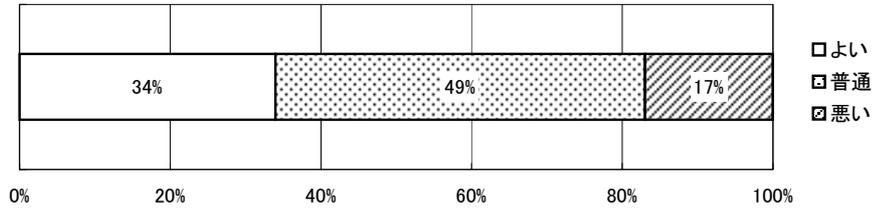


(4) この実習の宿泊についてうかがいます。

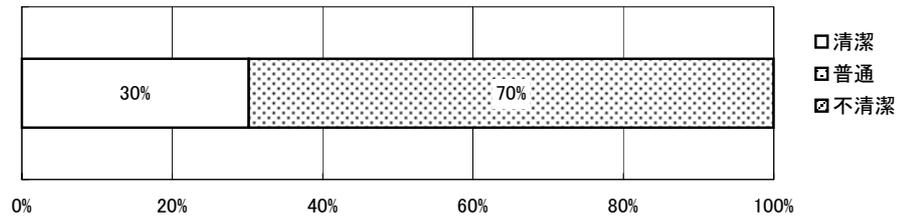
・ 共同の宿泊生活は



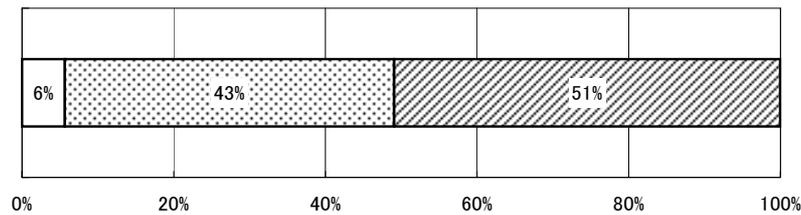
・ 宿泊施設の整備は



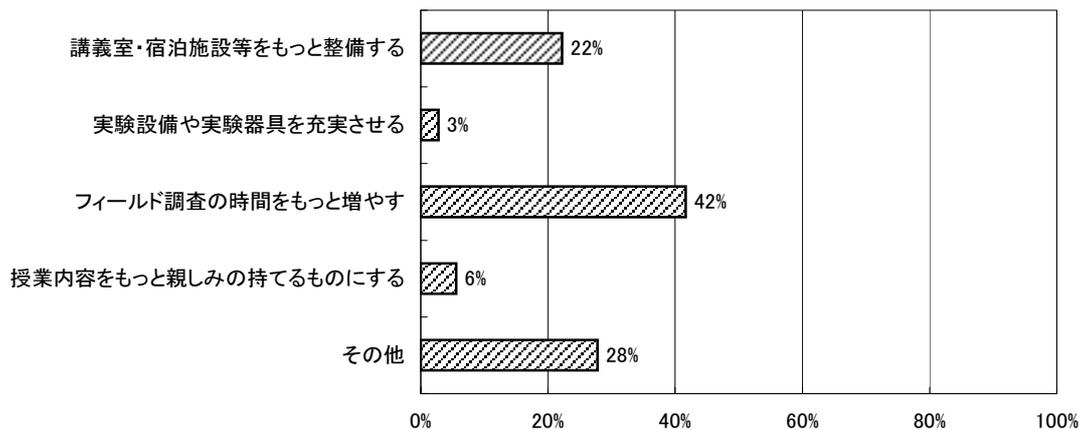
・ 宿泊施設の寝具は



・ 宿泊施設の経費は



Q7 今後、実習をさらに充実させるためには、どのようにすれば良いと思いますか。(複数回答可)



- 「その他」……
- ・ 個人の自由時間をもっと増やす (A)
  - ・ 参考文献を事前に読めるようであれば良かった (A)
  - ・ あまりにも何もないところから始まり、少々とまどった (B)
  - ・ 時間的余裕が欲しいです。疲れました (C)
  - ・ 睡眠時間をもっとほしい (C)

Q8 森と海のように全く異なった生態系が本来は不可分につながっていることや、そのことが地球環境問題に深く関わることについて、何か得るものがありましたか。自由に記入して下さい。

〈A〉

- 森と海を今までは分けて考えていたのですが、実は密接につながっていることが分かりました。
- 上流から下流へと連続したデータの解析ができ、興味深い結果が得られてとても有益に思われた。
- 源流から河口まで一つの川を全て見るのは初めてだったので興味深かった。
- 僕の地元では、管理されていない人工林が非常に多く、人工林＝悪者だと思いこんでいました。しかし、この実習で理想的な状態に極めて近い森林を見て、また色々話を聞いて、本来あるべき森の姿を知ることができました。
- 森林の林床についての知識が少し増えました。土壌には少し興味を持ちました。地球環境問題も環境破壊も、方向が違うけど人間の営為のための活動である。とつくづく感じます。
- SS分析が興味深かったです。これに関連して河川連続体仮説なるものを知ったので、調べてみたいと思います。

〈B〉

- 環境が悪化するものとしてダムや養殖場には否定的だったが、今回の実習でダムや養殖場を必要とする人々の生活にも触れ、一概に悪いものとは言えないことを改めて感じた。森や海の環境と人々の生活の両方から環境問題を考えることは難しいと思った。
- 生物はほんの少しの環境の変化でも相が変わり、そういった微妙なバランスを森と海という大きなつながりで保っているということを感じた。
- もともと山や森に興味があったので森についての視点から考えることが多かったが、今回海についていろいろと学んで、また別の視点を得られたことが良かった。
- 知識として知っていた森と海のつながりのことを、実際に自分たちの調査によって、ほんの少しではあるが、データとして表され実感できたことは大変意義深いことだったと思う。
- いろいろな話を聞いたり、実際に見たりして私はとくに森と川のつながりを感じた。そしてそこに必ず人間の存在も関わっていると思った。一つの環境問題を考えるときでもそこに関わるいろいろなものに目を向けなければならないとわかった。
- 人と自然もまた関わっており、人は自然があるから生きていけるとも思いました。この連環学についてもっと知りたいという興味もわきました。
- 人が自然と上手く付き合っていた時代では、人と自然の間に強いつながりがあったが、今はそのつながりが希薄になってしまっていて、それゆえ自然と上手くやれていないのかと思った。

〈C〉

- 北海道の森林を見ることができよかった。今度は北海道の林業について見てみたい。
- 土壌、水質、水生生物を観察し考察することはとてもためになりました。

Q9 今回受講された実習について、何かご意見やご希望があれば自由に記入して下さい。

〈A〉

- 芦生の演習林には、道路をつくった際に露出した露頭などが見つけられましたので、地層を調べることで山の成り立ちを調べるなどといったことを実習に取り入れるのも楽しいと思います。
- 源流部から河口まで見るのが足早であり、サンプルが少なすぎる。
- 自分達がどういったことを知りたくて、水質や水生昆虫を調べているのか、よく分からないまま作業をしていたので、事前に目的意識を持っていた方がよかったのかなぁ。
- 発表のための考察・準備時間をもう一日とって頂けるとよいと思いました。

## 〈B〉

- テーマを決めるとき、情報が少なく困った。前例（去年までは自由テーマじゃなかったけど）を見せてもらおうとか、事前に考えておくとやりやすかったかもしれない。
- フィールドワークの時間がたっぷりあった上、希望があれば車でどこでも連れていってもらえるというのはすばらしかったと思う。もう少し自分達がしている内容について先生方と話をすればよかったと反省した。
- 森里海連環学自体が最近提唱されたものでまだ確立しきっていない部分が多く、教員側も学生側も戸惑いが多かったのではないかと。たとえばさまざまな分野の先生方が協力してくださっていたが、それぞれに連環学の捉え方が違ったと思う。私にとっても興味深い視点を得られる機会となってとても良かった。
- 実験、調査器具を充実させてください。他大学や先生方とたくさんのお話をして親しむことができたことは貴重な経験となりました。自分で問題を見つけて答えを見つける。これこそ大学であると感じることができました。
- 事前にこの地域の森里海の概要の講座があれば良い。
- 限られた時間の中で、できるテーマや実験を自分で考えるのは少しハードだった。
- 1日目か2日目の午前くらいに講義室で古座川がどんなところか講義があるといいと思う。
- 使用できる実験器具等をもっと詳しく知りたかった。また、それを増やしてほしい。

## 〈C〉

- 朝から夕方まで野外実習、夜レポートで時間のゆとりがない。体力的にこのスケジュールはきつく講義で寝てしまう。調査でもこんなにきついものは今までなかった。
- 実習の日程がきつかったです。もう少しゆとりがあれば個々の実習にもっと集中できたと思います。

## 11) 少人数セミナー

### ①C. W. ニコルの“アフアの森”に学ぶ

里山資源保全学分野 柴田昌三 教授

前年度に引き続いて二回目の開講となった本少人数セミナーは、2007年8月12日～17日を中心に行われた。前年の担当教員の定年退職により、今年度は柴田が担当し、技術部の境技術長の支援を受けての実施となった。2007年度の受講生は、農学部森林科学科の学生が5名、総合人間学部および文学部の学生がそれぞれ1名、合計7名であり、男女比は、男子2名、女子5名であった。

前年度の報告では受講生の予習と積極的な交流態度の不足がホストであるニコル氏との意思疎通における障害となったことが述べられたことから、今年度は予習を重視し、出発前に日本の里山や森林植生の再生や森林管理に関する勉強会を開催した。さらに、アフアの森訪問の前日には、近隣の戸隠高原周辺の森林を見学した。訪問したのは長野県環境保全研究所、森林植物園、戸隠神社奥社である。環境保全研究所では里山管理に関する野心的な試みの現場を見学し、森林植物園では様々な植物を学習した。最後に訪れた戸隠神社奥社では、樹齢数百年の杉並木に大木の醸し出す荘厳さを体感した。

このような予習の後に、いよいよアフアの森を訪れた。予習が功を奏して、受講生たちは終始活発な討論をニコル氏と交わし、ニコル氏のボルテージも高まる一方であった。アフアの森での初日は森の見学に費やされた。二日目は午前中に妙高山の垂高山帯の森林を見学した後、午後にはアフアの森を訪れ、ニコル氏から森林の一部を再生する計画を自ら立てるように求められた。受講生たちは自分たちで計画を策定し、夕方には森の中で計画の発表とそれに対する意見交換が行われた。最終日には彼らの計画に基づいて、実際に森林管理作業を行った。これらの交流は、ニコル氏のみならず、スタッフの松木氏や石井氏との関係を非常に深いものにすることができたと考えている。残念ながら最終日には受講生の一人が、作業中にハチに刺されるというハプニングもあったが、そのお見舞いとしてニコル氏から贈られたプレゼントは逆に彼を元気づけるものとなった。

今回のポケゼミ中は、アフアの森の近くの「ラポランドくろひめ」にロッジを一軒借りて共同生活を行った。この試みは大成功で、引率者と受講生の親睦を深めることができた。また、興に乗ったニコル氏が三日目の夜に自ら調理されたテールスープの大鍋を抱えてロッジに現れ、楽しい一夜を送ることができたことは想定外の楽しみであった。



戸隠神社奥社杉並木



アフアの森でのニコル氏他アフアの森のスタッフとの討論会

## ②フィールド実習「森は海の恋人」

海洋生物多様性保全学分野 白山義久 教授

2007年度フィールド実習「森は海の恋人」を、8月19日から23日まで（移動日を含む）宮城県本吉郡唐桑町にある水山養殖場において実施した。宿泊には、民宿「なぎさ」を利用した。

参加者は定員一杯の7名（文学部1名、医学部1名、工学部2名、農学部3名）であった。講師として、畠山重篤氏（京大フィールド研社会連携教授・水山養殖場）とそのご子息の畠山信氏、並びに横浜康継氏（南三陸町（志津川町）自然環境活用センター所長・筑波大学名誉教授）の参加を得た。また前年同様気仙沼高校の高橋誠子氏（気仙沼高校教諭）と斉藤繁氏（気仙沼高校教諭）および気仙沼高校自然科学部生徒2名も参加した。またフィールド研からは白山の他に、大学院学生の鈴木豪が参加した。

8月20日にはNaGISAプロトコルにもとづく岩礁域のフィールド調査を実施した。サンプリングを終了後は、サンプル処理として海藻サンプルの分類・同定・重量測定、1mmのフルイでのマクロベントスサンプルの解析（分類・同定・計数）と0.063mmフルイを用いたメイオベントスサンプルの作成を行った。

8月21日はまず早朝に気仙沼漁港を見学し、その後水山養殖場の養殖いかだから、もっとも岩礁性生物の多様性が高い養殖カキのサンプルを採集した。その後、サンプル処理として、1mmのフルイでのマクロベントスサンプルを作成した。昼食後は、海藻も場のマクロベントスを、ドレッジを用いて採集した。また夜は、横浜名誉教授による、海藻類の分類・同定・標本作成法の講義と実習を受講した。

8月22日は、畠山氏による森里海の連環に関する講義受講後、畠山氏の案内で気仙沼湾・大川水系を見学したが、悪天候のため十分な見学はできなかった。午後はそのために、野外実習ではなく、シャーク博物館・津波博物館の見学を行った。

学生には、初体験のことが多く、森里海の連環について強い印象を持ったものと考えられた。また、高校生との触れあいもあり、その他にも地元の様々な方の歓迎も受けて、充実した3日間を過ごすことができたものと評価している。



実施概要の説明



サンプリング風景

### ③木造校舎を造る：木の文化再生へ

森林環境情報学分野 芝 正己 准教授

本ゼミは、4月中旬のガイダンスからスタートし、本部での7回の講義（毎火曜日5限目、北白川試験地隣接 j-Pod 教室）と関連施設の野外見学・実習等を組み合わせて実施された。都市と森林が抱える問題の一元的な解決の“切り札”として、京都大学に半永久的木造校舎を建築することを目標とすることによって、「森里海の連環」を教示しつつ、新たな木の文化を考えることを目的として開講した。今回の受講生は、文学部（1名）、法学部（2名）、医学部（1名）、工学部（4名）、農学部（1名）、総合人間学部（1名）の10名（男性3名、女性7名）であった。

#### [講義内容・担当]

1. 問題提起 森は海の恋人－森と里と海のつながり（田中 克名誉教授）
2. 里山の歴史と日本人のつきあい（柴田昌三教授）
3. 里山の現状とこれに対する新たな動き、海外における森林荒廃（柴田昌三教授）
4. 世界の森林・日本の森林－その役割と利用（芝 正己准教授）
5. 日本の林業のこれから（芝 正己准教授）
6. 自分の個室空間から都市までを木で作っていく楽しみ（小林正美地球環境学堂教授）
7. 世界の木製都市，日本の木製村（小林正美地球環境学堂教授）

#### [野外実習・見学内容]

フィールド研上賀茂試験地，京都府立植物園，京都大学構内の古い木造施設（旧演習林事務室，吉田寮など）や新たな木造工法（j-Pod 工法）による施設（国際交流セミナーハウス，北白川試験地隣接 j-Pod 教室）で行った。

提出された学生のレポートには、「森里海の各領域における環境問題の現状とその潜在的な連続性が何となくわかって来た」、「建築工法が森林の問題（利用間伐の促進による森林管理の適正化）に寄与することが j-Pod からわかった」、「将来にも有効資源であるタケの特徴とその活用法が理解できた」、「樹木の特徴とその役割の知見が得られた」、「講義と野外実習・見学による組み合わせで、内容が具体的に理解できた」等々、本セミナーの目的の神髄を理解した回答も随所に見られた。



上賀茂試験地における伐倒作業体験



上賀茂試験地における製材作業体験

## ④河口域の生態学

里海生態保全学分野 山下 洋 教授

受講生は法学部1名、医学部1名、農学部4名の計6名であった。集中講義型としてポケゼミを開講したが、実習のほかに4月、6月、7月に河口域の生態学に関する講義を行った。内容としては、フィールド研の紹介に始まり、河口域の構造、通し回遊生物の生態、河口域における生物生産構造、沿岸海洋域における生物生産構造、森・里・川・海のつながりとフィールド研の森里海連環学について、などである。

6月29日～7月1日には、由良川河口域で実習を行った。6月30日には舞鶴水産実験所の甲斐助教にも手伝ってもらい、由良川の支流から本流河口域を見学し、水質の測定を行うとともに、河口において稚魚採集調査を行った。稚魚採集では、稚魚用曳網および口径1mのソリネットを河口域から神埼浜において曳網し、ヒラメ、ボラ、スズキ、ウグイ、ヒイラギ、イシガレイ、マコガレイ、ヒメハゼの8種が採集された。昨年と比較すると、後半の4種は昨年度には採集されなかった種類である。総種類数は昨年、今年とも8種であり、採集時期はほぼ同じであったが、昨年とはかなり異なる種組成となった。また、スズキ稚魚のサイズが昨年よりもかなり大型であったことが注目される。7月1日には舞鶴魚市場に出かけ、水揚げされた魚介類の見学と若狭湾の漁業に関する解説を行った。



## ⑤海岸生物の生活史

海洋生物系統分類学分野 久保田 信 准教授

風光明媚な白浜町（和歌山県）に所在する瀬戸臨海実験所の周囲の海岸での実地授業を10名の参加で実施した。講義・実習の内容は、固定標本・ビデオ・図鑑・DVDで無脊椎動物が海洋で多様性が高い説明はじめ、現場で多様な生物の形態と行動の観察・スケッチ；磯浜観察（番所崎）；漂着生物の観察（番所崎・実験所“北浜と南浜”）；瀬戸漁港での観察；実地観察しづらい動物の水族館での観察；プランクトン観察（北浜でプランクトンネット曳きサンプル）；反省会（オリジナル曲を含む海洋生物曲の紹介）。多様な動物群を自然あふれた現場で実地実習する有効性はもとより、専攻の異なるもの同士が寝食も共にできる親交もよい。受講の感想の一部を紹介したい：「自然を身で感じることの素晴らしさ、風や日光や海水の冷たさを体で受けとめ、生物の尊さを教えてくれるものは何よりも自然そのものと交わる時間や経験で、好きになったことをもとに新しいことを次へと活かしてゆく理想の学習スタイルでした。いつか自分の好きなものが見つかる気がしました」「同じタイドプール内に多くの動物門がいて面白く、海水が美しく多くの生物が成育している白浜の良さがわかりました」「図鑑でしか見たことがなかったいろいろな動物を見つけ、存在も知らなかった生物、様々な動物の歌、人々、かけがえのない経験になり、勉強以外でも素晴らしい体験ができました。GWをつぶしてでもとる価値があり、後輩たちにも是非勧めたいです」。

指導者からのメッセージとして、「野外での観察時に天候に恵まれ穏やかで暖かく、微小生物から大形動物まで多様な海産動物に触れることができ、ラボでもじっくり観察できた。水族館では41動物門中の大きな門である刺胞動物門を代表として分類と進化について簡潔な解説をし、中でも複雑で生活史を逆転させる（蝶が幼虫にもどるような一生）ベニクラゲや多様な環境にあわせるように世界で最も分化しているカイヤドリヒドラ類に焦点をあてられた。また、海辺で見られなかった多数の動物達を、水族館の展示ラベル・解説で基礎的な生物学的事項が学習できた。生命の母なる海，“宝の海”には、未知な特徴だらけの生物が無数に、多様に、時空的に変化しながら、お互いに影響しあって、存在し続けているため、この方面の知見を得るのは、いくら時間があっても足りない。しかし、目下生きている144万種の動物は、最も細分するとたった41門である。この基礎をしかと心得、地球同朋者として生きている彼らの個々の一生、配偶子から受精卵・幼生・幼体・成体・老齢体までを常に頭におき、個々の個体や種全体あるいは特定地域の個体群、地球全体の現在・過去・未来に思いを十二分に寄せて頂きたい。人間以外は非情な食う食われるの関係で種の存続が成り立っている食物網に留意し、現存できるおごそかさを十分かみしめ、個々の生物を慈しみ愛してほしい。助け合える人間に誕生できた幸せを納得してほしい。以上のポイントを常に肝に銘じておくことは人間の義務である。今後も多様な宝の海洋生物、特に岸辺で出会える様々な生き物に、人生をかけて、あるいは趣味として、めいっぱい親しんでほしい。興味をもった1種とその近縁種の生命体の謎を究明しようといった思いなどが多少なりとも芽生えてくれば、本実習に参加した意義がある。3大テーマ：①ベニクラゲの神秘の若返りのメカニズムの解明とその人類への応用；②サンゴやサンゴイソギンチャクのように、光合成の活用、応用として人工作製法による食糧問題の解決；③生物を用いた大地震の予測をはじめ、海に潜む生物の秘密の発掘・研究・応用の醍醐味をも夢に描いてほしい」。



終了後に白浜町のシンボルアイランド（円月島）をバックに全員集合写真

## ⑥海洋生物の多様性

海洋生物多様性保全学分野 白山義久 教授

ポケゼミ「海洋生物の多様性」は、講義と実習を組み合わせたポケゼミである。講義はフィールド研小会議室において、6回実施し、海洋生物学の基礎となる海洋学の知識と海洋生物に関する基本的事項についての解説を行った。この学習の成果をもって、実際の海洋生物を観察する実習を、7月29日から8月1日まで3泊4日の日程で、瀬戸臨海実験所において実施した。実習内容としては、1. スルメイカとメバルの解剖、2. メイオセントスの採集と観察、3. スキンダイビングによるメガセントスの目視観察、4. 見釣り、5. 南方熊楠記念館の見学の5項目を実施した。

今年度の本実習の参加者は、9名（法学部1名、経済学部1名、理学部1名、農学部3名、工学部3名）と昨年度の3名から大幅に増加した。今年度はレポート課題を課さなかったことが主たる要因らしい。また、レポート課題がなかったため、参加した学生のなかに文科系の学生がいたのが特徴となった。

本実習は、昨年度に協定書を調印したNPO法人エコロジー・カフェ（エコカフェ）との協力事業という位置づけでもあり、その会員も参加した。具体的には、上記実習内容2・3・5は、エコカフェの会員も一緒に現場と実験室の作業を行った。

また、実習時間外のアクティビティも多数行い、そのなかでも学生とエコカフェ会員とは、充実した交流をした。特に一日目の夜のバーベキューと二日目夜の花火大会の鑑賞において、エコカフェの方々（社会人）と学生との交流は、どちらにとっても有意義なものとなったようである。

学生にはやはり実習の方が講義よりインパクトが強いことがわかったので、来年度からは、実習中心に内容を改めて実施したいと考えている。また、エコカフェとの連携は、学生にとってもよい機会となったので、今後も続けていきたい。

エコカフェにとっては、会員が本当の自然に触れる機会を得たことに満足感があつたようである。特にスキンダイビングとメイオセントスの観察はどちらも普通にはできないものだったため、貴重な体験となり、今後も実習に継続して参加したい意向である。



解剖の実習風景



スキンダイビングの実習

## ⑦魚類心理学入門

沿岸資源管理学分野 益田玲爾 准教授

ポケゼミを担当するようになって4年目になった。本年度は募集人数10人ちょうどの参加で始まった。講義のタイトルは以下の通りであった。

- 第1回 研究の道具としてのスキューバ潜水
- 第2回 群れ行動の発達心理学
- 第3回 魚類心理学を栽培漁業に活かす
- 第4回 魚の行動から海の資源の未来を読む
- 第5回 回遊魚の行動学
- 第6回 研究というゲームの楽しみ方

講師自身の研究成果を中心に1時間弱の講義を行い、その後フリーディスカッション、さらに簡単なレポートを書いてもらい、このレポートをもとに次回の講義を組み立てるという構成をとった。最終回には「プレゼンテーションの奥義」というコーナーも設け、講師が一番最近に行った学会発表を例に、口頭発表やポスター発表の技術を伝授した。

実習では、7月6日金曜日に学生らが舞鶴に到着し、まずガイダンスを行った。この実習には、見学を希望していたスタンフォード大学の学生1名にも参加してもらった。講義で地産地消や食の安全の話もしていたので、食事は3食とも自炊することにした。土曜日は、ご飯、味噌汁、ハタハタの干物、茄子とキュウリの浅漬けの朝食のあと、皆で握り飯を作り（初めてという学生もいた）、市内の三浜海水浴場へ。本年、「ととのいえ」という海浜施設がオープンしたため、こちらのシャワーと更衣室を利用した。午前中は調査用ネットにより稚魚を採集し、午後はシュノーケリングで砂地や岩場の魚や無脊椎動物を観察した。帰りにスーパーの鮮魚コーナーで食材としての魚について理解を深めたのち、夜は実験所の院生らと共にバーベキューを楽しんだ。翌日曜日には西舞鶴の京都府漁連を見学した。



写真1 舞鶴市三浜の砂浜にて、ヒラメ稚魚採集用の網を曳くポケゼミ生とスタンフォード大の学生。



写真2 メジナの稚魚とポケゼミ生。雨のあとで透明度は悪かったが、それでも魚は探せばいるものだ。

## ⑧原生的な森林の働き

森林環境情報学分野 中島 皇 講師

今年度も5月、6月に1回ずつ北部キャンパスで、7/1(日)には1dayセミナーを上賀茂試験地で、2泊3日の合宿形式セミナーを芦生研究林で行った。参加者は4名(男4)(学部別:工1, 農3)と比較的少なく、ゆっくりしたゼミが行えた。セミナーの目的は、フレッシュな新入生諸君がフィールド(森林)に出て自ら体験し、自然と人間の関わり方に興味を持ってもらうようになることである。

芦生での集中セミナーは、7/16(土):今年は台風のために中止も考えなければならぬ様子。コースは、外れていくとの予報なので取り敢えず芦生に集合した。しかし、雨は激しく本流沿いの観察は事務所構内の近くのみとなった。夕食は計画通りスパゲティー。夜は、芦生研究林の概要説明と研究林が抱える問題点や環境の議論を行った。

7/17(日):台風の影響が残っているためか天気はあまり良くない。小雨の中、昼食を作って出発。途中、大面積・長期プロットと暖温帯と冷温帯の境界について説明。モンドリ峠の林道では、水たまりにモリアオガエルの卵が落ちており、皆が興味津々に触っていた。上谷の歩道でも雨。結局、昼食は河原で、雨の中食べることになった。長治谷からは量水堰、大桂、二次林と人工林を観察しながら、幽仙谷では天然林からの流出物を回収して、宿舎に持ち帰った。夕食はカレーライス、たくさん食べて、その後の流出リターと水棲昆虫の分別に精を出した。

7/18(月) 分別した水棲昆虫と木の葉をデッサンし、流出物の量をレポートにまとめた。感想文には、雨の中、原生的な森林を自分の足で歩き、色々な植物や動物に触れた感動が表現されていた。最後に宿舎・食堂の片付けとフィールド研からのアンケートを書いてセミナーは終了となった。



モリアオガエルの卵



原生的な雰囲気の上谷源流部

## (番外) 4回生版ポケゼミ

今年はずいぶん連絡があった。3年前のポケゼミ生たち(文2, 経1, 理1, 農2)が、もう一度、皆で芦生に行きたいと。3年後の芦生を見て感想文をちゃんと提出するならとの条件でOKを出した。9月14日~16日、イギリスで研修中の文学部の1人を除いた懐かしい顔が集まった。農学部の2人は、大学院進学予定で、装備も芦生に十分耐えうるものであった。夕食後のアルコールが入った議論では、就職する人たちもしっかりした視点を持っているようで、頼もしく感じられ、3年間の成長が見て取れた。また、チャンスがあれば感想文をご紹介したい。



アシウスギの巨木

## ⑨森のつくりだすもの

森林生態保全学分野 徳地直子 准教授

森は有形・無形のさまざまなものを私たちにもたらしてくれるが、森の実際の姿や森の作り出す機能の創出のためにどのようなしくみがあるのか、よく知っているとはいえない。このポケゼミ“森のつくりだすもの”は、森に入って、森にふれ、さまざまな森の性質をとらえることを目的としている。

本実習は、和歌山研究林において夏季休業期間に行われる。和歌山研究林はフィールド研の研究林においても集落から離れた自然にめぐまれた地域にあり、また人工林率の高い森林である。そのため、以前は人工林の育成に関する林学教室の実習が行われていた。このような特徴を生かし、自然の森林を体験するだけでなく、現在産業として厳しい状態にある林業についても考えるきっかけとしてもらいたいとカリキュラムを立てている。すなわち、

第一日目 研究林を源流のひとつとする有田川の下流地点に集合し、上流に向かって河川水をサンプリング・調査しながら研究林にはいる。

第二日目 和歌山研究林が設置されて以来手付かずで残されている貴重な天然生林とそれをとりまく人工林内を散策し、樹木の識別を通して自然の営みを見つけ、天然林、人工林のそれぞれの特徴を学習する。

第三日目 人工林を管理することの重要性を学び、実際に間伐体験を行う。

というスケジュールである。

終了後にレポートを提出してもらい、学んだことや感じたことなどをまとめてもらっているが、「身近にあってもはいつていったことがない」ことや、「3日という短い期間だったが森林に慣れてきた」、「現在森林が抱える問題が少しわかった」などの意見があり、これから大学で学んでいく学生に森林生態系のしくみや森林と人との関わりについて少し何かを感じてもらえたのではないかと考えている。



## ⑩森里海のつながりを清流古座川に見る

里地生態保全学分野 梅本信也 准教授

紀伊半島南部は照葉樹林生物ならびに文化圏と南方につながる黒潮生物ならびに文化圏が交錯展開し、その中をゆったりと古座川が流れている。流域や河口沖の串本湾岸域には森里海連環学を体得する上で極めて重要な日本の原風景が色濃く残っている。約400km<sup>2</sup>の対象地域の自然域と里域において森里海各構成要素とそれらの相互関係、今後のあり方を考察しようと言う目的で、基礎的事項の講義、実習地域の地理的巡検、山林漁業および里の各地区現地調査を行ってきた。2007年度もこうした方針に基づき、8月20日（月）から24日（金）までの4泊5日の日程で以下の実習を行った。参加学生は理学部、農学部、工学部、総合人間科学部から6名であった。

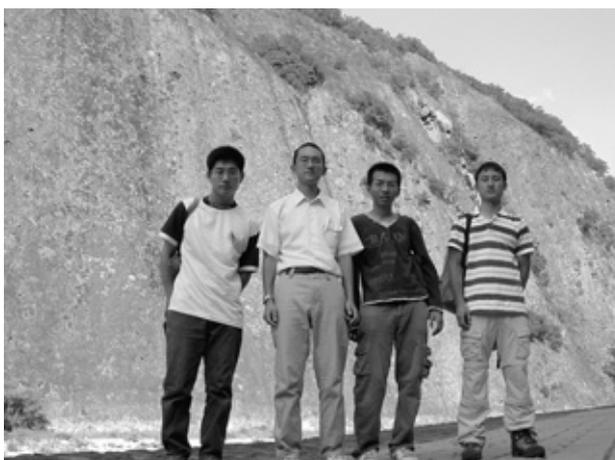
初日は紀伊大島中央に位置する紀伊大島実験所に集合、ガイダンスや資料配布、調査班編成を行った。今回の取り組むべき課題は①森里海連環とその変容、②サンマ寿司の地域性とその原因、③自由課題であった。夕刻より買出し、共同自炊で夕食会を行い、その後、翌日からの行動計画について個別に対応した。参加学生にとって現地調査は初体験であり、いささか武者震いしているようであった。

2日目は爽やかな朝を向かえ、全員元気にチーム別に古座川中上流の明神地区と月の瀬地区での観察、採集および聞き取り調査に向かった。現地で各自昼食、夕刻に全員帰還し、全員で夕食、その後データ整理と個別班別相談を行った。その中で調査時の注意点、すなわち、①礼儀、②事実と伝聞の識別、③多様性の受け入れ、④体系的情報の入手、と言った基本原則を確認した。現地での初体験的調査は参加学生に良い効果をもたらしたようで、昨年度までと同様に、目つきが大変に改善された。

3日目は上流の添野川地区と中流域の一雨地区に向かい、同様な調査を行った。

4日目は上流の下露地区、下流の高池地区と中湊地区で調査を行った。この日はお別れ会を兼ねた夕食会を開催、調査の過程で地元の方々から伝授してもらった郷土料理を互いに披露した。

最終の5日目、昨日までに収集したデータをもとに各班各自で作成した報告書はいずれも課題に沿った力作ばかりであった。実習施設の後片付けをして正午に無事に解散した。



古座川中流の一枚岩で



伝統料理のウズメ汁

## ⑪森林の再生と動態

森林資源管理学分野 安藤 信 准教授

京都市市街地周辺林，奥山の芦生研究林，その中間に位置する北山・八丁平湿原周辺の天然林・二次林を踏査・調査し，異なった森林帯，地形，遷移過程に伴う種組成や林分構造の違いと動態について，講義・実習を行った。セミナーは4，5月の土・日・祝日を中心に行った。

○4月27日（金）：ガイダンス

昼休みを利用して日程・準備・注意事項を説明した。

○4月28日（土）：森林の再生と動態及びアカマツ林の更新

森林の遷移と更新の違い，階層構造，遷移に伴う種組成・多様性・成長の変化，さらに京都市周辺の森林の近年の変化について，データをもとに紹介した。院生による現在行っているアカマツ林の再生に関する研究報告，北白川試験地で樹木の識別法についての講義を行った。その後，大文字山で樹木識別実習を行うとともに，京都市市街地周辺の山々を覆っていたアカマツ林のマツ枯れ後の遷移について説明した。アカマツ林再生のための施業を行った国有林内の試験地において，発生稚樹を確認し，更新を促す地表処理について解説した。

○4月29日（日）：アカマツの天然更新

深泥池周辺のマツ枯れ跡地に設けたアカマツ更新試験地内で，下層植生調査を行い，アカマツ林再生に適した自然環境や下層植生との種間競争について説明した。

○4月30日（祝）：シイ林の拡大と種多様性

シイなどの照葉樹の分布が拡大している東山・清水山の種の多様性回復を目的にシイ大径木を部分的に伐採した国有林施業地内で，伐採3年後に成長を再開した上層木や下層植生の調査を行い，とくに陽樹の初期成長について説明した。

○5月3日（祝）～5月4日（祝）：冷温帯天然林，二次林の林分構造と動態

芦生研究林において，天然林を構成する樹種と天然林の動態，二次林の更新に関する講義を行った。伐採後50年を経過した二次林の毎木調査，16haの天然林大面積調査地のプロットテープ張りなどの作業を通じて，天然林，二次林の林相の違いを認識するとともに，急傾斜地で巨木を対象に調査を行うフィールド調査の難しさを体験した。

○5月26日（土）：冷温帯二次林の地形，攪乱の違いによる林相の変化

北山・八丁平の二次林の林分構造と動態，近年のシカによる森林・樹木の被害について講義を行った。その後現地を訪れ，いくつかの固定調査地の林分構造や遷移の違い，シカ害の実態を見学した。

本セミナーでは農学研究科森林育成学D2の呉初平君，総合人間学部4回生の中村真介君，農学部3回生の後藤元保君，2回生の森岡信博君が協力してくれた。



東山伐採跡地の残存木の毎木調査



アカマツ発生稚樹の確認

## ⑫豊かな森をめざして！

森林環境情報学分野 芝 正己 准教授

本ゼミは、4月中旬のガイダンスからスタートし、本部での5回の講義（毎火曜日5限目：フィールド研関連施設の見学を含む）と2泊3日の芦生研究林での野外体験実習を行った。今回の受講生は、医学部（1名）、工学部（1名）、農学部（4名）、法学部（1名）、経済学部（2名）、総合人間学部（1名）の10名（男性6名、女性4名）であった。

本講義の目的は、地球規模で問題となっている世界の森林の状況、日本での森林の保全・利用の現状を対比させながら、環境－経済－社会面からみた森林資源管理のあるべき姿を分野の異なる受講生全員で模索議論することである。21世紀に向けて森林を持続的に管理し、その多面的な機能を発揮させるためには、従来の専門領域に止まることなく、異分野間の連携を図ることが必要であり、そのためにも、隣接する領域やこれまで無関係だと考えられてきた分野についての正確な知識の習得が求められている。その具現化として「森里海の連環」を教示しつつ、以下の内容構成で解説した。

## [講義内容の構成]

- 1：世界の森林とその特徴－諸外国の紹介（特に、東南アジアの熱帯雨林と極東北方林の現状）
- 2：日本の森林・林業の現状（人工林管理、特に間伐問題や生産環境整備）
- 3：森林の利用と保全のバランス（森林の機能区分と情報管理）
- 4：新たな森林の管理－豊かな森へ（持続可能な森林管理－森林認証とCoC）
- 5：総括と討論（森林管理から森里海連環管理へ）

## [野外体験実習]

芦生研究林での野外体験実習は、7月5日（木）～7日（土）に実施した（参加者9名：受講生8名、TA1名）。JR園部駅からのマイクロバスで「園部・日吉：郊外の土地利用や森林風景」、「美山町：由良川沿いの景観と土地利用、茅葺きの里」等を見学したほか、2日目には、内杉谷から長冶谷までのコースを移動しながら、「暖温帯林から冷温帯林への森林の変化」、「シカの食害地やクマ剥ぎ木」、「カシノナガキクイムシ被害木」、「溪畔林の植生」等を観察し、さらに、由良川本流に沿ったトロッコ軌道敷で樹木識別を行いながら、灰野集落跡地まで散策した。最終日は、後片付け、レポート作成後、初日の逆コースを経てJR園部駅で解散した。



内杉谷の景観と受講生



下谷の大カツラの前で

### ⑬節足動物学入門

海洋生物進化形態学分野 宮崎勝己 講師

昨年度に引き続き、少人数セミナー「節足動物学入門」を、京大本部地区における二回の講義と、瀬戸臨海実験所における実習を組み合わせる形で行った。受講生は理学部3名、経済学部2名の計5名で、三年目にして初めて定員に達した。

第一回目の講義では、オリエンテーションとして、セミナーの概要説明、自己紹介、今後の日程調整を行い、二回目の講義では、節足動物の生物学について概説的な講義を行うと共に、ある無脊椎動物学の英語の教科書から、節足動物の特徴をまとめた部分を抜き出したものを配布し、その和訳を宿題として課した。

実習は四泊五日で行った。内容はほぼ前年度と同様で、初日のオリエンテーションと所内見学の後、中三日間で捕虫網を使った採集、簡易ツルグレン装置を使った採集、打ち上げ海藻からの採集、磯採集をそれぞれ行い、採集した節足動物の同定を行わせ、最終日に生息環境との関連と生活域の進化に関するレポートを課した。

今回の実習は、学生側のやむを得ない事情から5名を3名と2名に分けて、別の日に実習を行う変則的な日程を組むことになってしまったが、実習自体は受講生の熱心さもあって、成功裏に終えることが出来た。またいずれの実習とも、他大学の実習と日程が重なったが、一部の採集や作業を合同で行ったほか、様々な形で学生間の交流が図られ、受講生にとってはかえって好都合だったといえよう。



京都教育大との合同作業の様子



京都教育大との交流の一場面

## ⑭有機農業の可能性…持続可能な農業をめざして

里山資源保全学分野 西村和雄 講師

07年度の少人数セミナーはカリキュラムが重なったために辞退した一人を除いて九名で行った。四月中旬から毎週一時間の座学を行い、有機農業の意味、有機農業の実際的な栽培方法、そして有機栽培によって生産された農産物の特徴と、本物のおいしい野菜の見分け方について講義した。

実習としては、北白川試験地の苗畑を0.5アールほど使用して、畝を立て、サツマイモ（高系14号）の苗を五十本植栽した。苗の植え付け方について説明したのち、それぞれが五本余の苗を植えた。植栽後の管理は西村が担当し、ボカシ肥えを一回施用した。以降の管理は雑草の除去で、これが結構頻繁にしないとすぐに草が生えてくる。

昨年の夏は梅雨が少雨であったこと。その後に干ばつと高温が続いたせいで、サツマイモの生育がかなり悪かった。

サツマイモとは別に、落花生を二百粒ほど畝に埋め込んだ。埋め込んだのは五月中旬で、サツマイモより二週間ほど遅く植え付けた。落花生はマメ科植物で深根性であるため、早魃気味の天候でも枯れることなく順調に生育を続け、大きな株に成長した。

サツマイモは十月の初めに掘り起こし、そのまま乾燥保管した。落花生は少人数セミナーの学生諸君と一緒に掘り起こして収穫した。

収穫物は十一月祭の始まる直前に、集まって食べた。サツマイモは炭で炙りながら焼き芋とし、落花生は殻ごと塩水で茹でた。学生諸君にはサツマイモはなじみがあったようだが、落花生については初めての体験だったようで、殻を割りながら頬張り、「美味しい」を連発していた。

有機農業を主題とした少人数セミナーは、西村教員が辞職するため07年度が最後となった。



逆植えサツマイモの苗の状態

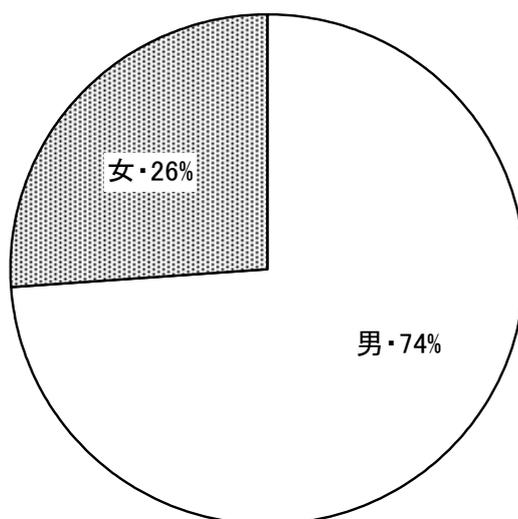


土の中に埋まっていた部分からモヤシ状の蔓が伸びかけているサツマイモの様子

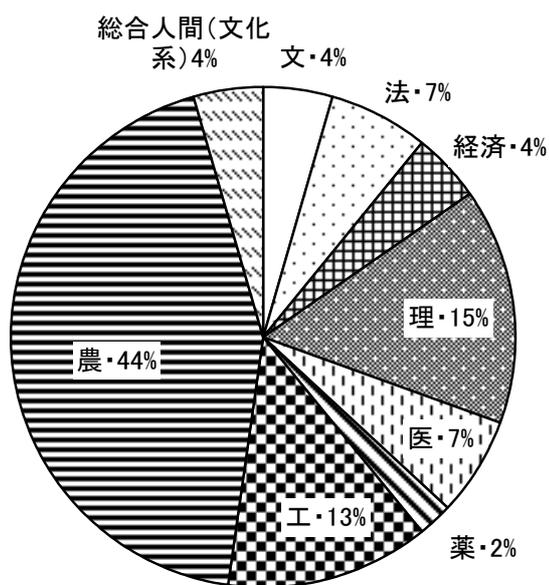
⑮少人数セミナーに関するアンケート結果

このアンケートは、フィールド科学教育研究センターの少人数セミナーを今後より充実したものにしていいため、学生の率直な意見を求めたものである。アンケートは9設問からなっており、有効回答者数は46名（芦生研究林，紀伊大島実験所，舞鶴水産実験所，瀬戸臨海実験所，その他の施設）である。以下，原則として設問ごとに，集計結果をグラフで表示し，百分率を添えた。

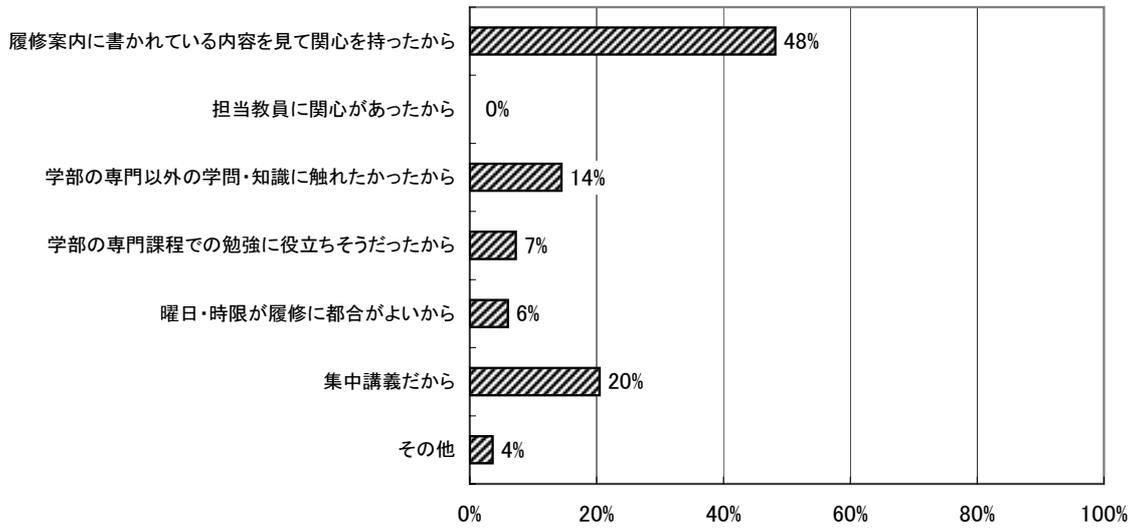
Q1 あなたの性別を答えて下さい。



Q2 あなたの所属学部を答えて下さい。



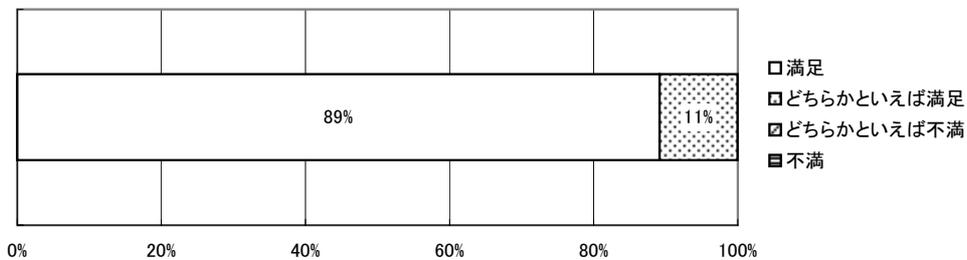
Q3 このセミナーを受講することにした理由を答えて下さい。(複数回答可)



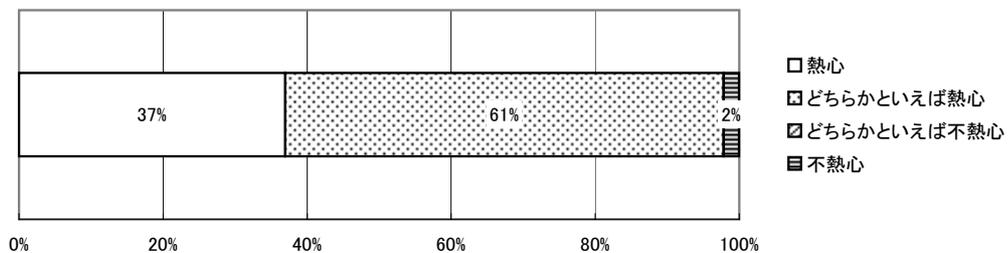
- 「その他」……
- ・フィールドに出ることが好きだから
  - ・楽しめそうだったから
  - ・友達を作りたいかったから
  - ・ペニクラゲに興味があったから

Q4 このセミナーを受講しての感想をうかがいます。

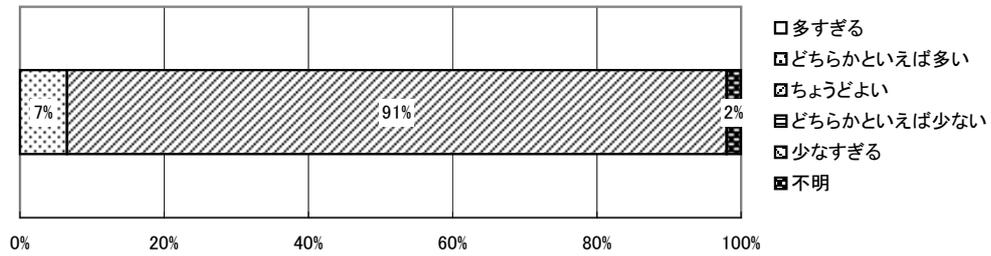
(1) このセミナーの授業内容に満足していますか。



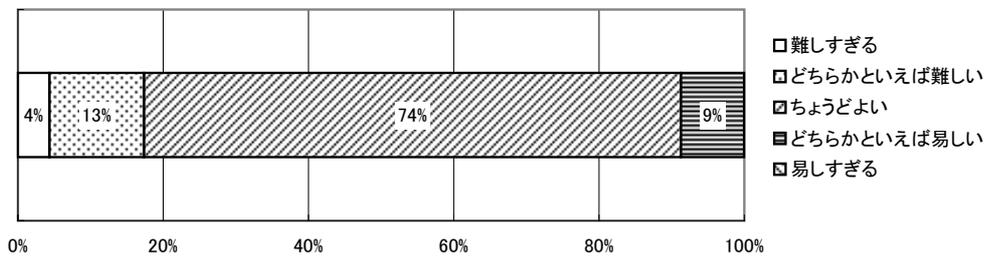
(2) あなた自身の受講姿勢はどうだったと思いますか。



(3) このセミナーの学生数についてはどう思いますか。

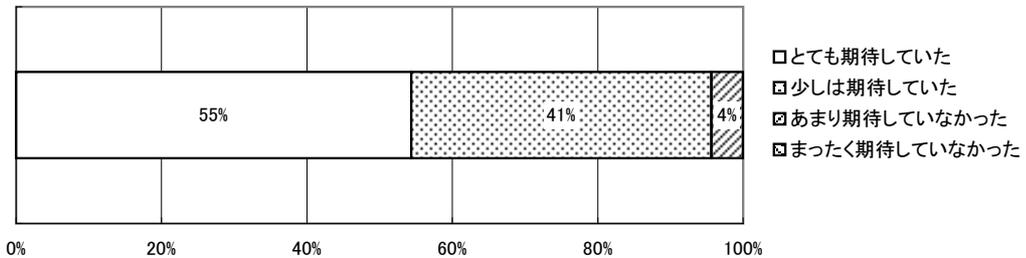


(4) 授業の難易度はどうでしたか。

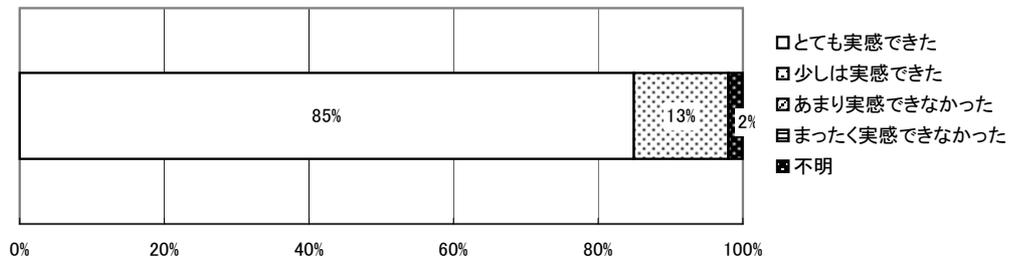


Q5 少人数制の授業形式についてうかがいます。

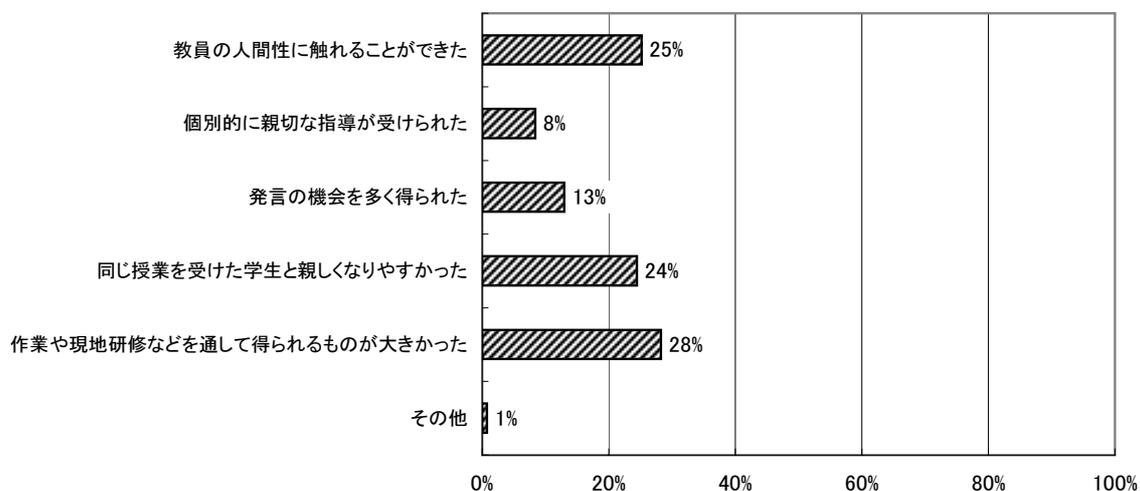
(1) このセミナーを受講する前、講義のような大人数形式の授業よりも多くのものが得られることを期待していませんか。



(2) では、実際にこのセミナーを受講してみて、少人数形式でしか得られないものがあると実感できましたか。

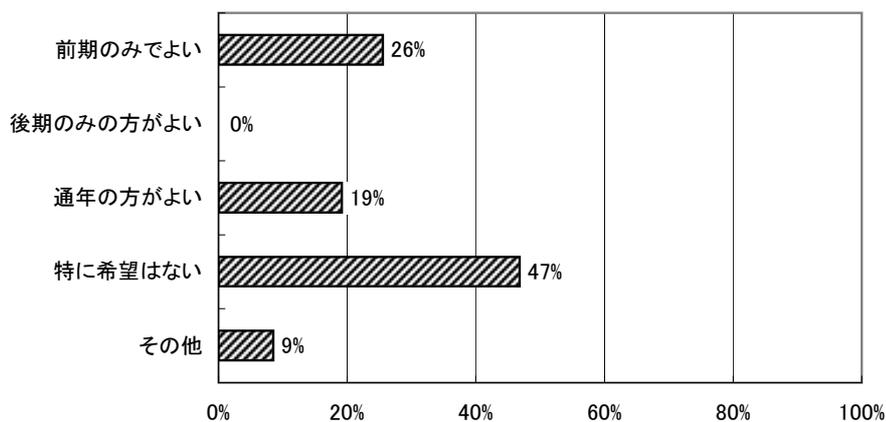


(3) 前問(2)で「とても実感できた」または「少しは実感できた」を選んだ方にうかがいます。少人数形式の授業でどのような点がよかったですか。(複数回答可)



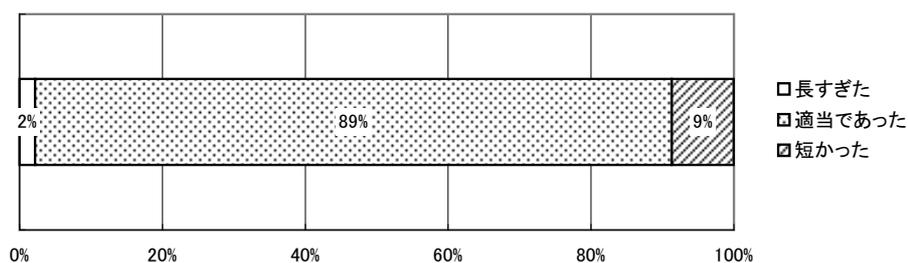
Q6 少人数セミナーの実施方法等についてのご意見をうかがいます。

(1) 少人数セミナーは前期のみの開講となっていますが、この開講時期についてはどう思いますか。

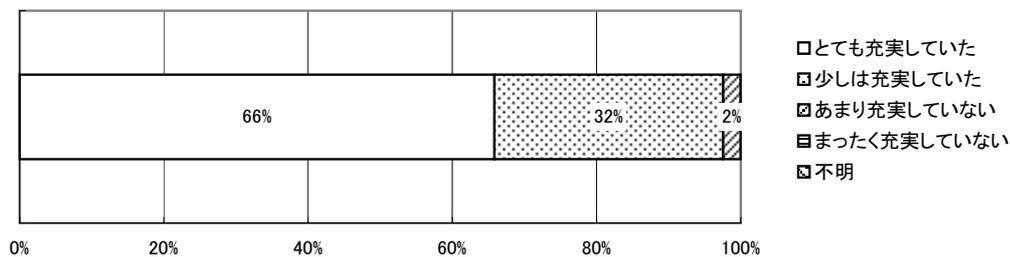


- 「その他」……
- ・前期も後期も別々にあれば良いと思う
  - ・1回生の前期以外でも開講してほしい
  - ・後期にも実施した方がよい
  - ・2回生以降も参加したい

(2) このセミナーの実施期間についてどう思われますか。

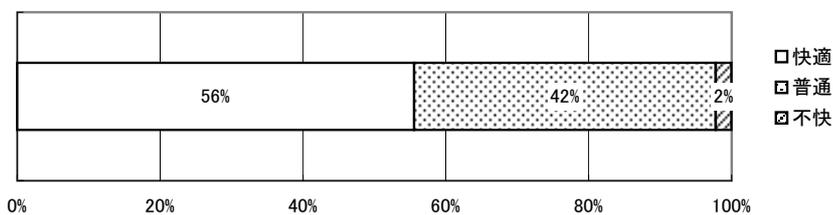


(3) このセミナーの実施場所の実験設備や実験器具についてどう思われましたか。

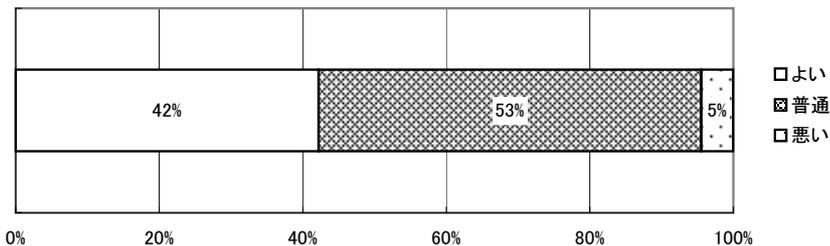


(4) このセミナーの宿泊についてうかがいます。

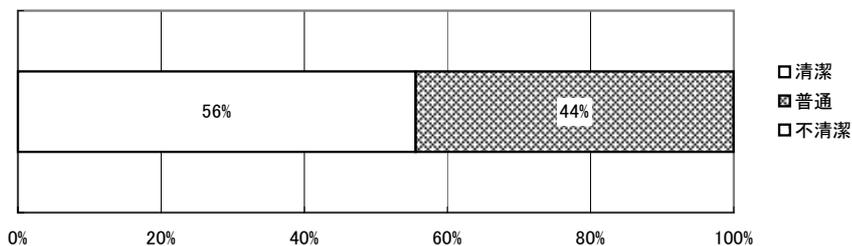
・ 共同の宿泊生活は



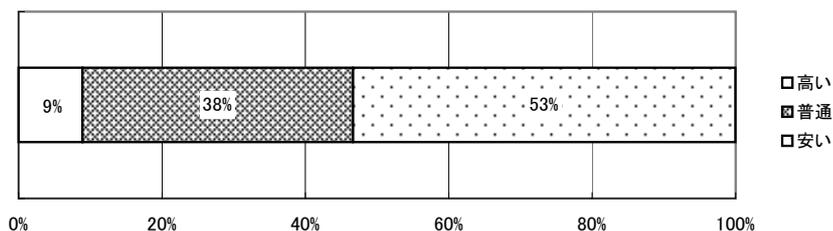
・ 宿泊施設の整備は



・ 宿泊施設の寝具は



・ 宿泊施設の経費は



(5) 宿泊施設や食事について、何かご意見やご要望があれば自由に記入して下さい。

#### 【紀伊大島実験所】

- ・蚊帳が必要だと少し感じた。

#### 【舞鶴水産実験所】

- ・とても快適でした。
- ・宿泊料金は安いのにとても快適でした。食事でも舞鶴産の魚や実験所の方の手作りの野菜を食べることができ、とても貴重な体験ができました。またみんなで作ったので、とてもおいしかったです。
- ・キッチンも、もう少しきれいにしてほしいです。その方がお料理も美味しく感じると思います。(注：この実習で使用したのは、大学院生の自炊用キッチンです。)
- ・シャワーが冷たい。

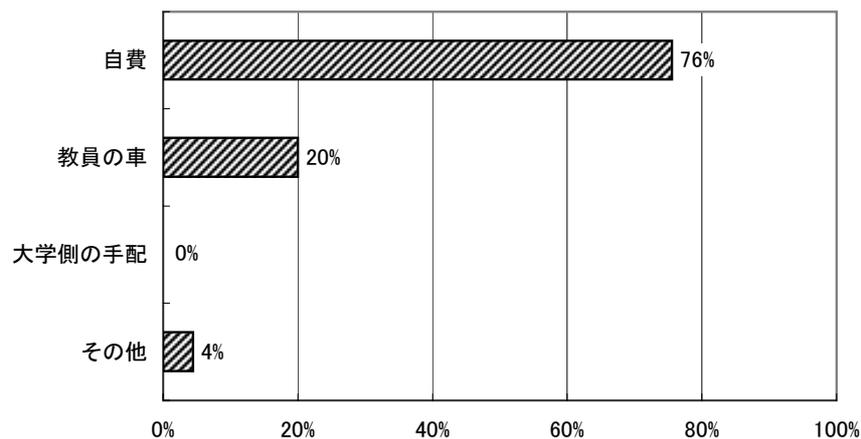
#### 【瀬戸臨海実験所】

- ・食事が美味しかったです。
- ・夜ごはんやお弁当は少しきつかった。みんなでバーベキューをするなど工夫すればよいと思った。
- ・夜はお弁当じゃないものの方がよかった。全体を通して揚げ物が多く重かった。あと、折角来たからには名産品などをもっと食べたかった。
- ・宿泊施設の説明がほしかった。コインランドリーとか。

#### 【その他の施設】

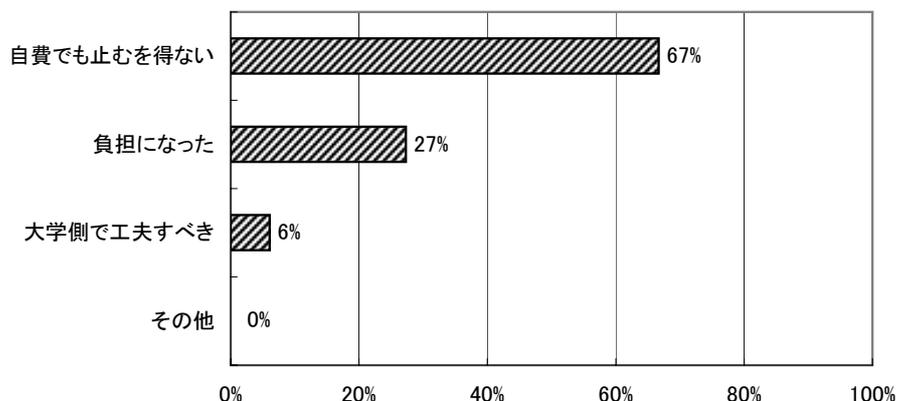
- ・毎食大変おいしい食事でした。海の幸を存分に味わいました。

(6) このセミナーの現地集合場所へのアクセスについてうかがいます。

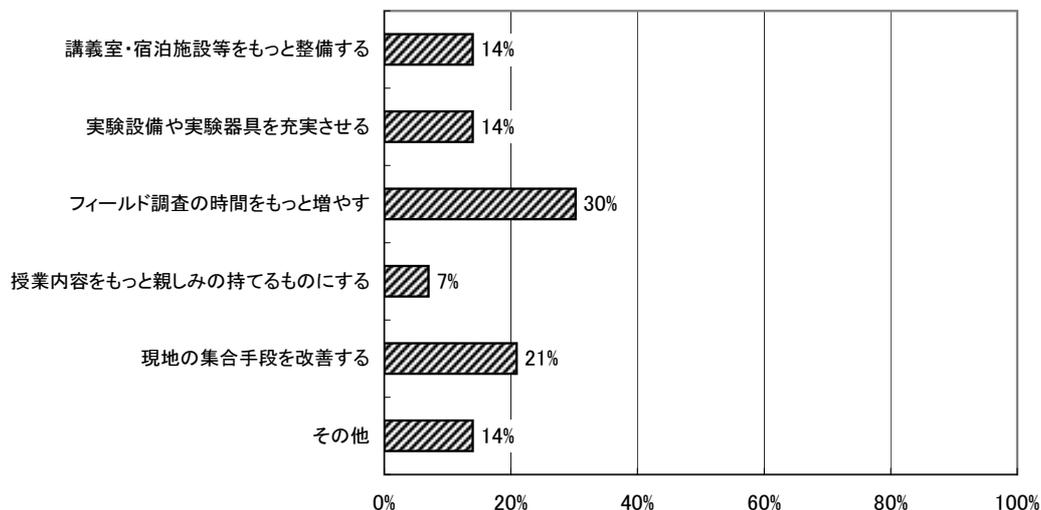


「その他」…… ・バス+教員の車

(7) 前問(6)で「自費」を選んだ方にうかがいます。



Q7 今後、少人数セミナーをさらに充実させるためには、どのようにすれば良いと思いますか。(複数回答可)



「その他」……

- ・1ヶ月くらいの期間で行う
- ・今回の内容で十分充実していたと思う
- ・前期だけでなく後期も開講する

Q8 今回受講された少人数セミナーについて、何かご意見やご希望があれば自由に記入して下さい。

**【芦生研究林】**

- ・京都大学にはいろいろな研究所があるのですが、そこでは具体的にどんな研究をしているのか知らなかった。今回この一つを見ること、実際に研究調査に関わることができて良かった。
- ・全く知らない分野だったので非常に楽しめた。ただ木の名前を覚えるのはかなり大変だった。
- ・台風の接近で雨の中の実地ゼミとなったが、晴れた日とは異なる経験ができて良かった。

**【紀伊大島実験所】**

- ・もう少し古座川の生物を見たかった。

**【舞鶴水産実験所】**

- 実習でゼミの人たちと仲良くなったので、実習を講義の初めの方でやることを考えてもいいと思う。その方がゼミでの発言もしやすくなるのでは。
- とても充実した実習でした。様々なことが実際現場を見て経験できたのがよかった。
- 移動時間が長かった分フィールド調査の時間が少し短かった気がするのですが、もう少し調査時間が長ければいいと思います。短期間でしたが充実していました。
- 内容も新鮮で興味をもてた。自然の中で過ごしフィールド活動ができて有意義だった。実験所の人々はユーモアがあっていい環境であるなと思った。
- シュノーケリングの時などに、魚の図鑑など持っていればと思った。
- 海が濁っていたのは残念だった。
- 実習をやる時期が梅雨と重なっていた。天気のことをしなくていいようもう少し早く実習をやった方がいいと思う。
- 非常に面白かったです。このような機会があればまた参加したいと思います。
- 良い友人にもめぐり会えてとても良い経験ができました。
- 懇親会のバーベキューは受講生より研究所のスタッフの方が盛り上がってたように思う。美味しかったです。
- 採った魚を食べたかったです。

**【瀬戸臨海実験所】**

- とてもいい先生で、すごく授業を楽しむことができました。
- 普段はできないことをたくさん経験することができました。自然豊かでとてものんびりしていて久しぶりに潮風にあって気持ちよかったです。見過ごしがちな生物にも生活があることなど説明してもらえてよかったです。少し欲を言えば、温泉もみんなで行きたかったし、ごはんもお弁当は嫌かなと思います。
- 期待していた以上に濃い生活を送ることができ、非常に充実感がある。軟体の生物に関する知識を持つことでより海の生物に対する興味がそそられる。
- ご飯と交通手段を改善してほしい。できれば参加者を事前に京都にいるときから知ればよかったと思う。
- セミナーの予定・施設の設備についてももう少し詳細に教えてほしかった。例えば、洗濯機があるなど。

**【その他の施設】**

- 作業や現地での研修、少人数で共同生活するなど、普段あまりしないことができ、1回生のうちにこうした経験をする機会があったのはよかったと思います。
- 事前に関連する本などを読んだことでセミナーがより面白く感じられたと思うので、上回生になったときもっと研究を楽しめるように今は基礎的なことなど勉強しておこうと思いました。
- もう少し意見を交換するなど積極的に取り組みたかったです。
- やはりフィールド実習を泊まりがけ行うというのは普段の授業では経験できないことなので、とてもいい経験になった。さらに奥の深い調査をして、ちょっとした研究レポートみたいなのを作れるのもっとよいと思います。
- 今回のポケゼミを受講したことで、フィールドに出て学ぶ楽しさを知ることができた。このポケゼミを受講したからこそ得られた自然や人との出会いもあり自分の視野が広がったと思う。先生とTAの方には本当にお世話になりありがとうございました。
- 少人数制のため、教授や教員の方と接する機会が多く、大学で働くことがどういうことであるか等といったことが、漠然とでだがイメージすることができ、とても参考になりました。

- とても充実していました。ただ講義が海のこと集中していたので、森と海のつながりを考えるということをも少ししたかった。

Q9 当センターのホームページにアクセスしたことがありますか。内容についてどう思われますか。

- 魚の写真とか面白かった。
- 写真が多用されていて興味のもてるサイトでした。
- 芦生に行く前に読んでおくと参考になるので良かったと思います。
- 説明も適切であり、良いと思われる。
- 見やすいし写真がいっぱいあってよかったです。瀬戸臨海実験所までのアクセス手段と所用時間をもっと詳しく書いてあれば便利だなと思いました。
- アクセスしましたが見れないものやよくわからなかったイメージがあります。もう少しプランクトンなどめずらしい写真を入れて興味が湧くようにしてほしいと思います。
- 少しわかりにくかったように思う。
- 何回もエラーが出ました。
- もっと詳しくして欲しい。

## (2) 外部資金の導入

(金額の単位はすべて千円)

## 2007年度 受託研究

委託者	委託研究名	研究担当者	職種	代表者名 (所属)	研究課題名	分担課題名	2007年度 交付額
㈱水産総合研究センター	魚類との相互関係に基づく大型クラゲの制御技術の検討	益田 玲爾	准教授	—	—	—	3,500
京都市	平成19年度八丁平植生継続調査	安藤 信	准教授	—	—	—	226
㈱水産大学校	平成19年度大型クラゲ発生源水域における国際共同調査委託事業	久保田 信	准教授	—	—	—	989
受託研究	計 3 件						4,715

## 2007年度 寄附金

寄付者(団体)	プロジェクト名称	担当教員	職種	2007年度 交付額
㈱阪本奨学会	演習林の研究及び施業運営等の助成	柴田 昌三	教授	1,000
㈱阪本奨学会	演習林の研究及び施業運営等の助成	柴田 昌三	教授	500
㈱阪本奨学会	演習林の研究及び施業運営等の助成	徳地 直子	准教授	700
㈱阪本奨学会	演習林の研究及び施業運営等の助成	嵩元 道徳	助教	700
㈱阪本奨学会	演習林の研究及び施業運営等の助成	坂野上 なお	助教	700
㈱村田製作所	センター共通経費	白山 義久	教授	2,000
日本財団	センター共通経費	山下 洋	教授	1,000
㈱自然環境研究センター	森林生態系の長期動態に関する研究助成	徳地 直子	准教授	1,800
㈱自然環境研究センター	森林生態系の長期動態に関する研究助成	柴田 昌三	教授	590
㈱自然環境研究センター	森林生態系の長期動態に関する研究助成	芝 正己	准教授	750
㈱自然環境研究センター	芦生モンドリ谷における森林生態系の長期動態に関する研究助成	安藤 信	准教授	750
アラスカ大学フェアバンクス校	沿岸生物の生物地理学に関する研究	白山 義久	教授	39,723
㈱京都理化学研究協会	海洋生物学に関する研究	白山 義久	教授	400
日本水産株式会社食品機能科学研究所	防藻防貝試験研究助成	益田 玲爾	准教授	1,000
寄附金	計 14 件			51,613

2007年度 科学研究費補助金

交付機関	研究種目	研究者	職種	代表者名 (所属)	研究期間 (年度)	課題番号	研究課題名	分担課題名	交付額 合計 ※予定を 含む	2007年度 交付額
㈩日本学術 振興会	基盤研究 (A)	田中 克	名誉教授	—	2006-2008	18208019	有明海湾奥部に存続する“大陸 沿岸遺存生態系”の起源と特性	—	43,420	13,910
㈩日本学術 振興会	基盤研究 (A)海外 学術調査	柴田 昌三	教授	—	2005-2008	17255007	インド・ミゾラム州における竹 類ムーリーの大面積開花に関す る生態的研究	—	35,380	7,930
㈩日本学術 振興会	基盤研究 (B)	山下 洋	教授	—	2006-2008	18380115	沿岸海域における陸域起源有機 物の挙動と資源生物生産に対す る役割の解明	—	17,030	5,980
㈩日本学術 振興会	基盤研究 (B)	白山 義久	教授	—	2007-2009	19310022	古座川水系七川ダムの放水が串 本湾の底生生物群集に与えるイ ンパクトに関する研究	—	16,250	7,410
㈩日本学術 振興会	基盤研究 (B)	徳地 直子	准教授	—	2007-2010	19380086	森林生態系の加齢に伴う窒素飽 和現象の解明と PnET-CN モ デルを用いた影響予測	—	19,240	6,110
㈩日本学術 振興会	基盤研究 (C)	中島 皇	講師	—	2005-2007	17580126	天然林の動態と環境保全機能	—	3,500	780
㈩日本学術 振興会	基盤研究 (C)	中西 麻美	助教	—	2005-2007	17580127	広葉樹および針葉樹林生態系の 資源獲得量に対する資源利用効 率と一次生産の変動予測	—	2,900	650
㈩日本学術 振興会	基盤研究 (C)	宮崎 勝己	講師	—	2005-2007	17570081	ウミグモ類及びクマムシ類を用 いた節足動物の発生様式の進化 に関する研究	—	3,600	650
㈩日本学術 振興会	基盤研究 (C)	田川 正朋	准教授	—	2005-2007	17580163	カレイ類変態期に起こる左右分 化の仕組みの解明と養殖魚にお こる形態異常の防衛	—	3,600	1,170
㈩日本学術 振興会	基盤研究 (C)	安藤 信	准教授	—	2005-2008	17510025	世界文化遺産（京都）の背後に ある森林景観の回復	—	3,400	1,040
㈩日本学術 振興会	基盤研究 (C)	芝 正己	准教授	—	2006-2007	18580145	森林生産再生支援ツールとして の森林認証・実行コードクロス モデルの構築	—	3,500	1,430
㈩日本学術 振興会	基盤研究 (C)	益田 玲爾	准教授	—	2006-2008	18580183	飼育下におけるカタクチイワシ 仔稚魚の行動特性の個体発生	—	3,400	1,430
㈩日本学術 振興会	萌芽研究	山下 洋	教授	—	2006-2008	18658079	尾虫類大量培養法の開発とヒラ メ仔魚の成長、発育に対する尾 虫類摂餌の効果	—	2,500	800
文部科学省	若手研究 (B)	深見 裕伸	助教	—	2006-2008	18770013	温帯域イシヤンゴ類の総合的な 生態調査および遺伝子バーコー ド化計画	—	3,600	1,100
文部科学省	若手研究 (B)	甲斐 嘉晃	助教	—	2007-2009	19770063	カサゴ目魚類における色彩多型 の進化的役割の解明	—	3,200	1,500
科学研究費補助金 計 15 件										51,890

## 2007年度 科学研究費補助金（特別研究員奨励費）

交付機関	研究者	職種	指導教員名	研究期間 (年度)	課題番号	研究課題名	交付額 合計 ※予定を 含む	2007年度 交付額
㈱日本学術 振興会	鈴木 啓太	特別研究員 (DC1)	田川 正朋	2005-2007	17・2310	有明海「大陸沿岸遺存生態系」仮説：主要河 川間の比較と安定同位体比の応用による検証	2,700	900
㈱日本学術 振興会	ISLAM, M.S.	外国人特別 研究員	山下 洋	2006-2008	18・06437	有明海におけるスズキの初期生態と加入量変 動機構に関する研究	2,400	1,000
㈱日本学術 振興会	高橋 素光	特別研究員 (PD)	益田 玲爾	2007-2009	19・3488	「成長・発達速度に依存した加入量決定理論」 に基づくイワシ類の資源量変動機構の解明	3,400	1,200
科学研究費補助金（特別研究員奨励費） 計 3 件								3,100

### (3) 2007年度 フィールド科学教育研究センターにおける主な取り組み (日記)

(1) 2007年4月

2007年度新入生向け少人数セミナーを開講

- |                          |                 |         |
|--------------------------|-----------------|---------|
| ・「C. W. ニコル “アフアの森” に学ぶ」 | (アフアの森)         | 柴田 昌三 他 |
| ・「フィールド実習 “森は海の恋人”」      | (気仙沼)           | 白山 義久 他 |
| ・「木造校舎を造る：木の文化再生へ」       | (北白川試験地ほか)      | 芝 正己 他  |
| ・「河口域の生態学」               | (舞鶴水産実験所)       | 山下 洋    |
| ・「海岸生物の生活史」              | (瀬戸臨海実験所)       | 久保田 信   |
| ・「海洋生物の多様性」              | (瀬戸臨海実験所)       | 白山 義久   |
| ・「魚類心理学入門」               | (舞鶴水産実験所)       | 益田 玲爾   |
| ・「原生的な森林の働き」             | (上賀茂試験地, 芦生研究林) | 中島 皇    |
| ・「森のつくりだすもの」             | (和歌山研究林)        | 徳地 直子   |
| ・「森里海のつながりを清流古座川に見る」     | (紀伊大島実験所)       | 梅本 信也   |
| ・「森林の再生と動態」              | (芦生研究林ほか)       | 安藤 信    |
| ・「豊かな森をめざして！」            | (芦生研究林)         | 芝 正己    |
| ・「節足動物学入門」               | (瀬戸臨海実験所)       | 宮崎 勝己   |
| ・「有機農業の可能性…持続可能な農業をめざして」 | (北白川試験地ほか)      | 西村 和雄   |

(2) 2007年4月～2008年3月

紀伊大島実験所において、古座川合同調査を実施(毎月実施)

(3) 2007年4月12日～7月12日

全学共通科目(リレー講義)「水圏生物学入門」開講

(4) 2007年4月12日

和歌山研究林において、和歌山県立有田中央高等学校清水分校との共催でウッズサイエンスを開講(3年生3名)

(5) 2007年4月18日

NPO法人エコロジー・カフェ主催シンポジウム「人と自然生態系との共存から学ぶ未来への贈り物」において、田中 克 名誉教授が「森里海連環学の創造～新たな価値観を求めて～」を特別基調講演

(6) 2007年4月21日

上賀茂試験地において「2007年度上賀茂試験地春の自然観察会」を開催 参加者18名

(7) 2007年5月6日

瀬戸臨海実験所において、和歌山県立向陽高等学校が水族館実習を実施(2年生3名)

(8) 2007年5月9日

和歌山研究林において、和歌山県立有田中央高等学校清水分校との共催で「SIMIZU タイム」(ふるさと体験)を実施(1年生26名)

(9) 2007年5月16日

フィールド研教授会構成員の拡大及び遠隔TV会議システムの導入

(10) 2007年5月16日

北 徹 理事が瀬戸臨海実験所を視察

(11) 2007年5月19日

芦生研究林において「芦生の森自然観察会『春の森を歩きながら樹木観察をしよう』」を開催 参加者20名

- (12) 2007年5月19日  
瀬戸臨海実験所附属水族館において「バックヤード体験学習(1)」を開催
- (13) 2007年5月19日～20日  
放送大学面接授業を瀬戸臨海実験所で開催
- (14) 2007年5月27日  
全日空「私の青空 釧路空港・標茶町湿原の森」においてフィールドセミナーを開講
- (15) 2007年5月31日  
和歌山研究林において、地域開放事業「森林体験学習」を実施（有田川町立八幡小学校5年生24名）
- (16) 2007年6月2日  
芦生研究林において、南丹市教育委員会との共催で「なんたん・わくわくキッズ」を実施
- (17) 2007年6月2日～3日  
瀬戸臨海実験所において、奈良県立奈良高等学校が「SSHサイエンスツアー」を実施（1年生1名 2年生9名）
- (18) 2007年6月3日  
瀬戸臨海実験所において、和歌山県立向陽高等学校が「水族館実習」を実施（2年生2名）
- (19) 2007年6月5日  
芦生研究林において、緑資源機構近畿北陸整備局管内事務職員と合同で「樹木識別現地研修会」を開催（緑資源機構職員17名，芦生研究林職員5名）
- (20) 2007年6月16日  
瀬戸臨海実験所附属水族館において「水族館の磯採集体験(1)」を開催
- (21) 2007年6月16日  
瀬戸臨海実験所附属水族館において「バックヤード体験学習(2)」を開催
- (22) 2007年6月18日  
舞鶴水産実験所において、京都府立西舞鶴高等学校理数探究科の生徒に対し講義（SPP連携講座）を実施  
参加者40名
- (23) 2007年6月22日～23日  
第9回京都大学国際シンポジウム2007「人間の安全保障のための地球環境学」への協力
- (24) 2007年6月27日  
北海道研究林において、標茶町立沼幌小学校が総合学習「木工体験学習」を実施（全学年11名）
- (25) 2007年7月7日  
和歌山県古座川町において「第5回 古座川シンポジウム」を開催（紀伊大島実験所，古座川流域協議会共催）  
参加者85名
- (26) 2007年7月7日  
舞鶴水産実験所において、京都府立南陽高等学校サイエンスリサーチ科の生徒に対し講義（SPP連携講座）を実施
- (27) 2007年7月8日  
全日空「私の青空 関西空港 高野の森」においてフィールドセミナーを開講
- (28) 2007年7月18日～20日  
仁淀川プロジェクトにおいて、水質調査及び現地視察を実施
- (29) 2007年7月21日～24日  
瀬戸臨海実験所において、滋賀県立膳所高等学校が生物実習旅行を実施（1年生24名）

- (30) 2007年7月21日～9月2日  
瀬戸臨海実験所附属水族館において「夏休み解説ツアー」を実施
- (31) 2007年7月26日～27日  
舞鶴水産実験所において、京都府立西舞鶴高校生に対し実習（SPP連携講座）を実施
- (32) 2007年7月26日～28日  
芦生研究林において、フィールド研公開講座2007「森のしくみとその役割」を開催 参加者30名
- (33) 2007年7月28日～30日  
瀬戸臨海実験所において「第3回南紀白浜まなびツアー～自然に学び、五感で学ぶ～」を開催（NPO法人エコロジー・カフェ関西事務所，フィールド研共催）
- (34) 2007年8月1日  
芦生研究林において、美山町内小学校5校との共催で自然体験教室「美山っこグリーンワールド」を実施  
（小学校4年生26名）
- (35) 2007年8月1日  
NaGISAプロジェクトに特定有期雇用教員（准教授）を採用
- (36) 2007年8月1日～3日  
舞鶴水産実験所において、京都府立南陽高校生に対し臨海実習（SPP連携講座）を実施
- (37) 2007年8月6日～10日  
全学共通科目（1～4回生対象）森里海連環学実習A（芦生研究林－由良川－丹後海コース）を開講（日本財団助成実習）
- (38) 2007年8月6日～10日  
舞鶴水産実験所において、京都府立海洋高校教員に対し研修指導を実施
- (39) 2007年8月12日  
シンポジウム「仁淀川の森と水を考える」を後援（高知県土佐市）（主催：仁淀川漁業協同組合）
- (40) 2007年8月18日～19日  
尾池和夫総長が北海道研究林を視察
- (41) 2007年8月24日～25日  
全日空の協力を得て、芦生研究林において和歌山県立有田中央高等学校清水分校が「森林体験学習」を実施  
和歌山研究林主催（1年生25名）
- (42) 2007年8月25日  
全日空「私の青空 広島空港 アサヒの森」においてフィールドセミナーを開講
- (43) 2007年8月27日  
全日空「私の青空 バンコック空港」においてフィールドセミナーを開講
- (44) 2007年8月28日～30日  
瀬戸臨海実験所において、兵庫県立尼崎小田高等学校サイエンスリサーチ科が臨海実習を実施（SSH事業）  
（2年生4名）
- (45) 2007年9月1日  
上賀茂試験地において「第4回 昆虫COEフィールド教育プログラム 上賀茂試験地『夏の一般公開自然観察会』」を開催 参加者45名（上賀茂試験地，21世紀COEプログラム「昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生」共催）

- (46) 2007年9月2日  
「第3回由良川フォーラム～森と海へのいざない 心と体の癒しを求めて～」を福知山市において開催（京都府中丹広域振興局，フィールド研共催） 参加者約180名
- (47) 2007年9月2日～8日  
全学共通科目（1～4回生対象）森里海連環学実習C（夏の北海道実習）を開講（日本財団助成実習）
- (48) 2007年9月4日～11日  
瀬戸臨海実験所において，平成19年度公開臨海実習（夏期）を実施
- (49) 2007年9月8日  
舞鶴水産実験所において，兵庫県立神戸高等学校SSH事業を実施
- (50) 2007年9月10日～17日  
全学共通科目（1～4回生対象）実習「北海道東部の人と自然」を開講
- (51) 2007年9月20日  
芦生研究林において，京都大学シニアキャンパス2007「フィールド学習D『芦生をめぐる』」を開講
- (52) 2007年9月21日～27日  
全学共通科目（1～4回生対象）森里海連環学実習B（紀伊半島の森と里と海）を開講（日本財団助成実習）
- (53) 2007年9月22日  
舞鶴水産実験所において，京都府立西舞鶴高等学校理数探究科の生徒に対し講義（SPP連携講座）を実施  
参加者40名
- (54) 2007年9月28日  
北海道研究林において「地域民有林森林所有者研修会」を開催（釧路森づくりセンター普及課，北海道研究林共催） 参加者16名
- (55) 2007年9月29日  
「チャリティトーク&ライブ“森よ，川よ，海よ，甦れ！”」を後援（高知市）（主催：第3回「“森里海連環学”のためのチャリティトーク&ライブ」実行委員会）
- (56) 2007年10月1日～2日  
舞鶴水産実験所において，京都府立海洋高等学校海洋科学科の生徒に対し，森林について考える野外実習（大江山）を実施 参加者16名
- (57) 2007年10月5日～7日  
瀬戸臨海実験所において，兵庫県立姫路飾西高等学校SSC 宿泊研修海洋実習を実施（1年生20名）
- (58) 2007年10月5日～2008年1月11日  
全学共通科目（リレー講義）「森里海連環学」を開講（日本財団助成講義）
- (59) 2007年10月5日～2008年1月11日  
全学共通科目（リレー講義）「海域・陸域統合管理論」を開講（日本財団助成講義）
- (60) 2007年10月5日～2008年1月11日  
全学共通科目（リレー講義）「森林学」を開講
- (61) 2007年10月12日～14日  
瀬戸臨海実験所において，兵庫県立姫路飾西高等学校SSC 宿泊研修海洋実習を実施（1年生20名）
- (62) 2007年10月13日  
瀬戸臨海実験所附属水族館において，きのくに県民カレッジ連携講座「バックヤード体験学習(1)」を開催

- (63) 2007年10月17日～19日  
平成19年度京都大学フィールド科学教育研究センター技術職員研修「森林トレイルマッピング入門」を芦生研究林において実施 参加者10名
- (64) 2007年10月19日  
和歌山研究林において、地域開放事業「森林体験学習」を実施（参加者 有田川町立八幡小学校5年生24名）
- (65) 2007年10月19日～21日  
瀬戸臨海実験所において、大阪府立豊中高等学校が生物特別実習を実施（1年生8名・2年生4名）
- (66) 2007年10月20日  
全日空「私の青空 中部国際空港 八百津の森づくり」においてフィールドセミナーを開講
- (67) 2007年10月21日  
全日空「私の青空 大館能代空港 白神の森」においてフィールドセミナーを開講
- (68) 2007年10月27日  
芦生研究林において「芦生の森自然観察会『秋の森を歩きながら樹木観察をしよう』」を開催 参加者20名
- (69) 2007年10月28日  
全日空「私の青空 宮崎空港・北郷町レイクサイドの森」においてフィールドセミナーを開講
- (70) 2007年10月30日  
木谷 雅人 理事が北白川試験地および上賀茂試験地を視察
- (71) 2007年11月2日  
舞鶴水産実験所において、京都府立海洋高校の学生に対し、施設案内と講義を実施 参加者16名
- (72) 2007年11月17日  
上賀茂試験地において「2007年度上賀茂試験地秋の自然観察会」を開催 参加者31名
- (73) 2007年11月18日  
神戸大学・京都大学合同市民公開講座「森と海をめぐる市民公開講座～人・社会・自然を考える～」を開催（神戸大学大学院海事科学研究科，フィールド研共催 日本財団後援） 参加者76名
- (74) 2007年11月30日  
和歌山研究林において「森とあそぶまなぶ」森林体験学習を開催（有田川町立田殿小学校4年生37名）
- (75) 2007年12月8日  
瀬戸臨海実験所附属水族館において、きのくに県民カレッジ連携講座「バックヤード体験学習(2)」を開催
- (76) 2007年12月8日  
第2回エコの寺子屋（講義）を開講（NPO法人エコロジー・カフェ，フィールド研共催）参加者30名
- (77) 2007年12月9日  
第2回エコの寺子屋（フィールド学習）を上賀茂試験地において開催（NPO法人エコロジー・カフェ，フィールド研共催） 参加者10名
- (78) 2007年12月22日～2008年1月6日  
瀬戸臨海実験所附属水族館において「冬休み解説ツアー」を開催
- (79) 2008年2月3日  
神戸大学・京都大学合同市民公開講座「森と海をめぐる市民公開講座～人・社会・自然を考える～」を開催（神戸大学大学院海事科学研究科，フィールド研共催 日本財団後援） 参加者80名
- (80) 2008年2月7日  
京都教育大附属高校において、舞鶴水産実験所教員が同校生徒に対し講義（SSH 連携講義）

- (81) 2008年2月8日～11日  
全学共通科目（1～4回生対象）実習「暖地性積雪地域における冬の自然環境」を開講
- (82) 2008年2月9日  
瀬戸臨海実験所附属水族館において、きのくに県民カレッジ連携講座「バックヤード体験学習(3)」を開催
- (83) 2008年2月18日～24日  
全学共通科目（1～4回生対象）実習「北海道東部の厳冬期の自然環境」を開講
- (84) 2008年3月8日  
横浜新都市ホールにおいて、京都大学附置研究所・センターシンポジウム「京都からの提言－21世紀の日本を  
考える（第3回）」を開催（京都大学附置研究所・センター主催）
- (85) 2008年3月15日  
第4回時計台対話集会「むしに教わる森里海連環学」を開催 参加者約430名  
講演：養老孟司氏、藤崎憲治教授  
講話：村田泰隆氏（榊村田製作所代表取締役会長）  
報告：柴田昌三教授，山下洋教授，梅本信也准教授
- (86) 2008年3月21日～24日  
瀬戸臨海実験所において，第9回 NaGISA Taxonomy Workshop of Nematoda を開催（日本財団助成）
- (87) 2008年3月25日  
和歌山県古座川町において「第6回 古座川シンポジウム」を開催 参加者76名（紀伊大島実験所，古座川流  
域協議会主催 古座川漁業協同組合，七川漁業協同組合，古座漁業協同組合共催）
- (88) 2008年3月25日～31日  
瀬戸臨海実験所附属水族館において「日替わり解説ツアー」・「バックヤードツアー」を開催
- (89) 2008年3月25日～31日  
瀬戸臨海実験所において2007年度公開臨海実習（春期）を実施
- (90) 2008年3月28日  
徳山試験地のヒノキ林が，文化庁の「ふるさと文化財の森（檜皮）」に設定される

## ●●● 2. 各施設における活動の記録 ●●●

### (1) 教育, 社会連携, 特記事項

#### 1) 芦生研究林

芦生研究林長 芝 正己

##### ■教育研究

本年度の芦生研究林の利用者総数は延べ10,500名であったが、このうち教育面（公開講座を含む研究林実験・実習等）の利用者数は全体の15.3%を占める1,608名であり、前年より若干減少した。なお、教育面の総利用申請件数34のうち、学内からが17件（フィールド研を含む農学部・研究科：13、他学部・研究科等：4）、他大学等からの利用申請が17件（大学：4、官公庁：2、一般〔小・中・高校を含む〕：11）であった。

研究を目的とする利用者数は、全体の13.5%を占める1,417名であり、全体で54件の利用申請を受け付けた。このうち、学内からの利用申請が39件（フィールド研を含む農学部・研究科：26、他学部・研究科・研究所等：13）、学外からの利用申請が15件（内訳、大学関係、研究所・博物館関係、都道府県行政機関関係等）であった。昨年実績と比較して、学外からの利用申請数はほぼ横ばいであった

##### ■社会貢献

社会連携としての一般開放事業は、研究林内の自然観察・体験実習、ハイキングなどを目的として、全体で27件の申請（前年度32件）があったが、この中で、美山町立自然文化村と京都府青少年山の家が従来から行っている「芦生研究林の原生林観察・ハイキング」では延べ3,379名の利用があった。また、滋賀県側からの団体利用は、滋賀県高島事務所環境整備課、(株)朽木村観光協会、(株)びわ湖高島観光協会であり、延べ52名の利用実績であった。依然として、グリーンツーリズムや森林浴などの社会文化的動向と連動するように、芦生の原生的な自然に触れたい、自然を守りたいという一般からの要望が多いため、前年に引き続いて報道関係（新聞社：毎日新聞、朝日新聞、京都新聞、放送局：朝日放送、テレビ東京等）や出版関係（エルマガジン、月刊SAVVY等）からの取材申請も相当数に上った。また、継続的に実施している社会連携活動は、①大学等地域開放特別事業 森林体験学習：8月24～25日、和歌山県立有田中央高校清水分校（全日空協力）、②美山町小学校合同自然体験教室「美山っ子グリーン・ワールド」：8月1日、美山町内小学校第4学年、③南丹市教育員会共催「なんたん・わくわくキッズ」：6月2日、南丹市内小学生、④北桑田高校「郊外森林体験実習プログラム」：11月5日、京都府立北桑田高校森林リサーチ科学生、が行われ、昨年同様、環境教育面でのフィールド体験学習への関心が依然として高いことを示した。これ以外には、大阪ロータリークラブ、NPO法人シニア自然大学、NPO法人芦生自然学校、大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎、高島市立朽木中学校、兵庫県立尼崎小田高等学校等の見学・実習のプログラムを支援した。このような社会的要請は今後も続くことが予想され、芦生研究林教職員の役割が一層期待される。平成3年以来行ってきた公開講座「森のしくみとその役割」は今年で17回目を迎え、中一日の野外での森林観察・体験学習と、前後両日の講義という例年のプログラムで行った（7月26～28日）。なお、受講生は30名であった。この公開講座とは別に、芦生研究林職員による「芦生の森自然観察会（入門編）」が、春（5月19日）と秋（10月27日）に行われた。定員20名に対し、それぞれ3倍強の応募があった。今年で2年目であるが、既に芦生研究林独自のものとして定着しつつあると言える。

##### ■施設の特記事項

今年度の主要な特記事項は、事務所の屋根葺き替え、学生宿泊所及び宿泊所の屋根塗装、職員宿舍へのシャワー設備設置、事務所構内入り口のカシノナガキタイムシの被害ミズナラの伐採、内杉林道擁壁崩壊、機械器具関係（教育研究用機材の更新等）：メディカルフリーザー（冷凍庫）・講義室用マイクシステムアンプの導入、モニタリングサイト1000への登録等であった。

## 2) 北海道研究林

北海道研究林長 安藤 信

### ■教育研究

本研究林は、釧路湿原、阿寒、知床の3つの国立公園と至近距離にあり、その地理的特性を活かして全学共通および農学部学生実習が年4回行われている。

「調査研究方法論実習Ⅰ」は研究林を拠点に、国有林・知床自然センターの協力の下に、世界自然遺産の知床半島や阿寒・釧路湿原国立公園の森林・林業を調査し、人と自然の新しい関係を探ることを目的としている。8月1日から5日までの5日間、農学部の食料・環境経済学科2回生4名が参加した。

「森里海連環学実習C」は北海道大学と共同で行っているもので、自然度が高い別寒辺牛川の最上流部に近い標茶区から、牧草地として使われている中流、そして下流の厚岸湖にいたる流域の植生、土壌、水質・水生生物調査を通じて、森一里一海の繋がりを学ぶ。9月2日から8日までの7日間、標茶管理棟と北海道大学厚岸臨海実験所を拠点に、本学工学部、農学部、総合人間学部の1~4回生7名と北海道大学理学部、農学部、水産学部1回生9名の16名が参加した。

「北海道東部の人と自然・研究林実習Ⅲ」は、北方の森林・湿原植生、森林の垂直分布や火山性土壌、道東の林業・林産業の現況を学ぶとともに森林作業を体験する。9月10日から17日までの8日間、農学部、理学部、総合人間学部、法学部の2~4回生14名が参加した。

「北海道東部の厳冬期の自然環境・研究林実習Ⅳ」は、季節凍土が発達する道東において、冬の森林、積雪・凍土の調査法を修得し、環境資源としての森林の役割や持続的な管理について学ぶ。2月18日から24日までの7日間、農学部、法学部の1~4回生12名が参加した。

### ■社会貢献

「木工体験学習（沼幌小学校共催）」は、自然の中で木工工作を体験し、木工に対する興味・関心や自然に対する敬愛心を育てることを目的としている。6月27日に小学生11名が参加した。

「地域民有林森林所有者研修会（釧路森づくりセンター普及課共催）」は、9月28日に16名が参加し、地域林業における様々な取り組み事例として京都大学研究林の試験・研究について説明した。

「しべチャアドベンチャースクール ジュニアリーダー養成講座（標茶町教育委員会）」は、地元にある京都大学研究林を知るとともに、森林の役割や樹木の観察・識別法を学ぶことを目的とし、10月13~14日に行われた。参加者は小学生8名とリーダーの高校生4名等であった。

### ■施設の特記事項

北海道研究林は約90km離れた標茶、白糠の2つの森林区から成る。近年、実習等の利用者や地元の小中学生を中心とする利用も増加しており、2つの森林区への職員の適正な配置と施設の充実が目下の重要課題である。経験のある技術職員の転勤が相次いだり、新規採用職員は平成18年度の1名に続いて、19年度にも2名が配置され、職場は大幅に若返った。学生実習と地域社会貢献を職務のメインに据えている本研究林にとって、若い職員の柔軟な適応力で対処できたことは大きな成果であった。

### 3) 和歌山研究林

和歌山研究林長 徳地直子

#### ■教育研究

8月29日から31日に、全学共通科目ポケットセミナー“森のつくりだすもの”を行った。参加者は1回生7名であった。和歌山研究林に源流を持つ湯川川が流れ込む有田川の河川水を採取し、pHやECの測定を行い、河川水の流下に伴う変化について学習した。研究林内ではハコヤ尾をルートとした林内観察や造林地での森林調査、森林施業の意義について学び、実際に間伐のための伐木実習を行った。

#### ■社会連携

総合的な学習

○和歌山県立有田中央高等学校清水分校共催

2002年度より、清水分校の正式科目ウッズサイエンスを開講している。3学年の3名は、主要な産業である林業について、実習を通して自然のすばらしさに触れ「緑を守ることの大切さ」を理解させることを目的に、測量・刈払い・伐採など様々な林業作業、研究林で行われている研究に関する作業を体験して林業について学習を行った。

○和歌山県立有田中央高等学校清水分校

5月9日に1年生26名と引率教員5名が、ふるさとの自然のすばらしさを体験することによって、その良さを知るとともに、地域社会において豊かに生きる心を育てることを目的に、午前中はハコヤ尾をルートとして森林ウォークを行い、午後は二班に別れて「森林の役割について」の講義と八幡谷樹木園で樹木観察を行った。

8月24日から25日には1年生25名と引率教員4名が、清水を離れて他地域の自然・産業・文化を体験することによって、ふるさとの課題を理解し、その将来について考えることを目的に、芦生研究林を訪れた。長治谷から杉尾峠まで森林散策を行い、夜には文化体験として芦生の火祭り（あげ松）を見学し、翌日は北山スギの資料館を見学した。この行事はANAとの提携により実行されている。

○有田川町立八幡小学校

「森は友だち 森林の町清水」環境を課題として、地域の自然に関心を持ち、調査・体験活動などを通して、自然と共に生きることについて考えることを目的に、5年生24名と引率教員2名が5月31日に「森林について」の講義、樹木識別学習、植林体験を、10月18日には間伐作業体験を行った。

○有田川町立田殿小学校（有田川町役場産業課主催）

有田川町の面積の約8割は森林で、森林には温暖化の防止など環境への好影響や森林浴等による癒しの効果、水源の涵養など多面的な機能の重要性を遊びながら学ぶことを目的に、11月30日に「紀の国森づくり基金活用事業」の一環として開催された。「森とあそぶ・まなぶ」を課題として、4年生37名・引率教員3名（和歌山県職員2名・有田川町職員6名）が樹木観察・間伐作業体験を行った。また、平成20年2月26日には田殿小学校で森の大切さを水から学ぶ「雨と川の水の違い」について学習会を行った。

#### 4) 上賀茂試験地

上賀茂試験地長 柴田昌三

##### ■教育研究

上賀茂試験地では2007年度も数多くの実習利用、研究利用、見学利用を受け入れた。例年どおりの学内外の教育利用が実施された中で、学外からの利用は、京都府立大学、京都教育大学、京都精華大学、京都造形芸術大学からのものであった。民間団体の利用も三団体を受け入れた。教育利用による利用者数は1,000名を超えた。研究利用は25件を受け入れ、年間1,000人近い利用があった。研究利用の多くは学内の研究者によるものであったが、学外からも6件の研究テーマを受け入れた。

2007年度に受け入れた教育利用のうち、この年度に初めて行われた実習として、学内の少人数セミナー「木造校舎を造る一木の文化再生へ」がある。従来、本部北部キャンパスの北白川試験地内に所在するj.Pod実験モデル棟で行われていた講義であるが、本年度からは木材生産を体験してもらうために、上賀茂試験地でヒノキを一本伐採し、その木材を用いて、製材、まな板作りを経験してもらう機会を作った。受講生はすべて1回生であり、実際に木を伐ったことのある学生はいなかった。学生の多くは工学部で建築を目指す学生であり、木造建築物に興味を持つ学生であったが、彼らにとって、木材生産の実際をかいま見たことは大きなインパクトであったようである。この少人数セミナーの実施にあたっては、試験地の技術職員が、木材の伐採から製材、まな板作りにいたるすべての工程で、懇切丁寧な指導を行った。この経験を通じて、学生の木造建築を見る目が変わったことが実感でき、いい経験を与えることができたと考えている。

##### ■社会連携

上賀茂試験地では従来、春と秋に自然観察会を開催している。2007年度にはこれらに加えて、夏にも自然観察会を開催した。これは本学農学研究科を中心として推進されている21世紀COEプログラム「昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生」との共催で行った。観察会は大学院生が進行をつとめ、COE拠点リーダーで農学研究科教授の藤崎憲治氏、柴田上賀茂試験地長の挨拶に続いて、生き物クイズ、訪花昆虫と花に関する講義、樹木識別実習を講義室で行ったあと、屋外に出て事前に仕掛けられた昆虫捕獲トラップの確認、捕獲調査方法の紹介などを交えて、昆虫の採取と観察が行われた。夕食後には夜の森林観察と昆虫観察が行われた。その中ではライトトラップに集まる昆虫の観察も行った。多くの小中学生を迎えての観察会では、子供たちの歓声が随所であがり、アンケート結果を見ても参加者が心底楽しんでくれたことが感じられた。

##### ■施設の特記事項

現在、京都府北部から中部にかけて、カシノナガキクイムシによるナラ枯れが拡大しつつあり、その影響が危惧されている。2007年度前までの情報では、北山中部までの南下と京都市内東山における被害が報告されていたが、本年度には、京都府立植物園と並んで、上賀茂試験地でもナラ枯れが記録された。上賀茂試験地ではコナラ4本、ミズナラ2本、アメリカガシワ3本の合計9本の大径木が被害を受け、枯死した。このうち、アメリカガシワは上賀茂試験地が見本樹として伝えてきた個体である。枯死木に関しては京都府京都林務事務所および京都市林業振興課との協議の上、追加配当予算で薬剤処理を行った。ナラ枯れに加えて、従来から被害が続いているマツクイムシ被害アカマツの処理も行った。過去数年間の未調査・未処理個体の蓄積と被害のさらなる拡大によって、2007年度には試験地のほぼ全域から合計364本のアカマツ及び外国産マツを伐採・処理した。

## 5) 北白川試験地

北白川試験地長 柴田昌三

### ■教育研究

北白川試験地は、フィールド科学教育研究センターの中で唯一本部キャンパス内に所在する。そのため、学内の種々のイベントに利用されることが多い。2007年度は、本学新規採用者の施設見学、オープンキャンパスの見学対象地などとして利用された。

### ■施設の特記事項

2007年度には、北白川試験地内で2本のウツクシマツがマツクイムシによって枯死した。ウツクシマツはアカマツの変種で、滋賀県の自生地は天然記念物に指定されて、手厚い保護が行われている。京大北部キャンパス内にはかつてウツクシマツが数多く植栽されていたが、工事やマツクイムシ被害によって個体数は激減しており、貴重な遺伝子資源である。その中で、2007年度に2本の個体が失われたことは大きな損失であると考えられ、残る個体の維持に力を注ぐ必要性が考えられる。

北白川試験地で管理している敷地内に、芝生地に面したシダレザクラがある。このザクラ前の芝生地は学内でも有名な花見の名所であり、毎年春には数多くの教職員がこのザクラを愛でながら花見を催す。このザクラは過去数年の間に勢いを失いつつあり、次世代のザクラの植栽の検討にあわせて、樹勢の回復が試みられてきた。2007年度には、樹勢回復のために、周辺の土壌改良を施した。これにより、ザクラの回復の兆しが見えつつある。

## 6) 徳山試験地

徳山試験地長 中島 皇

### ■教育研究 檜皮剥皮試験 10年目の伐倒調査

1998年2月に文化庁の行政科研「大径材および高品位材の供給に関する研究」で設定されたヒノキの剥皮試験林で、設定後10年目の伐倒調査が行われた。今回の調査木のデータは解析中であるが、これまでの結果では檜皮剥皮による顕著な影響は見られていないと報告されている。詳しくは報告書(木造建造物文化財の為の木材及び植物性資材確保に関する研究(H17~19年度科学研究費補助金研究成果報告書, 課題番号17200051, pp179~197, 2008)を参照頂ければ幸いである。試験研究はさらに5年後に最終伐倒調査を行って試験報告をまとめることになっている。

### ■社会連携 文化庁の「ふるさと文化財の森」

徳山試験地のヒノキ林が2007年度のふるさと文化財の森(檜皮)に選定された。「ふるさと文化財の森」とは、文化財建造物の修理に必要な資材のモデル供給林及び研修林(詳しくは文化庁のHP: <http://www.bunka.go.jp/bunkazai/>)で、山口県内では初めての設定である。また、大学演習林関係では2006年度の岩手大学滝沢演習林(アカマツ)に次いで2番目(東大・秩父演習林(サワラ)とともに)になる。徳山試験地としては、檜皮剥皮試験の成果も含めて、特にモデル研修林として貢献したいと考えている。

### ■施設の特記事項 旧試験地に関連するテレビ取材

5月23日(水)にテレビ山口放送(TYS)「なせ町の真ん中に緑が残ったのか? 散策シーズン周南西緑地公園(旧徳山試験地): スーパー編集局」で周南西緑地公園(旧徳山試験地)が取り上げられ、公園愛護会が結成され樹木観察会が開催されていることや万葉の森の珍しい樹木が紹介された。これらに関連して現在の試験地の紹介もあった。「ふるさと文化財の森」とも関連して周南市教育委員会と連絡をとり、地域との連携を深めていきたいと考えている。

## 7) 紀伊大島実験所

紀伊大島実験所長 梅本信也

### ■教育研究

紀伊大島実験所は、2007年度から古座川プロジェクトの主たる活動拠点となり、参加研究者同士の情報交換や議論の場を提供したほか、古座川流域協議会や地域の行政機関や各種生業組合との連絡調整を活発に行った。古座川プロジェクトを円滑に遂行するための古座川合同調査は、4月の第17回調査から3月の第28回まで毎月行われ、調査活動の一部は「古座川合同調査報告集 第1巻」としてまとめられた。また、古座川流域および周辺住民対象のための古座川シンポジウムは7月と3月に第5回および第6回として開催され、古座川合同調査魚族班、きのこ班、冷水病班、景観班によって活動詳細が報告された。

古座川で大発生したアユ冷水病を沈静化させるための第1歩として、紀伊大島実験所がコーディネーターとなり、和歌山県水産試験場、関係漁協、古座川町役場が共同で6月ならびに翌年の2月に古座川河川底付着藻類における冷水病菌分布一斉調査を行い、貴重な資料を得た。

### ■社会連携

紀伊大島実験所は開設以来、教育、プロジェクト研究、教員研究、地域貢献を意識して諸活動を行ってきたが、フィールド科学教育研究センターと統合してからは、以前からの方向を堅持しつつ、あらたに教育・研究・社会貢献の3大柱に書き換え、取り組むべき内容や地域をさらに拡張し今日に至っている。当施設の年間利用者は1,000名を超えており、一般見学者や講義実習関係の学生、院生、スタッフを除く研究者や学術的訪問客、あるいはマスコミ関係者は、月平均で20~40名である。祝祭日も含めて早朝や昼間、夜間の電話、メール相談、さらに出前講義や相談にも随時対応しており、緑豊かな貴重な照葉樹森林に位置する地域のよろず相談所として地元では親しまれている。

その他詳細は、紀伊大島実験所HPを御覧いただきたい。

## 8) 舞鶴水産実験所

舞鶴水産実験所長 山下 洋

### ■教育研究

舞鶴水産実験所里海生態保全学分野に所属する大学院生の数は毎年増え続けており、平成19年度は、修士課程6名、博士後期課程6名となった。うち4名は、韓国、フィリピン、インド、台湾からの留学生であり、そのうちの2名は国費留学生である。これに加えて、4回生2名が舞鶴で卒業研究を行うとともに、外国人特別研究員1名（バングラディッシュ）が在籍し、活発な研究活動を行っている。本年度はとくに、森里海連環学研究「若狭湾海域・陸域統合プロジェクト（WakWak）」の推進体制の充実をはかった。舞鶴水産実験所を中心に農学研究科とも連携して、多くの学生・大学院生が、由良川の上流域から河口、丹後海にいたる水域で多様な課題を持って研究を進めている。本年度は、水生昆虫、付着藻類、河口域の物理過程、両側回遊性エビ類、ナマコ、メイオベントス、マクロベントス、スズキ仔稚魚、ヒラメ仔稚魚、アミ類などを対象に研究が進められた。また、魚類の初期発育に伴う行動の発達やクラゲをめぐる生態研究、カサゴ目魚類の分類学的研究においても、多くの成果が報告された。

### ■社会連携

水産実験所では、京都大学の学生・院生を対象とした7コース、他大学3コース、高等学校5コースの合計15コースの実習を実施した。社会連携として、JICA研修や地域の催しなどに協力するほか、小・中・高等学校の教員・生徒に対して出前講義等を行った。小中高等学校での講義および市民を対象とした講演は、それぞれ10校および7件におよぶ。教育機関への協力には、サイエンスパートナーシップ（京都府立南陽高校、同西舞鶴高校）、スーパーサイエンスハイスクール（京都教育大学附属高校、兵庫県立神戸高等学校）、見学学習（京都府海洋高等学校）、出前講座（舞鶴

国立高等専門学校)、科学探偵士(西小倉中学校、高野小学校)などがある。主な地域との連携活動の連携先は、由良川フォーラム、京都府漁連漁業者交流会、舞鶴市自然科学教室などである。このほか、京都府漁業調整委員、京都府農林水産試験研究機関あり方検討会委員、京都舞鶴立命館地域創造機構運営委員、由良川下流域水面利用調整協議会幹事など、京都府北部や舞鶴市の地域産業の活性化と自然環境の管理などにおいて多くの重要な役割を担った。

### ■施設の特記事項

施設の特記事項として、緑洋丸と白浪丸の係留栈橋である金属製の浮き栈橋の老朽化が著しく、いつ穴が空いて栈橋が沈没してもおかしくない状態であったが、本年度に営繕事業により補修することができた。さらに、宿泊棟のボイラーを更新して、能力を54,000kWから130,000kWに増大したので、より多くの実習生が一度に風呂を利用できるようになった。今後の大きな課題は、実習・研究用舟艇であり水産実験所の教育研究活動の核となる緑洋丸の代船建造である。本船は平成2年に竣工しすでに18年目に入っており、船体において不具合の発生件数も増加しつつあり、安全な教育環境を維持するためにも早めの代船建造が必要である。

## 9) 瀬戸臨海実験所

瀬戸臨海実験所長 白山義久

### ■教育研究

瀬戸臨海実験所では、理学研究科の協力講座(海洋生物学学科)として、大学院生を受け入れている。平成19年度の構成は、修士2名、博士3名である。その他に農学研究科から委託研究学生として修士1名、博士1名を受け入れた。このうち博士の学生3名が年度内に学位申請論文を提出し、博士の学位を取得した。

平成19年度から、NaGISAプロジェクトでは特定有期雇用教員として、Patricia Robin RIGBY准教授を採用し、教育と研究活動の充実を図った。そして、平成18年度に開催したNaGISA国際会議の論文集の出版、NaGISA Handbookの出版などに尽力してもらった。しかし残念なことに、RIGBY准教授は、12月に交通事故で亡くなったため、再度あらたな教員を採用すべく、公募を実施した。

平成19年度から、古座川プロジェクトの一環として、七川ダムの放水が串本湾の底生生物群集に与える影響に関する研究を開始した。天候に恵まれず、実際の調査はこの年度はベースライン調査を1回実施したにとどまった。調査項目は、CTDセンサーによる一般的な海洋観測、採水による栄養塩分析、海底堆積物の粒度分析、マクロベントスおよびメイオベントスの群集分析、マクロベントスの優占種の分子生物学的分析などである。

### ■社会連携

瀬戸臨海実験所の最大の社会連携である水族館に関しては、別途報告した(第1章1節7項「京大白浜水族館における社会連携活動」参照)。それ以外には、京大の学生・院生を対象とした実習を12コース、他大学の実習を15コース、高等学校・中学校の実習を7コース、放送大学など生涯学習コースを3コース実施した。これらの実習による受け入れは総計で2,404人・日である。他大学の実習では、7コースについて非常勤講師として、また高等学校・中学校の実習においてもSPPおよびSSH事業の一環となっているものを中心に、7コースについて、実際の実習を担当した。

社会連携として、各種の国の委員会において重要な役割を果たし、研究成果の社会への還元に貢献した。例えば経済産業省のCCS研究会委員として、二酸化炭素の分離回収貯留に関する提言のとりまとめを行った。

### ■施設の特記事項

長年の懸案であった、実習船「ヤンチナⅢ」の代船として、海洋観測実習船「ヤンチナ」の建造が、全学経費において認められ、平成20年3月に就航した。本船は、ウィンチ、Aフレームガントリーを装備し、高度な沿岸域の海洋観測が実施可能になった上、船速が大きく向上したため、活動範囲も大幅に広がった。今後、高度で安全な実習が可能に

なったばかりでなく、研究においても、古座川プロジェクトにおいて串本湾での観測を実施する際に活用することができるようになるだろう。

また水族館についても、懸念材料であったチラー（熱交換器）の更新が実現し、水槽温度の管理に万全を期すことができるようになった。さらに、屋上防水シートについても改修が進んだ。

## 10) 各施設職員の受賞等

- (1) 北白川試験地, 山内 隆之 氏 (技術専門職員)

平成 19 年度全国大学演習林協議会 第 9 回森林管理技術賞 受賞 / 2007 年 9 月 19 日

- (2) 瀬戸臨海実験所, 太田 満 氏 (技術専門職員)

社団法人日本動物学会より感謝状受贈 / 2007 年 9 月 21 日

(2) 各施設を利用した学生実習等

(学生数・教員等数は、延人数)

芦生研究林

期 間	日数	大 学	部 局	科 目 名	学 年	学生数	教員等数	備 考
2007.05.03～2007.05.04	2	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「森林の更新と動態」	1 回生	12	2	
2007.05.12～2007.05.13	2	京都大学	情報学研究科社会科学専攻	情報学研究科生物圏情報学講座のゼミ講座	院生	24	8	
2007.05.26～2007.05.27	2	京都大学	理学研究科生物科学専攻	生物学生実習 B 脊椎動物解剖学実習	3 回生	10	4	
2007.06.18～2007.07.09	5	京都大学	アジア・アフリカ地域研究科	芦生研究林フィールド調査法実習	D1	54	27	
2007.06.30～2007.07.01	2	京都大学	農学研究科応用生物科学専攻	少人数セミナー「昆虫と人間」	1 回生	8	2	
2007.07.05～2007.07.07	3	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「豊かな森をめざして！」	1 回生	27	3	
2007.07.14～2007.07.16	3	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「原生的な森林の働き」	1 回生	17	3	
2007.08.01～2007.08.03	3	京都大学	理学研究科生物科学専攻	理学部野外実習第 1 部	3 回生	18	5	
2007.08.06～2007.08.07	2	京都大学	フィールド研	森里海連環学実習 A	全回生	30	11	
2007.08.24～2007.08.25	2	京都大学	フィールド研	大学等地域開放特別事業 森林体験学習	1 学年	58	8	共催：和歌山県立有田中央高等学校清水分校
2007.08.27～2007.08.31	5	京都大学	農学研究科森林科学専攻	研究林実習 I	2 回生	135	21	
2007.09.14～2007.09.16	3	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「原生的な森林の働き II」	4 回生	18	3	
2007.09.18～2007.09.21	4	京都大学	農学研究科地域環境科学専攻	研究林実習 II	3 回生	18	6	
2007.09.25～2007.09.28	4	京都大学	農学研究科森林科学専攻	森林利用学実習及び実習法	3 回生	60	12	
2007.10.17～2007.10.19	3	京都大学	フィールド研	京都大学フィールド科学教育研究センター技術職員研修	職員	39	2	
2007.11.04	1	京都大学	農学研究科森林科学専攻	芦生研究林における動植物の観察（野生生物研究会）	全回生	14		
2008.02.08～2008.02.11	4	京都大学	フィールド研	暖地性雪域における冬の自然環境	全回生	60	4	
2007.06.27	1	京都伝統工芸大学	木工芸コース	木工芸実習（校外研修）	1 回生	35	3	
2007.07.01	1	佛教大学	社会学部公共政策学科	社会学部公共政策学科公共政策フィールドワーク実習	3 回生	7	1	
2007.09.08	1	京都精華大学	朽木学舎	針畑地区の文化に学ぶ及びアナ原森林の見学	1～4 回生	18		
2007.11.02	1	京都造形芸術大学	日本庭園・歴史造形研究センター	The Japanese Garden Intensive Seminar		31	4	
計	54					693	129	

和歌山研究林

期 間	日数	大 学	部 局	科 目 名	学 年	学生数	教員等数	備 考
2007.08.29～2007.08.31	3	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「森の作り出すもの」	1 回生	24	24	
計	3					24	24	

北海道研究林

期 間	日数	大 学	部 局	科 目 名	学 年	学生数	教員等数	備 考
2007.08.01～2007.08.05	6	京都大学	農学部食料・環境経済学科	調査研究方法論実習 I	2 回生	24	18	標茶区・白糠区
2007.09.01～2007.09.05	5	京都大学	フィールド研	森里海連環学実習 C	全回生	82	26	標茶区（北大との共催）
2007.09.10～2007.09.17	8	京都大学	フィールド研	研究林実習 III（夏の北海道・北海道東部の人と自然）	全回生	171	28	標茶区・白糠区 合同実習

2008.02.18 ~ 2008.02.24	7	京都大学	農学部	研究林実習Ⅳ (冬の北海道・北海道東部の厳冬の自然環境)	全回生	106	20	標茶区・白糠区 合同実習
計	26					383	92	
<b>北白川試験地</b>								
期 間	日数	大 学	部 局	科 目 名	学 年	学 生 数	教 員 等 数	備 考
2007.04.18	1	京都大学	農学部地域環境工学科	「土壌物理学・水環境工学実験」土壌三相分布測定	3 回生	22	1	
2007.04.28	1	京都大学	ワールド研	少人数セミナー「森林の再生と動態」	1 回生	5	1	
2007.05.16 ~ 2007.11.28	18	京都大学	ワールド研	少人数セミナー「有機農業の可能性…持続可能な農業をめざして」	1 回生	144	18	
2007.05.18	1	京都大学	理学部生物科学学科	少人数セミナー「細胞性枯菌の不思議な世界」	1 回生	6	1	
2007.10.12	1	京都大学	農学部森林科学学科	樹木の超微形態観察及び観察法	3 回生	9	2	
2007.10.15 ~ 2007.10.22	2	京都大学	農学部森林科学学科	森林水文学・砂防学実験及び実験法	3 回生	58	2	
2007.11.01 ~ 2007.11.08	2	京都大学	農学部森林科学学科	生態学実験及び実験法	3 回生	39	2	
2007.11.21	1	京都大学	農学部応用生命科学学科	生物有機化学Ⅲ	3 回生	25	1	
計	27					308	28	

<b>上賀茂試験地</b>								
期 間	日数	大 学	部 局	科 目 名	学 年	学 生 数	教 員 等 数	備 考
2007.05.12	1	京都大学	農学部森林科学専攻	新入生向けガイダンス	1 回生, M1	164	39	
2007.05.15 ~ 2007.05.21	4	京都大学	理学部生物科学専攻	生物学実習「野外調査法-昆虫の密度推定法」	3 回生	84	8	
2007.05.31 ~ 2007.06.06	2	京都大学	ワールド研	森林総合実習及び調査法	3 回生	50	8	
2007.06.06	1	京都大学	農学部地域環境科学専攻	「土壌物理学・水環境工学実験」土壌の三相分布測定及び浸透能試験実習	3 回生	18	1	
2007.06.13 ~ 2007.07.04	4	京都大学	農学部森林科学専攻	森林生物学実験及び実験法	3 回生	86	4	
2007.07.01	1	京都大学	ワールド研	少人数セミナー「原生的な森林の働き」	1 回生	4	1	
2007.07.06	1	京都大学	ワールド研	少人数セミナー「木造校舎を造る」	1 回生	7	4	
2007.10.02	1	京都大学	農学部森林科学専攻	森林科学実習Ⅳ	2 回生	47	5	
2007.04.16 ~ 2007.07.09	2	京都精華大学	人文学部環境社会科学科	自然教育論	1 ~ 3 回生	110	2	
2007.05.18 ~ 2007.12.14	2	京都造形芸術大学	環境デザイン学科	ランドスケープ計画 名園実習	3 回生	26	4	
2007.07.04	1	京都精華大学	人文学部環境社会科学科	森林マネジメント	2 ~ 4 回生	31	1	
2007.07.06	1	京都府立大学	農学研究科	森林植物学実習	3 回生	29	3	
2007.08.12	1	京都精華大学	人文学部環境社会科学科	自然観察指導講習会	受講生	63	1	
2007.09.25	1	京都教育大学	産業技術科学科	栽培・飼育の実践Ⅰ, Ⅱ-いのちを育み, 慈しむ-	全回生	10	5	
計	23					729	86	

紀伊大島実験所

期	間	日数	大	学	部	局	科	目	名	学	年	学生数	教員等数	備	考
2007.08.20	～	2007.08.24	京都大学		フィールド研		少人数セミナー	「森里海のつながりを清流古座川に見る」		1	回生	35	5		
2007.09.03	～	2007.09.07	京都大学		農学部等		植物調査法と実習			2	回生	90	9		
2007.09.10	～	2007.09.13	京都大学		地球環境学		里域植生保全論				院生	24	4		
2007.09.21	～	2007.09.27	京都大学		フィールド研		森里海連続実習B				全回生	124	37		(北大と共催)
		計										273	55		

舞鶴水産実験所

期	間	日数	大	学	部	局	科	目	名	学	年	学生数	教員等数	備	考
2007.05.11	～	2007.05.13	京都大学		農学部		新入生施設見学				1	回生他	93		
2007.06.29	～	2007.07.01	京都大学		フィールド研		少人数セミナー	「河口域生態学入門」			1	回生	18		
2007.07.06	～	2007.07.08	京都大学		フィールド研		少人数セミナー	「魚類心理学入門」			1	回生	29		
2007.08.07	～	2007.08.10	京都大学		フィールド研		森里海連続実習A				全回生	46	6		
2007.08.17	～	2007.08.30	京都大学		農学部		海洋生物科学技術論と実習I・II・III				2・3	回生	362	13	
2007.09.03	～	2007.09.06	京都大学		農学部・農学研究科		水理学実習				3	回生	100	12	
2007.09.10	～	2007.09.15	岐阜大学		教育学部		臨海実習				1	回生	66	12	
2007.09.18	～	2007.09.21	岐阜大学		地域科学部		臨海実習				2～4	回生	28	4	
2007.10.01	～	2007.10.05	近畿大学		農学部		環境生態学研究室 専門実習				D3・D4		103	5	
		計										845	52		

瀬戸臨海実験所

期	間	日数	大	学	部	局	科	目	名	学	年	学生数	教員等数	備	考
2007.05.01	～	2007.05.05	京都大学		フィールド研		少人数セミナー	「海岸生物の生活史」			1	回生	60		
2007.07.05	～	2007.07.09	京都大学		大学院人間環境学研究所		海洋化学実習				院生	54	12		
2007.07.26	～	2007.08.01	京都大学		フィールド研		少人数セミナー	「海洋生物の多様性」			1	回生	56		
2007.07.31	～	2007.08.07	京都大学		理学部		臨海実習第1・4部				2	回生	72		
2007.08.08	～	2007.08.23	京都大学		フィールド研		少人数セミナー	「節足動物学入門」			1	回生	25		
2007.09.03	～	2007.09.04	京都大学		防災研究所		気象海象観測実習				M1・M2		30	12	
2007.09.24	～	2007.09.28	京都大学		大学院地球環境学		探究型化学実験-湖と海の化学調査-(全学共通科目)				主として2	回生	60	15	
2007.09.24	～	2007.09.25	京都大学		防災研究所		気象海象観測実習				1	回生	10	6	
2007.10.02	～	2007.10.03	京都大学		理学研究科		インターラボ				院生	62	6		
2008.02.20	～	2008.02.23	京都大学		大学院人間環境学研究所		生物学実習II (海洋生物学コース)				1～3	回生	68	16	
2008.03.07	～	2008.03.12	京都大学		理学部		臨海実習第3部				2	回生	30	9	
2008.03.25	～	2008.03.31	京都大学		理学部		臨海実習第2部				2	回生	84		
2007.04.17	～	2007.04.21	和歌山大学		教育学部		臨海実習A (植物)				3	回生	45	10	
2007.05.14	～	2007.05.19	奈良女子大学		理学部		臨海実習II				3	回生, M1	102	14	
2007.05.19	～	2007.05.20	放送大学		京都学習センター		面接授業「海洋生物の多様性」				受講生		40		

2007.06.04 ~ 2007.06.08	5	奈良教育大学	教育学部	臨海実習 (野外実習 A - II)	2・3 回生, M1	84	14
2007.06.11 ~ 2007.06.16	6	大阪教育大学	教育学部	臨海実習	3・4 回生, M1	104	12
2007.06.16 ~ 2007.06.20	5	和歌山大学	教育学部	臨海実習 B (動物)	3 回生	45	10
2007.06.30 ~ 2007.07.04	5	近畿大学	農学部	環境管理学専門実験・実習	3・4 回生, M1	120	7
2007.07.05 ~ 2007.07.09	5	信州大学	理学部	計測化学特論	M1	41	5
2007.07.15 ~ 2007.07.21	7	大阪市立大学	大学院理学研究科	臨海実習	3 回生	161	18
2007.08.07 ~ 2007.08.10	4	京都教育大学	教育学部	生物学夏期実習 II	2 回生以上	72	4
2007.08.21 ~ 2007.08.24	4	滋賀県立大学	環境科学部	自然環境特別実習 I (II)	2 回生以上	92	19
2007.08.26 ~ 2007.08.30	5	関西学院大学	理工学部	臨海実験・演習	1 回生	105	35
2007.09.04 ~ 2007.09.11	8	国立大学臨海臨湖実 験所長会議		公開臨海実習 (夏期)	2 回生 ~ 院生	160	
2007.09.11 ~ 2007.09.16	6	大阪大学	理学研究科	生物学臨海実習	2 回生・M2・D2	110	16
2007.09.28 ~ 2007.09.30	3	大阪千代田短期大学	幼児教育科	磯観察	2 回生	30	3
2008.03.25 ~ 2008.03.31	7	国立大学臨海臨湖実 験所長会議		公開臨海実習 (春期)	2 回生 ~ 院生	63	
計	139					1,985	243

他大学生含む

他大学生含む

(3) 各施設を利用した社会連携教育および野外学習等

(学生数・教員等数は、延人数)

芦生研究林

期 間	日数	主 催 者	講 座・イ ベ ン ト 名	対 象 者	参 加 者 数	教 員 等 数	備 考
2007.05.05～2007.12.16	20	NPO 法人芦生自然学校	自然観察, 自然体験, 環境教育	一般	290		
2007.05.09	1	大阪ロータリークラブ	自然環境についての研修, 見学	一般	21		
2007.05.09～2007.05.16	2	NPO 法人シニア自然大学	地球環境生態系講座での森林生態系現地講義	一般	52		
2007.05.17	1	高島市立朽木中学校	ふるさと学習「ブナ原生林散策」	1年生	24		
2007.05.19	1	京都大学フィールド研・芦生研究林	春の自然観察会	一般	20	11	応募者72名
2007.06.02	1	南丹市教育委員会	初夏の森林内に身を置き, その特徴や豊かさを体感的に味わう(なんたんわくわくキッズ)	4～6年生	50		
2007.06.05	1	独立行政法人 緑資源機構近畿北陸整備局	緑資源機構近畿北陸整備局管内事務所職員による広葉樹林分を主体とした樹木識別現地研修会	職員	17		
2007.06.16～2007.12.02	3	兵庫県立尼崎小田高等学校	「自然科学研究」ブナ林の生態, 種子調査 — 地球温暖化の指標として —	2年生	15		
2007.07.26～2007.07.28	3	京都大学フィールド研	公開講座	一般	90	66	
2007.08.01	1	南丹市美山町内小学校	美山町第4学年合同自然体験教室 「美山っ子グリーンワールド」	4年生	36		
2007.08.02～2007.08.03	2	大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎	学校設定科目「生命論(環境)」	3年生	45		
2007.09.20	1	高島市立朽木西小学校	朽木西小学校秋の自然観察会	1～4・6年生	12		
2007.10.27	1	京都大学フィールド研・芦生研究林	秋の自然観察会	一般	18	11	応募者35名
2007.11.05	1	京都府立北桑田高等学校森林リサーチ科	環境科学基礎(森林の観察)	1年生	28		
2007.11.11	1	NPO 法人シニア自然大学マイスターコース	芦生の森自然観察	一般	40		
計	40				758	88	

和歌山研究林

期 間	日数	主 催 者	講 座・イ ベ ン ト 名	対 象 者	参 加 者 数	教 員 等 数	備 考
2007.04.16～2008.01.21	21	和歌山県立有田中央高等学校清水分校	ウッズサイエンス	3年生	63	51	
2007.05.09	1	和歌山県立有田中央高等学校清水分校	総合的な学習の時間「SIMUZU タイム」(森林ウォーク)	1年生	31	8	
2007.05.31～2007.10.18	2	有田町立八幡小学校	総合的な学習の時間「森は友だち森林の町清水」	5年生	50	15	
2007.11.30	1	有田町産業課	「森とあそぶまなぶ」森林体験学習	4年生	48	7	
計	25				192	81	

北海道研究林

期 間	日数	主 催 者	講 座・イ ベ ン ト 名	対 象 者	参 加 者 数	教 員 等 数	備 考
2007.05.25	1	樺南町立樺南小学校	遠足(郷土の自然に親しみ理解を深める)	3年生	42		樺南区
2007.06.14～2007.09.28	2	釧路森づくりセンター普及課	地域民有林森林所有者研修会(自立林養成研修会)	一般	20		樺南区
2007.06.27	1	樺南町立沼幌小学校	木工体験学習	小学生	16		樺南区

2007.10.13～2007.10.14	2	標茶町教育委員会	しべチャアドベンチャースクール ジュニアリーダー養成講座 第5講座	小・中・高生	30	標茶区
計	6		(4件)		108	0

北白川試験地

期 間	日数	主 催 者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備 考
2007.12.07	1	大阪府立大手前高校	大学紹介集中セミナー	2年生	34	1	
計	1		(1件)		34	1	

上賀茂試験地

期 間	日数	主 催 者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備 考
2007.04.21	1	京都大学フィールド研・上賀茂試験地	2007年度上賀茂試験地 春の自然観察会	一般	18	6	
2007.05.04	1	京都自然教室	「自然観察・ネイチャークラフト」	一般	40		
2007.05.04～2007.10.28	3	京都精華大学文学部環境社会学科	京都精華大学 こども楽々塾	一般	64	3	
2007.05.28	1	京都府生物教育会	研修会「樹木の見学」	一般	19	1	
2007.06.24	1	京都樹木医会	京都樹木医会研修「外国産樹木・マツ属の見学」	一般	17		
2007.09.01	1	京都大学フィールド研・上賀茂試験地	2007年度上賀茂試験地 夏の一般公開自然観察会(第4回昆虫COE教育プログラム)「夜の森と昆虫を知らう」	一般	55	8	
2007.10.09	1	シニア自然大学高等科	マツ・竹等各種の植物観察	一般	39		
2007.11.02	1	NPO法人シニア自然大学研究部森林文化科	試験地の見学および樹木観察	一般	13	2	
2007.11.18	1	京都大学フィールド研・上賀茂試験地	2007年度上賀茂試験地 秋の自然観察会	一般	31	6	
2007.12.09	1	NPO法人エコロジー・カフェ	第2回エコの寺子屋(フィールド学習)	一般	12	3	
計	12		(10件)		308	29	

舞鶴水産実験所

期 間	日数	主 催 者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備 考
2007.07.01	1	舞鶴市中央公民館	実験所見学と水辺の生物調べ	小学生	17	3	
2007.07.23～2007.07.25	3	京都教育大学附属高等学校	SSH 臨海実習	1年生	57	12	
2007.07.26～2008.07.27	2	京都府立西舞鶴高等学校	SSP 講座型学習活動	2年生	72	8	
2007.08.01～2007.08.03	3	京都府立南陽高等学校	SSP 講座型学習活動	1年生	117	9	
2007.09.08	1	兵庫県立神戸高等学校	サイエンスツアー	1年生	35	3	
2007.10.15	1	女性の船「ステップあけほの」	実験所見学と講演	一般	40		
2007.11.02	1	京都府立海洋高等学校	施設見学	3年生	13	2	
2007.11.02	1	舞鶴市立中舞鶴小学校	ウォークラリー	小学生	190		
計	13		(8件)		541	37	

瀬戸臨海実験所

期 間	日数	主 催 者	講 座・イ ベ ン ト 名	対 象 者	参 加 者 数	教 員 等 数	備 考
2007.06.02～2007.06.03	2	奈良県立奈良高等学校	SSH サイエンスツアー	高校生	20	4	
2007.07.09～2007.07.11	3	須磨海浜水族園	鳥島の潮干帯の生物調査・同定実習及び白浜の生物学習	一般研究者	24		
2007.07.21～2007.07.24	4	滋賀県立膳所高等学校	第38回 生物実習	高校生	96	16	
2007.07.26～2007.07.28	3	奈良女子大学附属中等教育学校	サイエンス「夏の学校」	中学生	82	17	
2007.07.27～2007.07.30	4	NPO法人エコロジエ・カフェ	NPO法人エコロジエ・カフェ 「第3回南紀白浜まなびツアー」	一般研究者	17		
2007.08.03～2007.09.01	3	兵庫県立尼崎小田高等学校	SSH サイエンスリサーチ科 臨海実習	高校生	15	3	
2007.10.05～2007.10.07	3	兵庫県立姫路飾西高等学校	SSC 宿泊・海洋実習	1年生	60	6	
2007.10.12～2007.10.14	3	兵庫県立姫路飾西高等学校	SSC 宿泊・海洋実習	1年生	60	6	
2007.10.19～2007.10.21	3	大阪府立豊中高等学校	生物特別臨海実習	高校生	36	6	
2008.03.20～2008.03.25	6	NaGISA プロジェクト	第9回 NaGISA ワークショップ	日本・外国研究者	72		
計	34	(10件)			482	58	

(注) SSH：スーパー・サイエンス・ハイスクール  
 SPP：サイエンス・パートナーシップ・プログラム  
 SSC：サイエンス・サーベイ・コース

### ●●● 3. フィールド研教員の活動の記録 ●●●

#### (1) 新人紹介

吉岡 崇仁 教授

森林生物圏部門 森林資源管理学分野



5月1日に、森林生物圏部門教授に就任しました吉岡崇仁です。今まで、生物地球化学的物質循環を中心に研究してきました。

研究のはじめは、湖における硝化作用に関する微生物生態学的研究でしたが、信州大学理学部、名古屋大学大気水圏科学研究所、総合地球環境学研究所と移る間に、湖沼生態系から、森林集水域生態系へと関心が広がり、さらに、人間圏も扱う必要を認識するようになってきました。京都大学フィールド科学教育研究センターでは、「森里海連環学」という新しい学問分野の構築を目指していますが、2年前、全学共通科目のリレー講義「森里海連環学」の一コマ「流域環境における人間・自然相互作用系の研究」を担当することになりました。森林流域研究における文理融合型の学際研究の重要性について紹介してきましたが、それも今回の就任に至るご縁の一つと思います。

近年、森林に対する人びとの認識も高まり、自然科学的観点だけではなく、森林流域環境と社会・人々との関係も今後は考えてゆかねばならないと思います。今までに学んできた地球化学的研究手法と新たに取り組みはじめた人文社会学的手法を取り入れて、この学問分野の構築と進展に貢献して行きたいと思います。また、フィールド研の施設を森林科学、森里海連環学の教育と研究の現場として、学生・教員の皆さんに十二分に活用していただくには、どうすればよいかを考えて行きたいと思います。みなさんの専門分野に関わりなく、森から、溪流・河川、さらには沿岸・海洋にまで研究の視野を広げられるような場として活用していただけるようにできればと思っています。みなさまのご指導ご鞭撻、よろしく願いいたします。

## パトリア・ロビン・リグビー 准教授

Patricia Robin Rigby NaGISA プロジェクト 特定有期雇用准教授  
研究分野 Ethology and Biogeography of Cephalopods  
(頭足類の行動学・生物地理学)



Robin's research background is in ecology and fisheries with a focus on cephalopods and benthic invertebrates. She uses a combination of techniques in both the field (ex. acoustic tracking) and lab (ex. molecular techniques) along with more traditional approaches to experimental marine biology (energy use, life history, behaviour studies).

Outside of her specialty Robin has worked in the fields of coastal zone biodiversity and community-based science and enjoyed teaching at both high schools and universities which she continues to do along side her activities in local and international capacity building, education and marine science projects (ex. Ocean Tracking Network, Census of Marine Life: NaGISA).

フィールド研特定有期雇用教員のパトリア・ロビン・リグビー准教授は、平成19年12月10日に、交通事故のため逝去されました。皆さんから「ロビン」と呼ばれて親しまれていた彼女は、瀬戸臨海実験所において、沿岸生物の多様性を地域間で比較することを目指す国際プロジェクトNaGISAの国際コーディネータとして活躍されていました。彼女を失ったことは研究計画にとって大きな痛手ですが、2010年のフィナーレに向けて更なる成果をあげることが何よりのご供養になると思います。皆様の一層のご支援をお願いいたします。

(白山義久)

## (2) 研究成果

### ■フィールド科学教育研究センター 刊行物

#### □フィールド研年報

『京都大学フィールド科学教育研究センター 年報 第4号』, 京都大学フィールド科学教育研究センター, 106p, 2007.

#### □報告書

第3回時計台対話集会「森里海連環学が、日本の木文化を再生する」講演録：京都大学フィールド科学教育研究センター編集, サイファアソシエーツ株式会社 編集協力, 凸版印刷株式会社 印刷, 112p, 2007.

#### □FSERC News

〈No. 11 2007年7月〉

#### －目次－

就任挨拶：センター長就任にあたって	(白山義久)
新任教授紹介：里域生態系部門里山資源保全学分野	(柴田昌三)
森林生物圏部門森林資源管理学分野	(吉岡崇仁)
スタッフ紹介(教育研究部)	
ニュース：田中名誉教授が日本水産学会功績賞を受賞	(田川正朋)
フィールド科学教育研究センターの受賞歴	
研究ノート：有棘動物の分類に関する国際ワークショップ	(白山義久)
教育ノート：「森里海連環学」テキストを発刊	(山下 洋)
予定：フィールド科学教育研究センター公開講座2007「森のしくみとその役割」	
第4回昆虫COEフィールド教育プログラム	
上賀茂試験地「夏の一般公開自然観察会」	
京都大学白浜水族館「夏休み解説ツアー」	

〈No. 12 2007年11月〉

－目次－

- ニュース：第3回由良川フォーラム (芝 正己)  
タイ・チャイナートで行われた ANA 植林支援活動への参加 (柴田昌三)  
第3回「森里海連環学」のためのチャリティートーク&ライブ 森よ、川よ、海よ、甦れ！」 (柴田昌三)
- 研究ノート：フィールド学の特異点 (西村和雄)
- 教育ノート：森里海連環学実習 C－森から海へー  
リレー講義「水圏生物学入門」 (宮崎勝己)
- 新人紹介：NaGISA プロジェクト (Patricia Robin Rigby)
- 活動の記録：2007年4月～9月
- 予 定：上賀茂試験地「秋の自然観察会」  
神戸大学・京都大学合同市民公開講座「森と海をめぐる市民公開講座」  
白浜水族館「バックヤード体験学習」  
第2回エコの寺子屋

〈No. 13 2008年3月〉

－目次－

- ニュース：神戸大学・京都大学合同市民公開講座 (山下 洋)
- 研究ノート：クラゲと魚のつながりをフィールドからさぐる (益田玲爾)  
温帯域に生息するイシサンゴ類の生態・進化について (深見裕伸)
- 教育ノート：リレー講義「森林学入門」 (徳地直子)  
瀬戸臨海実験所水族館「冬休み解説ツアー」 (加藤哲哉)
- 社会連携ノート：第2回エコの寺子屋@元立誠小学校の開催 (柴田昌三)
- 活動の記録：2007年10月～2008年2月
- 予 定：第4回時計台集会－むしに教わる森里海連環学－  
第6回古座川シンポジウム  
京大白浜水族館「春休み解説ツアー」

## □試験地・研究林情報

『試験地・研究林情報 2006（平成18）年度』, 京都大学フィールド科学教育研究センター森林・里域フィールド管理部門, 102p, 2008.

## －目次－

各施設年次報告

プロジェクト研究報告

森林生態研究プロジェクト・中間報告 (寄元道徳)

森林環境系プロジェクト報告 (徳地直子)

研修報告

研究資料

業務資料

## □『森林研究』（2007年度は発行なし）

## □瀬戸臨海実験所年報

『瀬戸臨海実験所年報』第20巻, 京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所編集, 日本印刷出版株式会社 印刷, 37p, 2007.

## －目次－

記事 1. 概要 2. 臨海実習等 3. 研究会・来訪研究者 4. 水族館記録 5. 水族館観覧者 6. 業績目録

資料 水族館飼育生物 水族館水温

技術・研究報告

瀬戸臨海実験所構内ならびに田辺湾島・小丸島における長花柱型カタバミ（カタバミ科）の分布様式

(久保田 信・梅本信也)

紀伊半島沿岸, 特に和歌山県田辺湾沿岸およびその周辺海域に産するハナギンチャク目・ホネナシサンゴ目・スナギンチャク目・ツノサンゴ目（刺胞動物門, 花虫綱, 六放サンゴ亜綱）の目録

(久保田 信・深見裕伸・内田紘臣)

## □Publications of the Seto Marine Biological Laboratory

Special Publication Series vol. 8

『Selected Papers of the NaGISA World Congress 2006』, 京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所 (P.R. Rigby and Y. Shirayama (ed)), 137p, 2007.

## ◆ 著書

### 森林生物圏部門

#### ■森林資源管理学分野

Kohyama, T., Urabe, J., Hikosaka, K., Shibata, H., Yoshioka, T., Konohira, E., Murase, J. and Wada, E., Canadell, J.G.: Pataki, D.E. and Pitelka, L. F. (eds.), Terrestrial ecosystems in Monsoon Asia: Scaling up from shoot module to watershed, Terrestrial Ecosystems in a Changing World, Springer-Verlag, Berlin Heidelberg, 285-296, 2007.

吉岡崇仁：総合地球環境学研究所 研究プロジェクト「流域環境の質と環境意識の関係解明」編，環境についての関心事調査 (ISBN 978-4-902325-27-0)，総合地球環境学研究所，京都，120，2008.

吉岡崇仁：総合地球環境学研究所 研究プロジェクト「流域環境の質と環境意識の関係解明」編，次世代に向けた森林の利用に関する意識調査 (ISBN 978-4-902325-26-3)，総合地球環境学研究所，京都，84，2008.

吉岡崇仁：総合地球環境学研究所 研究プロジェクト「流域環境の質と環境意識の関係解明」編，森，川，湖の環境に関する意識調査 (ISBN 978-4-902325-25-6)，総合地球環境学研究所，京都，220，2008.

### 里域生態系部門

#### ■里山資源保全学分野

小林達明・柴田昌三：森本幸裕・小林達明 編，里山，最新環境緑化工学，朝倉書店，東京，178-186，2007.

柴田昌三：森本幸裕・白幡洋三郎 編，緑化技術，環境デザイン学—ランドスケープの保全と創造—，朝倉書店，東京，123-135，2007.

#### ■里地生態保全学分野

梅本信也：伊豆野まこと 編，風土から熊野を考える，熊野古道公式完全ガイド 紀州和歌山県版 (改訂版)，扶桑社，東京，154-156，2007.

梅本信也：林 雅彦 編，熊野の植生と文化，「国文学解釈と鑑賞」別冊：熊野—その信仰と文学・美術・自然，至文堂，東京，214-221，2007.

#### ■河口域生態学分野

田川正朋：日本比較内分分泌学会編，甲状腺ホルモン，ホルモンハンドブック新訂 eBook 版，南江堂，東京，1908-1929，2007.

#### ■里海生態保全学分野

山下 洋：水産資源の再生を考える。「瀬戸内海の里海構想」，瀬戸内海研究会議編，恒星社厚生閣，東京，17-28，2007.

山下 洋・田中 克 編：森川海のつながりと河口・沿岸域の生物生産，水産学シリーズ，恒星社厚生閣，東京，157，147p，2008.

益田玲爾：日本海学推進機構編，海の視点から，日本海学の世紀7 つながる環境 森・里・山，角川学芸出版，東京，33-46，2007.

## 基礎海洋生物学部門

### ■海洋生物系統分類学分野

久保田 信：地球の住民たち 動物篇 ミラクル・アニマル・アース，不老不死研究会，白浜町，和歌山県，120 頁+1 CD+1DVD，2007.

### ■海洋生物多様性保全学分野

白山義久：海洋政策研究財団 編，海洋の生物と生態系，海洋問題入門，丸善，東京，32-39，2007.

◆ 学会誌（原著論文・総説）

■ 森林生物圏部門

■ 森林生態保全学分野

福島慶太郎・徳地直子：皆伐・再造林施業が渓流水質に与える影響－集水域単位で林齢の異なるスギ人工林を用いて－，日本森林学会誌，90，6-16，2008.

Aikawa, M., Hiraki, T., Komai, Y., Umemoto, S. and Tokuchi, N.: A case study on the input-output balance of sulfur in a catchment area in Japan, Journal of Japan Society for Atmospheric Environment, 43(1), 23-30, 2008.

Katsuyama, M., Fukushima, K. and Tokuchi, N. 2008.: Comparison of rainfall-runoff characteristics in forested catchments underlain by granitic and sedimentary rock with various forest age, Hydrological Research Letter, 2, 14-17, 2008.

Matsuyama, S. and Sakimoto, M.: Allocation to reproduction and relative reproductive costs in two species of dioecious Anacardiaceae with contrasting phenology, Annals of Botany, 102, 1-10, 2008.

■ 森林資源管理学分野

Yoshioka, T., Mostofa, K.M.G., Konohira, E., Tanoue, E., Hayakawa, K., Takahashi, M., Ueda, S., Katsuyama, M., Khodzher, T., Bashenkhaeva, N., Korovyakova, I., Sorokovikova, L. and Gorbunova, L.: Distribution and characteristics of molecular size fractions of freshwater dissolved organic matter in watershed environments: Its implication to degradation, Limnology, 8, 29-44, 2007.

Mostofa, K.M.G., Yoshioka, Takahito, Konohira, Eiichi and Tanoue, Eiichiro: Photodegradation of fluorescent dissolved organic matter in river waters, Geochemical Journal, 41, 323-331, 2007.

Kawano, T., Takahara, H., Nomura, T., Shibata, H., Uemura, S., Sasaki, N. and Yoshioka, T.: Holocene phytolith record at *Picea glehnii* stands on the Dorokawa Mire in northern Hokkaido, Japan, The Quaternary Research, 46(5), 413-426, 2007.

Mostofa, K.M.G., Yoshioka, T., Konohira, E. and Tanoue, E.: Dynamics and characteristics of fluorescent dissolved organic matter in the groundwater, river and lake water, Water Air and Soil Pollution, 184, 157-176, 2007.

■ 森林環境情報学分野

坂本朋美・芝 正己：FSC 森林認証審査結果から見たわが国の森林管理の諸課題，森林応用研究，16(2)，59-67，2007.

芝 正己：Object-oriented image segmentation approach for timber harvest cruising strategies in mountainous areas, Proc. of Austro2007/FORMEC'07, 1-7, 2007.

Morita, E., Fukuda, S., Nagano, J., Hamajima, N., Yamamoto, H., Iwai, Y., Nakashima, T., Ohira, H. and Shirakawa, T.: Psychological effects of forest environments on healthy adults - Shinrin-yoku (forest-air bathing and walking) as a possible method of stress reduction: an evaluation study, J. Public Health, 121, 54-63, 2007.

## 里域生態系部門

### ■里山資源保全学分野

木村栄理子・深町加津枝・古田裕三・奥 敬一・柴田昌三：嵯峨嵐山における竹林景観の実態と景観保全施策に関する研究, ランドスケープ研究, 70(5), 605-610, 2007.

Shibata, Shozo: Secondary vegetation with shifting mosaics in the world -Satoyama and slash-and-burning agriculture farmland-, Proc. 4th International Symposium of Preservation and Restoration of Environmental Ecology, 48-54, 2007.

吉田 寛・今西純一・柴田昌三・森本幸裕：播種工における発生期待本数の推定方法に関する研究, 日本緑化工学会誌, 33(2), 369-379, 2007.

大岸万里子・深町加津枝・奥 敬一・三好岩生・柴田昌三：宮津市上世屋地区における棚田保全に向けた関係者の連携に関する研究, 農村計画学会誌, 26, 263-268, 2007.

### ■里地生態保全学分野

UMEMOTO, S. and Koyama, H.: A new species of *Eclipta* (Compositae: Heliantheae) and its allies in eastern Asia, Thai Forest Bulletin (Botany), 35, 108-118, 2007.

梅本信也：古座川一枚岩のヘリトリゴケ, 熊野誌, 53, 109-117, 2007.

### ■河口域生態学分野

Bolasina, Sergio Nestor, Tagawa, Masatomo and Yamashita, Yoh: Changes on cortisol level and digestive enzyme activity in juveniles of Japanese flounder, *Paralichthys olivaceus*, exposed to different salinity regimes, Aquaculture, 266, 255-261, 2007.

Sekimizu, Koshin, Tagawa, Masatomo and Takeda, Hiroyuki: Defective fin regeneration in medaka fish (*Oryzias latipes*) with hypothyroidism, Zoological Science, 24, 693-699, 2007.

鈴木啓太・杉本 亮・笠井亮秀・小路 淳・中山耕至・田中 克：春季の有明海筑後川の高濁度汽水域における粒状有機物の動態, 水産海洋研究, 71, 190-198, 2006.

Hibino, M., Ohta, T., Isoda, T., Nakayama, K. and Tanaka, M.: Distribution of Japanese temperate bass, *Lateolabrax japonicus* eggs and pelagic larvae in Ariake Bay, Ichthyological Research, 54, 367-373, 2007.

Suzuki, KW., Kasai, A., Ohta, T., Nakayama, K. and Tanaka, M.: Migration of Japanese temperate bass (*Lateolabrax japonicus*) juveniles within the Chikugo River estuary revealed by  $\delta^{13}\text{C}$  analysis, Marine Ecology Progress Series, 358, 245-256, 2007.

Kikko, T., Kuwahara, M., Iguchi, K., Kurumi, S., Yamamoto, S., Kai, Y. and Nakayama, K.: Phylogeography of white-spotted charr (*Salvelinus leucomaenis*) in the Lake Biwa water system Inferred from Mitochondrial DNA Sequences, Zoological Science, 25, 146-153, 2008.

Suzuki, KW., Kasai, A., Isoda, T., Nakayama, K. and Tanaka, M.: Distinctive stable isotope ratios in important zooplankton species in relation to estuarine salinity gradients: potential tracer of fish migration, Estuarine, Coastal and Shelf Science, in press, 2008.

## ■里海生態保全学分野

- Tokuchi, Naoko, Hirobe, Muneto, Nakanishi, Asami, Wachirinrat, Chongrak and Takeda, Hiroshi: Comparison of soil N dynamics between dry dipterocarp forest and dry evergreen forest in Northeastern Thailand, *Tropics*, 16(4), 323-336, 2007.
- Nakagawa, M., Okouchi, H., Adachi, J., Hattori, K. and Yamashita, Y.: Effectiveness of stock enhancement of hatchery-released black rockfish *Sebastes schlegeli* in Yamada Bay - evaluation by a fish market survey, *Aquaculture*, 263, 295-302 2007.
- Bolasina, S.N., Tagawa, M. and Yamashita, Y.: Changes on cortisol level and digestive enzyme activity in juveniles of Japanese flounder, *Paralichthys olivaceus*, exposed to different salinity regimes, *Aquaculture*, 266, 255-261, 2007.
- Wada, T., Aritaki, M., Yamashita, Y. and Tanaka, M.: Comparison of low-salinity adaptability and morphological development during the early life history of five pleuronectid flatfishes, and implications for migration and recruitment to their nurseries, *Journal of Sea Research*, 58, 241-254, 2007.
- Chin, B.S., Nakagawa, M. and Yamashita, Y.: Effects of feeding and temperature on survival and growth of larval black rockfish *Sebastes schlegeli* in rearing conditions, *Aquaculture Science*, 55, 619-627, 2007.
- Okumura, Y., Kohno, Y., and Yamashita, Y.: Dioxin concentrations and estimation of sources in four major rivers in Miyagi Prefecture, Japan, *Fresenius Environmental Bulletin*, 17(2), 173-181, 2008.
- Yamashita, Y., Nash, R.D.M. and van der Veer, H.W. (eds.): Proceedings of the Sixth International Symposium on Flatfish Ecology, Part 1, *Journal of Sea Research*, 57, 89-235, 2007.
- Yamashita, Y., Nash, R.D.M. and van der Veer, H.W. (eds.): Proceedings of the Sixth International Symposium on Flatfish Ecology, Part 2, *Journal of Sea Research*, 58, 1-112, 2007.
- Yamashita, Y. and Kurita, Y.: An appropriate stocking size of juvenile Japanese flounder, *Paralichthys olivaceus*, in consideration of carrying capacity, *Bulletin of Fisheries Research Agency*, 19, 33, 2007.
- 亀甲武志・佐藤拓哉・鹿野雄一・原田泰志・甲斐嘉晃：琵琶湖流入河川姉川水系支流に生息する特殊斑紋イワナ（ナガレモンイワナ）の出現率と流程分布, *魚類学雑誌*, 57, 79-86, 2007.
- Yagishita, N., Kai, Y., Yamasaki, A. and Nakabo, T.: Sexual dimorphism in *Sebastes owstoni* (Scorpaenidae) from the Sea of Japan, *Ichthyological research*, 54, 198-206, 2007.
- Kim, J.K., Kai, Y. and Nakabo, T.: Genetic diversity and population structure of the endangered species *Salanx ariakensis* (Salangidae) using amplified fragment length polymorphism, *Ichthyological research*, 54, 416-419, 2007.
- Kikko, T., Kuwahara, M., Iguchi, K., Kurumi, S., Yamamoto, S., Kai, Y. and Nakayama, K.: Phylogeography of white-spotted charr (*Salvelinus leucomaenis*) in the Lake Biwa water system Inferred from Mitochondrial DNA Sequences, *Zoological Science*, 25, 146-153, 2008.

## ■沿岸資源管理学分野

- Sharma, J.G., Masuda, R. and Tanaka, M.: Orientation behaviour of *Pagrus major* larvae exposed to UV-B radiation in laboratory conditions, *International Journal of Radiation Biology*, 83, 49-52, 2007.
- Ohji, M., Arai, T., Midorikawa, S., Harion, H., Masuda, R. and Miyazaki, N.: Distribution and fate of organotin compounds in Japanese coastal waters, *Water, Air, Soil, and Pollution*, 178, 255-265, 2007.
- Arai, T., Tominaga, O., Seikai, T. and Masuda, R.: Observation learning improves predator avoidance in hatchery-

- reared Japanese flounder *Paralichthys olivaceus* juveniles, *Journal of Sea Research*, 58, 59–64, 2007.
- Benitez-Santana, T., Masuda, R., Juarez, Carrillo E., Ganuza, E., Valencia, A., Hernandez-Cruz, C.M. and Izquierdo, M.S.: Dietary DHA deficiency induce a reduced visual response in gilthead seabream *Sparus aurata* larvae, *Aquaculture*, 264, 408–417, 2007.
- Nakayama, S., Masuda, R. and Tanaka, M.: Onset of schooling behavior and social transmission in chub mackerel *Scomber japonicus*, *Behavioral Ecology and Sociobiology*, 61, 1383–1390, 2007.
- Yokota, T., Masuda, R., Takeuchi, H., Tsuzaki, T. and Arai, N.: Individual consistency between the diel activity during rearing and the behavior after release in red tilefish *Branchiostegus japonicus* revealed by laboratory observation and acoustic telemetry, *Fisheries Science*, 73, 500–511, 2007.
- Yokota, T., Masuda, R., Arai, N., Mitamura, H., Mitsunaga, Y., Takeuchi, H. and Tsuzaki, T.: Hatchery-reared fish have less consistent behavioral patterns compared to wild individuals, exemplified by red tilefish studied using video observation and acoustic telemetry tracking, *Hydrobiologia*, 582, 109–120, 2007.

## 基礎海洋生物学部門

### ■海洋生物系統分類学分野

- Ozaki, Y., Yusa, Y., Yamato, S. and Imaoka, T.: Reproductive ecology of the pedunculate barnacle *Scalpellum stearnsii* (Cirripedia: Lepadomorpha: Scalpellidae), *Journal of the Marine Biological Association of the UK*, 88(1), 77–83, 2008.
- Baba, K., Miyazono, A., Matsuyama, K., Kohno, S. and Kubota, S.: Occurrence and detrimental effects of the bivalve-inhabiting hydroid *Eutima japonica* on juvenile of the Japanese scallop *Mizuhopecten yessoensis* in Funka Bay, Japan: relationship to juvenile massive mortality in 2003, *Marine Biology*, 151, 1977–1987, 2007.
- Kishida, T., Kubota, S., Shirayama, Y., and Fukami, H.: The olfactory receptor gene repertoires in secondary-adapted marine vertebrates: evidence for reduction of the functional proportions in cetaceans, *Biology Letters*, 3, 428–430, 2007.
- Kubota, S. and Yamazaki, Y.: List of cnidarian medusae deposited in the Saito Ho-on Kai Museum of Natural History, with special reference to the presence of “large”-form immortal medusae *Turritopsis nutricula*, Saito Ho-on Kai Museum of Natural History, *Research Bulletin*, 72, 1–13, 2007.
- 久保田 信・河村真理子・秋山 仁・百武可奈子：わが国で2個体目の *Koellikerina constricta* (ヒドロ虫綱, 花クラゲ目, エダクラゲ科) の記録, 長崎県生物学会誌, (63), 1–2, 2007.
- 久保田 信・檜山嘉郎・田名瀬英朋：和歌山県白浜町番所崎および京都大学瀬戸臨海実験所北浜に漂着したコブヒトデモドキ (ヒトデ綱; コブヒトデ科), 漂着物学会誌, 5, 45–46, 2007.
- 久保田 信・Guo, D.: 中国南部沿岸におけるカイヤドリヒドラクラゲ (ヒドロ虫綱, 軟クラゲ目) の記録, 日本生物地理学会会報, 62, 63–66, 2007.
- 久保田 信：日本産ベニクラゲモドキ (ヒドロ虫綱, 花クラゲ目) の生物学的記録, 日本生物地理学会会報, 62, 67–71, 2007.
- 久保田 信・渡辺葉平・奥泉和也：山形県産ベニクラゲ (ヒドロ虫綱, 花クラゲ目) の85年ぶりの発見と型の決定, 日本生物地理学会会報, 62, 73–75, 2007.
- 小林亜玲・五箇公一・久保田 信：コノハクラゲ (ヒドロ虫綱, 軟クラゲ目) のポリプの本州中部日本海側沿岸とその沖合いの島嶼への新たな出現, 日本生物地理学会会報, 62, 101–104, 2007.

### ■海洋生物進化形態学分野

- Suzuki, G., Hayashibara, T., Shirayama, Y. and Fukami, H.: Evidence of species specific habitat selectivity of *Acropora* corals based on identification of new recruits by two molecular markers, Marine Ecological Progress series, 355, 149-159, 2008.
- Kishida, T., Kubota, S., Shirayama, Y. and Fukami, H.: The olfactory receptor gene repertoires in secondary-adapted marine vertebrates: evidence for reduction of the functional proportions in cetaceans, Biology Letters, 3, 428-430, 2007.
- Wallace, C.C., Chen, C.A., Fukami, H. and Muir, P.: Recognition of separate genera within the large coral genus *Acropora* based on new morphological, reproductive and genetic evidence from *A. togianensis*, and elevation of the subgenus *Isopora* Suder, 1878 to genus (Scleractinia: Astrocoeniidae; Acroporidae), Coral Reefs, 26, 231-239, 2007.
- Lien, Y., Nakano, Y., Plathong, S., Fukami, H., Wang, J., and Chen, C.A.: Occurrence of the putatively heat-tolerant *Symbiodinium* phylotype D in high-latitude outlying coral communities, Coral Reefs, 26, 35-44, 2007.
- Biliński, S.M., Szymańska, B. and Miyazaki, K.: Formation of an egg envelope in the pycnogonid, *Propallene longiceps* (Pycnogonida, Callipallenidae), Arthropod Structure and Development, 37, 155-162, 2008.

### ■海洋生物多様性保全学分野

- Kishida, T., Kubota, S., Shirayama, Y., and Fukami, H.: The olfactory receptor gene repertoires in secondary-adapted marine vertebrates: evidence for reduction of the functional proportions in cetaceans, Biology Letters, 3, 428-430, 2007.
- Suzuki, G., Hayashibara, T., Shirayama, Y. and Fukami, H.: Evidence of species specific habitat selectivity of *Acropora* corals based on identification of new recruits by two molecular markers, Marine Ecological Progress series, 355, 149-159, 2008.
- Kurihara, H., Ishimatsu, A. and Shirayama, Y.: Effects of elevated seawater CO<sub>2</sub> concentration on the meiofauna, Journal of Marine Science and Technology, National Taiwan Ocean University, 15, 17-22, 2007.
- Shimode, S. and Shirayama, Y.: Diel vertical migration and life strategies of two phytal-dwelling harpacticoids, *Ambunguipes rufocincta* and *Eudactylops spectabilis*, Plankton Benthos Res., 1, 42-53, 2006.
- Watanabe, Y., Yamaguchi, A., Ishida, H., Harimoto, T., Suzuki, S., Sekido, Y., Ikeda, T., Shirayama, Y., Takahashi, M., Ohsumi, T. and Ishizaka, J.: Lethality of increasing CO<sub>2</sub> levels on deep-sea copepods in the Western North Pacific, Journal of Oceanography, 62, 185-196, 2006.
- Caldeira, K., Akai, M., Brewer, P., Chen, B., Haugan, P., Iwama, T., Johnston, P., Kheshgi, H., Li, Q., Ohsumi, T., Portner, H., Sabine, C., Shirayama, Y. and Thomson, J.: In, Metz, B., Davidson, O., de Coninck, H., Loos, M. and Meyer, L. (eds.), Chapter 6. Ocean Storage, IPCC Special Report on Carbon Dioxide Capture and Storage, Cambridge University Press, Cambridge, 277-318, 2006.

## ◆ 学内誌

(フィールド研所内誌は除く)

**森林生物圏部門**

## ■森林資源管理学分野

安藤 信 他：大面積長期観測プロットによるブナ科樹木の衰退と気候変動の関係，第94回生存圏シンポジウム，生存圏萌芽・融合ミッションシンポジウム，京都大学生存圏研究所，24-28，2008.

安藤 信 他：芦生のブナは生き残れるか？－天然林の長期動態調査－，生存圏学際萌芽研究センターオープンセミナー要旨集（平成19年度），京都大学生存圏研究所，26，2008.

## ■森林環境情報学分野

芝 正己：芦生からの便り第1回，教職員情報，京大生協，67，8，2007.

芝 正己：芦生からの便り第2回（想定外の仕事 その1），教職員情報，京大生協，68，8，2007.

芝 正己：芦生からの便り第3回（想定外の仕事 その2），教職員情報，京大生協，69，2，2007.

芝 正己：芦生からの便り第4回（冬の仕事 その1），教職員情報，京大生協，70，2，2008.

芝 正己：芦生からの便り第5回（冬の仕事 その2），教職員情報，京大生協，71，2，2008.

**里域生態系部門**

## ■里山資源保全学分野

柴田昌三：竹を食べる－竹を口にする人間や動物の話－，平成19年度京都大学森林科学公開講座「森を食べる－森と木と健康－」テキスト，19-24，2007.

◆ 一般誌

■ 森林生物圏部門

■ 森林環境情報学分野

芝 正己：LCA の可能性をさぐる，神籬，Vol. 35，3-8，2007.

■ 里域生態系部門

■ 里山資源保全学分野

柴田昌三：各地における竹林の荒廃・拡大対策の取り組み，「竹資源の利活用フォーラム～新たな活用としての飼料化・堆肥化技術～」テキスト，2-5，2007.

■ 里地生態保全学分野

道下雄大・梅本信也・山口裕文：紀伊半島南部における民家庭園のフロラ的特性，エコソフィア，19，73-85，2007.

■ 里海生態保全学分野

山下 洋：生態学的特性に基づいた沿岸資源の管理と増殖，月刊海洋，39，234-239，2007.

山下 洋：水産資源の再生を考える，瀬戸内海，49，9-10，2007.

■ 沿岸資源管理学分野

益田玲爾：マアジがクラゲに寄りつくことの生態的意義，月刊海洋，39，516-520，2007.

■ 基礎海洋生物学部門

■ 海洋生物系統分類学分野

久保田 信・田名瀬英朋：和歌山県田辺湾におけるギンカクラゲ *Porpita pacifica*（盤クラゲ目，ギンカクラゲ科）の冬季の異例な漂着，南紀生物，49(1)，41-42，2007.

久保田 信・山口一夫・岸田拓士：白浜町へ初めて漂着したアカボウクジラ（アカボウクジラ科）の記録，南紀生物，49(1)，67-68，2007.

久保田 信：和歌山県田辺湾およびその周辺海域におけるムラサキガイ個体群の激減とミドリイガイの増加，南紀生物，49(1)，81-82，2007.

樫山嘉郎・久保田 信：世界のクラゲ切手[7]，うみうし通信，(56)，8-11，2007.

久保田 信・今原幸光：L-アスコルビン酸によるベニクラゲ標本の褪色の防止，くろしお，(26)，17-18，2007.

久保田 信：ヒトハリザトウムシの瀬戸臨海実験所北浜への規則的な出現，くろしお，(26)，19-20，2007.

久保田 信：2007年夏季に和歌山県白浜町瀬戸漁港で多数のタコクラゲ（鉢虫綱，根口クラゲ目）が出現，くろしお，(26)，21-23，2007.

久保田 信：和歌山県みなべ町で最近採集されたマミズクラゲ（ヒドロ虫綱，淡水クラゲ目，ハナガサクラゲ科）の成熟クラゲ，くろしお，(26)，24，2007.

久保田 信：日本の唄の歌詞に登用された陸性鳥類，くろしお，(26)，26-37，2007.

久保田 信：若返るヒドロ虫類，ベニクラゲー人間の夢の具現者，北海道大学理学部同窓会誌，(49)，37-39，2007.

- 田名瀬英朋・土生紳吾・久保田 信：和歌山県中部地域の海岸におけるジंगाサウニ（ナガウニ科）の記録，南紀生物，49(2)，175-176，2007.
- 田名瀬英朋・興田喜久男・久保田 信：和歌山県白浜町におけるイトマキヒトデ（アカヒトデ目，イトマキヒトデ科）個体群回復の可能性，南紀生物，49(2)，181-182，2007.
- 久保田 信・Gravili, C.：日本産ヒドロクラゲ類（管クラゲ類，アナサンゴモドキ類，アクチヌラ類を除く）目録，南紀生物，49(2)，189-204，2007.
- 久保田 信：タツノオトシゴ類（ヨウジウオ目，タツノオトシゴ亜科）とヒドロ虫類の共生の日本初記録，Kuroshio Bioshere, 4, 25-28, 2 Pls., 2008.
- 久保田 信：高知県でのベニクラゲ（ヒドロ虫綱，花クラゲ目）の初出現と旧体の口柄に接続してポリプへ若返った第2記録，Kuroshio Bioshere, 4, 29-32, 1 Pl., 2008.
- 久保田 信：クラゲからポリプへ若返ったベニクラゲ（ヒドロ虫綱，花クラゲ目）の退化と再成長の稀少例，Kuroshio Bioshere, 4, 33-35, 1 Pl., 2008.

## ◆ 報告書

### 森林生物圏部門

#### ■森林資源管理学分野

吉岡崇仁：大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所研究推進戦略センター編，森林流域環境を対象とした自然科学・人文社会科学研究，総合地球環境学研究所，京都，15，62-67，2008.

安藤 信：「森林植生」，平成 19 年度 八丁平植生調査報告（京都市委託調査），1-46，2008.

高橋絵里奈・坂野上なお：奈良県吉野地域における高品位大径材生産および製材加工の現状と課題，木造建造物文化財の為の木材及び植物性資材確保に関する研究 平成 17 年度～平成 19 年度科学研究費補助金（基盤研究(A)(1)）研究成果報告書，198-207，2008.

### 里域生態系部門

#### ■里地生態保全学分野

梅本信也 他：梅本信也 編，古座川合同調査報告集 第 1 巻，ユニバース印刷，長岡京市，1，181，2007.

#### ■里海生態保全学分野

田中 克・中山耕至・山下 洋・益田玲爾：ヒラメの遺伝的集団構造と地域的生理生態特性に関する研究．生態系保全型増養殖システム確立のための種苗生産・放流技術の開発，平成 18 年度研究成果報告書，独立行政法人水産総合研究センター，32-33，2007.

田中 克・中山耕至・山下 洋・益田玲爾：ヒラメの遺伝的集団構造と地域的生理生態特性に関する研究．生態系保全型増養殖システム確立のための種苗生産・放流技術の開発，第 2 期（平成 16～18 年度）研究結果総括概要書，独立行政法人水産総合研究センター，34-35，2007.

## ◆ 学会発表（発表要旨集含む）

## ■ 森林生物圏部門

## ■ 森林生態保全学分野

- 福島慶太郎・徳地直子：林齢の異なるスギ人工林土壌における微生物バイオマスと養分循環，第55回日本生態学会大会講演要旨集，55，395，2008.
- 福島慶太郎・徳地直子：皆伐・植栽後の経過年数にともなう窒素循環の変化，第119回日本森林学会大会要旨集CD，119，2008.
- 徳地直子・福島慶太郎：有田川流域における河川水質の形成要因，第55回日本生態学会大会講演要旨集，55，395，2008.
- 徳地直子・福島慶太郎：滋賀県の落葉広葉樹二次林における皆伐後処理が土壌の窒素動態に与える影響，第119回日本森林学会大会要旨集CD，119，2008.
- 阿方智子・福島慶太郎・徳地直子：隣接する集水域間で水質の違いを生じる要因，第55回日本生態学会大会講演要旨集，55，390，2008.
- 上田実希・徳地直子：土壌中の無機態窒素と植物の硝酸同化活性の温帯二次林における季節性，第55回日本生態学会大会講演要旨集，55，385，2008.
- 鎌内宏光・新井宏受・福島慶太郎・福澤加里部・土居秀幸・富永浩史・近藤千眞・徳地直子：河川の流下に伴う食物網の炭素窒素同位体比の変化－仁淀川の例，第55回日本生態学会大会講演要旨集，55，387，2008.
- 福澤加里部・徳地直子・鎌内宏光・長谷川尚史・吉岡崇仁・柴田昌三・山下 洋：仁淀川流域における地形および土地利用が河川水質に及ぼす影響，第55回日本生態学会大会講演要旨集，55，471，2008.
- 福島慶太郎・尾谷香奈・嶋村鉄也・館野隆之輔・徳地直子：スギ人工林の成立に伴う生葉・リター・土壌有機物の質的・量的変化，第118回日本森林学会大会要旨集CD，118，3-40，2007.
- 寄元道徳・荒井 亮・中根勇雄・中川智之・黒田真人・柴田泰征・山内隆之・柳本 順・中島 皇：京都市近郊のヒノキ天然林における種子生産と実生の動態，第118回日本森林学会学術講演集，九州大学，118，717，2007.
- 森下和路・寄元道徳：多雪地のスギ・落葉広葉樹林に優占的な低木3種の空間分布パターン，第118回日本森林学会学術講演集，九州大学，118，458，2007.
- 松山周平・寄元道徳：開葉・開花フェノロジーの異なるウルシ属2種における雄と雌の繁殖投資と繁殖コスト，第119回日本森林学会学術講演集，東京農工大学，119，631，2008.
- 松山周平・大澤直哉・寄元道徳：ヤマウルシの繁殖生態：繁殖成功における雌雄異株の花序とジェネラリストポリネーターの役割，第55回日本生態学会要旨集，九州大学，55，418，2008.

## ■ 森林資源管理学分野

- Yoshioka, T.: Sustainable development and environmental valuation, International Symposium on Water Resources and Environmental Problems with Social Development, 30-31, 2007.
- Lee, J.-Y., Yoshioka, T. and Hino, S.: The difference of stable isotope value between herbivorous calanoid copepod and cladoceran in two forest lakes, The 13th International Symposium on River and Lake Environment (ISRLE 2007), 2007.
- Shibata, H., Xu, X., Ogawa, A., Nakatsuka, T. and Yoshioka, T.: Spatial and temporal pattern of dissolved carbon and nitrogen in stream water with topographical gradient in forested basins in northern Japan, ILTER 2007 International Conference on Long-Term Ecological Research, "Long-term Ecological Research: Meeting the

challenges of sustainable ecosystem management from local to global scales”, 2007.

福澤加里部・徳地直子・鎌内宏光・長谷川尚史・吉岡崇仁・柴田昌三・山下 洋：仁淀川流域における地形および土地利用が河川水質に及ぼす影響，日本生態学会第55回大会，2007.

柴田英昭・徐 小牛・小川安紀子・中塚 武・吉岡崇仁：北海道北部の多雪森林流域における河川水質の時空間変動プロセスの解明，シンポジウム「長期生態系モニタリングの現状と課題－温暖化影響と生態系応答」，2007.

林 直樹・吉岡崇仁：流域に関する関心事調査－環境への関心と保全行動への意向－，環境科学会2007年会，74-75，2007.

松川太一・吉岡崇仁・林 直樹・永田素彦，森林伐採計画案に対する評価とその規定要因，環境科学会2007年会，76-77，2007.

松村綾子・林 直樹・松川太一・吉岡崇仁：身近な環境問題に関する自由回答から見た流域の特徴，環境科学会2007年会，78-79，2007.

吉岡崇仁：人間－自然相互作用から見た資源利用，エコマテリアル・フォーラムシンポジウム，2007.

永田素彦・吉岡崇仁：流域環境の価値評価に関する基礎的研究(2)，日本グループ・ダイナミックス学会第54回大会，2007.

柴田英昭・徐 小牛・小川安紀子・吉岡崇仁：森林流域における水文地形構造と河川溶存成分の関係，第118回日本森林学会大会，702，2007.

川村 誠・坂野上なお：国産材流通の市場特性－兵庫県西播磨地域の原木市売市場の分析－，日本森林学会関西支部大会，2007.

川村 誠・坂野上なお・長谷川 正：国際競争下における国産材流通の構造変化，林業経済学会秋季大会，2007.

高橋絵里奈・坂野上なお・山本博一：吉野林業地における高品質大径材生産の可能性－川上村と東吉野村の人工林面積の推移から－，日本森林学会，2008.

## ■森林環境情報学分野

芝 正己：倫理的マーケティングにおける森林認証への障壁，第119回日本森林学会大会学術講演集，458，2008.

坂本朋美・芝 正己：FSC 森林認証の展開と森林管理への影響について，第119回日本森林学会大会学術講演集，417，2008.

三浦きさと・芝 正己：森林認証と森林組合の製品流通構造の変化について，第119回日本森林学会大会学術講演集，418，2008.

Shiba, Masami, Ogawa, Naoya: Confronting sustainable forestry in a period of uncertainty and change: forest certification's role as a market-based catalyst, Proc of 2007 IUFRO All Division 5 Conference, 174, 2007.

板谷明美・芝 正己：航空写真を用いたオブジェクトベースの画像解析による長期の森林情報の抽出，第118回日本森林学会大会学術講演集，433，2007.

芝 正己：モニタリングツールとしての森林認証スキームと作業コードの対比，第118回日本森林学会大会学術講演集，134，2007.

## 里域生態系部門

### ■里山資源保全学分野

柴田昌三・池田邦彦：インド・ミゾラム州における竹類メロカンナの開花について－1. メロカンナの開花に関する記録と日本に保存されている系統－，第118回日本森林学会大会講演要旨集，2007.

- 齋藤智之・陶山佳久・西脇亜也・蒔田明史・C.H. モンブイヤ・池田邦彦・阿部佑平・柴田昌三：インド・ミゾラム州における竹類 *Melocanna baccifera* の開花について-2. 大面積開花直前の状況について-, 第 118 回日本森林学会大会講演要旨集, 2007.
- 池田邦彦・神崎 護・柴田昌三：インド・ミゾラム州における竹類メロカンナの開花について-3. 焼畑地におけるメロカンナの開花について-, 第 118 回日本森林学会大会講演要旨集, 2007.
- 齊藤誠子・柴田昌三・今西亜友美：都市近郊二次林における人工ギャップ創出 6 年後の本木植物の更新状況, 第 118 回日本森林学会大会講演要旨集, 2007.
- 宇土寿一・吉田和男・柴田昌三：海岸自生植物を用いた緑地における雑草防除を目的とした海水散布実験～関西国際空港 2 期空港島における試み～, 日本緑化工学会誌, 33(1), 288-291, 2007.
- 村永有衣子・柴田昌三・Ho Dac Thai Hoang：ベトナム中部山岳少数民族による森林資源利用に関する基礎的研究, 平成 19 年度日本システム農学会講演要旨集, 2007.
- 柴田昌三・池田邦彦・陶山佳久・齋藤智之・長谷川尚史・箕口秀夫・西脇亜也・蒔田明史：48 年ごとに咲くタケ：インド・ミゾラム地方のメロカンナの一斉開花・更新, 第 55 回日本生態学会大会講演要旨集, 142, 2008.
- 中西麻美・稲垣善之・柴田昌三・大澤直哉：異なる斜面位置のヒノキ林における繁殖器官への窒素投資, 第 119 回日本森林学会大会講演要旨集, 2008.
- 松尾 歩・陶山佳久・住吉千夏子・井鷲裕司・長谷川尚史・齊藤誠子・柴田昌三・阿部佑平・齋藤智之・西脇亜也・鈴木準一郎・蒔田明史：一斉開花したチュウゴクザサ群落におけるクローン構造と繁殖努力, 第 119 回日本森林学会大会講演要旨集, 2008.

## ■河口域生態学分野

- Yamada, Toshiyuki, Donai, Hayato, Tagawa, Masatomo, Okauchi, Masanori and Araki, Kazuo: The effects of cortisol on the body coloration of flatfish, 第 40 回日本発生生物学会大会・第 59 回日本細胞生物学会合同大会要旨集, 155(#2P-135), 2007.
- 山田敏之・土内隼人・田川正朋・岡内正典・荒木和男：ホシガレイの体色発現に及ぼすコルチゾルの影響, 2007 年度日本水産学会秋期大会要旨集, 98, 2007.
- 田川正朋・有瀧真人：ヌマガレイの変態異常と甲状腺ホルモン-変態より前の T4 分泌が左右性を決定する可能性-, 2008 年度日本水産学会春期大会要旨集, 188(#1123), 2008.

## ■里海生態保全学分野

- 中西麻美・稲垣善之・柴田昌三・大澤直哉：窒素資源量の異なる林分におけるギャップ形成がヒノキの落葉の季節性と窒素引き戻しに及ぼす影響, 日本森林学会関西支部大会要旨集, 58, 53, 2007.
- 稲垣善之・奥田史郎・中西麻美・柴田昌三・深田英久：ヒノキ林における落葉前の窒素の引き戻し率：気象条件, 土壌特性, 立木密度の影響, 日本森林学会関西支部大会要旨集, 58, 52, 2007.
- 中西麻美・稲垣善之・柴田昌三・大澤直哉：異なる斜面位置のヒノキ林における繁殖器官への窒素投資, 日本森林学会学術講演集, 119, 2008.
- 稲垣善之・倉本恵生・酒井 敦・中西麻美・深田英久：ヒノキ林の窒素循環：気象条件の影響, 日本森林学会学術講演集, 119, 2008.
- 和田敏裕・山田徹生・有瀧真人・首藤宏幸・山下 洋・田中 克：宮古湾におけるホシガレイ稚魚放流適期のケージ実験による解明, 平成 19 年度日本水産学会春季大会講演要旨集, 64, 2007.
- 大嶋真謙・上原伸二・栗田 豊・米田道夫・富永 修・上野正博・山下 洋：耳石輪紋間隔から評価した若狭湾と仙台

- 湾・常磐海域におけるヒラメ浮遊仔魚の成長の違い，平成19年度日本水産学会春季大会講演要旨集，65，2007.
- 谷本尚史・中山耕至・山下 洋・田中 克：異なる地域に由来するヒラメ着底稚魚の飼育下での成長比較，平成19年度日本水産学会春季大会講演要旨集，66，2007.
- 鳥越 賢・益田玲爾・上野正博・中西麻美・甲斐嘉晃・芝 正己・山下 洋・田中 克：スギ間伐材魚礁の集魚効果メカニズム，平成19年度日本水産学会春季大会講演要旨集，71，2007.
- 畠山 類・大河内裕之・白藤徳夫・千村昌幸・益田玲爾・山下 洋・河村知彦：ニシン科魚類の飢餓耐性に関わる特性の種間比較，平成19年度日本水産学会春季大会講演要旨集，77，2007.
- 坂本三和・上野正博・山下 洋：京都府伊佐津川における両側回遊性ミゾレヌマエビの成長と成熟，平成19年度日本水産学会春季大会講演要旨集，165，2007.
- 陳 炳善・中川雅弘・田川正朋・益田玲爾・山下 洋：飼育条件下でのクロソイ仔稚魚の発育に伴う分布特性と生理状態の変化，平成19年度日本水産学会春季大会講演要旨集，200，2007.
- 栗川喜朗・笠井亮秀・上野正博・山下 洋：由良川河口域の物理構造・一次生産構造の解明，平成19年度日本水産学会春季大会講演要旨集，239，2007.
- 鈴木健太郎・杉本 亮・笠井亮秀・上野正博・山下 洋・田中 克：由良川水系における土地利用形態と水質の関係，平成19年度日本水産学会春季大会講演要旨集，240，2007.
- 福西悠一・中村光男・益田玲爾・山下 洋・田川正朋・青海忠久：正常ヒラメおよびアルビノヒラメの紫外線に対する耐性，平成19年度日本水産学会春季大会講演要旨集，283，2007.
- Kasai, A., Kurikawa, Y., Ueno, M. and Yamashita, Y.: Formation mechanism of hypoxia in estuarine and coastal seas, International Symposium on Integrated Coastal Zone Management, Book of Abstracts, 117, 2007.
- Yamashita, Y., Ueno, M. and Kasai, A.: Causes of the decrease of coastal fishery stocks in Japan, examination from ecological links from forest to coastal waters, International Symposium on Integrated Coastal Zone Management, Book of Abstracts, 138, 2007.
- Sakamoto, M., Ueno, M. and Yamashita, Y.: Life history and habitat conservation of an amphidromous shrimp in Japan, International Symposium on Integrated Coastal Zone Management, Book of Abstracts, 144, 2007.
- Yamashita, Y.: Research and education of the ecological links between forests and coastal waters, The 9th Kyoto University International Symposium, Integrated global environmental studies towards human security, 79, 2007.
- Yamashita, Y.: Regeneration of shallow nursery grounds and application of stock enhancement technology to rejuvenate coastal fishery resources, American Fisheries Society 137th Annual Meeting, 1452, 2007.
- 福西悠一・益田玲爾・山下 洋・清水大輔：ホシガレイにおける紫外線耐性の個体発生，平成19年度日本水産学会秋季大会講演要旨集，126，2007.
- 和田敏裕・光永直樹・鈴木啓太・山下 洋・田中 克：ホシガレイとヒラメの加入機構比較－ホシガレイの希少性の原因を探る－，平成19年度日本水産学会秋季大会講演要旨集，131，2007.
- 大嶋真謙・上原伸二・栗田 豊・米田道夫・富永 修・上野正博・山下 洋：若狭湾と仙台湾・常磐海域におけるヒラメ浮遊仔魚期の成長依存減耗，平成19年度日本水産学会秋季大会講演要旨集，161，2007.
- 鈴木健太郎・杉本 亮・笠井亮秀・上野正博・山下 洋：由良川水系における懸濁態有機物の挙動，平成19年度日本水産学会近畿支部後期例会，要旨集，7，2007.
- 福井くにこ・上野正博・山下 洋・今井一郎・中原紘之：付着藻類相に現れる由良川支流間の河川環境の差異，平成19年度日本水産学会近畿支部後期例会，要旨集，14，2007.
- 山下 洋・益田玲爾・桑原久実・明田定満：温帯性沿岸魚類への温暖化影響，2008年度水産海洋学会シンポジウム

「地球温暖化とその沿岸・沖合海洋生態系への影響－検知と予測－」要旨集, 10, 2008.

山下 洋: 森里海連環学. 「森・川・里・海」流域間連携と総合的管理, 平成 19 年度瀬戸内海環境保全セミナー・合同研修会, 1-6, 2008.

山下 洋: 大学における取り組み「学生を連れてフィールドへ行こう」, 沿岸環境関連学会連絡協議会第 19 回ジョイントシンポジウム, 3-4, 2008.

福澤加里部・徳地直子・鎌内宏光・長谷川尚史・吉岡崇仁・柴田昌三・山下 洋: 仁淀川流域における地形および土地利用が河川水質に及ぼす影響, 第 55 回日本生態学会大会講演要旨集, 471, 2007.

甲斐嘉晃・坂井恵一・中坊徹次: サケビクニン種群 (クサウオ科) の形態的・遺伝的特徴, 日本魚類学会, 2007.

亀甲武志・原田泰志・竹内大介・甲斐嘉晃: 河川型イワナ個体群間の卵サイズ変異, 日本魚類学会, 2007.

Kai, Y., Orr, J.W., Sakai, K. and Nakabo, T.: Cryptic diversity in the *Careproctus rastrinus* species complex (Liparidae) from the North Pacific as inferred from molecular and morphological analyses, 魚類の多様性に関する国際シンポジウム, 2008.

明田勝章・淀 太我・甲斐嘉晃・吉岡 基: 若狭湾西部海域におけるメバル 3 色彩型の成長, 日本水産学会, 2007.

## ■沿岸資源管理学分野

Masuda, R.: Ontogeny of association behaviour with jellyfish in jack mackerel *Trachurus japonicus* revealed by rearing experiment using *Aurelia aurita* and underwater observation in relation to *Nemopilema nomurai*, Second International Jellyfish Bloom Symposium, 55, 2007.

Masuda, R.: Ontogeny of behaviour in jack mackerel, chub mackerel and Japanese anchovy larvae and juveniles with reference to their survival strategy and population dynamics, Seminar on New Directions in Marine Science and Aquaculture, 18, 2008.

Masuda, R.: Seasonal and interannual variation of subtidal fish assemblages in Wakasa Bay revealed by underwater visual census with reference to the warming trend in the Sea of Japan, International Symposium on Systematics and Diversity of Fishes, 6, 2008.

益田玲爾: カタクチイワシ仔稚魚の対捕食者行動の個体発生－群れ形成・遊泳速度・クラゲによる被食－, 平成 20 年度日本水産学会大会 講演要旨集, 37, 2008.

高橋宏司・益田玲爾・山下 洋: 報酬訓練によるマアジ稚魚の学習能力の個体発生, 平成 20 年度日本水産学会大会 講演要旨集, 38, 2008.

江口さやか・稲葉法子・白石有希・山本義和・上野正博・益田玲爾・山下 洋: 京都府舞鶴湾における環境実態調査－鉛汚染の現状把握－, 平成 20 年度日本水産学会大会 講演要旨集, 202, 2008.

伊藤祐介・守岡佐保・山下 洋・益田玲爾・東条齊興・岩森利弘・宮下和士: カタクチイワシ (*Engraulis japonicus*) シラスのターゲットストレングス推定の高度化, 平成 20 年度日本水産学会大会 講演要旨集, 220, 2008.

横田高士・竹内宏行・升間主計・益田玲爾・荒井修亮: アカアマダイ人工種苗の日周性と放流海域への定着との関係, 平成 20 年度日本水産学会大会 講演要旨集, 230, 2008.

大須賀宣孝・笠井亮秀・益田玲爾・高志利宣・山内 信・蒲原 聡: 炭素・窒素安定同位体比分析及び飼育実験によるアイゴの摂餌選択制の解明, 平成 20 年度日本水産学会大会 講演要旨集, 234, 2008.

## 基礎海洋生物学部門

### ■海洋生物系統分類学分野

稲土綾乃・大和茂之・遊佐陽一：カルエボシの成長・繁殖に対する温度と餌量の影響，2007年度日本ベントス学会・日本プランクトン学会合同大会，2007.

### ■海洋生物進化形態学分野

深見裕伸・林原 毅・北野倫生・石岡 昇・三上信雄：沖ノ鳥島のミドリイシサンゴはどこから来たのか？，日本さんご礁学会第10回大会要旨集，10，92，2007.

鈴木 豪・林原 毅・白山義久・深見裕伸：クシハダミドリイシで発見されたミトコンドリア遺伝子の多様性—過去の個体群分断の証拠—，日本さんご礁学会第10回大会要旨集，10，100，2007.

Lien, Y.T., Fukami, H., Yamasita, Y., and Chen, A.C.: Diversity of symbiotic algae (Zooxanthellae) in zooxanthellate corals from temperate Japan, 日本さんご礁学会第10回大会要旨集，10，114，2007.

鈴木 豪・林原 毅・深見裕伸：ミドリイシ属サンゴ幼生の選択的着生について，日本生態学会第55回大会講演要旨集，55，187，2008.

### ■海洋生物多様性保全学分野

西本篤史・三戸彩絵子・白山義久：陸棚上の沈木に付随する生物相における食物網，2008年春季日本海洋学会講演要旨集，2008.

### (3) 学会と社会における活動

#### ◆ 学内 併任・委員会委員

(フィールド研における常設委員会等は除く (第3章・第4章 参照))

#### 森林生物圏部門

##### ■森林環境情報学分野

芝 正己：農学研究科コンピュータ援用物理系実習室管理運営委員

#### 里域生態系部門

##### ■里山資源保全学分野

柴田 昌三：京都大学国際交流委員会委員 (7月1日付)

##### ■河口域生態学分野

田川 正朋：全学共通教育システム委員会 生物学部会

中山 耕至：応用生物科学専攻 KYS 委員

##### ■里海生態保全学分野

山下 洋：大学評価委員会点検・評価実行委員会

##### ■沿岸資源管理学分野

益田 玲爾：全学共通教育システム委員会 少人数教育部会委員

#### 基礎海洋生物学部門

##### ■海洋生物多様性保全学分野

白山 義久：生態学研究センター協議員・外部評価委員

地球環境学堂・学舎協議会

## ◆ 学外 併任・委員会委員

### 森林生物圏部門

#### ■森林生態保全学分野

徳地 直子：財団法人防災研究協会 非常勤研究員

#### ■森林資源管理学分野

吉岡 崇仁：総合地球環境学研究所 共同研究員

安藤 信：京都伝統文化の森推進協議会専門委員

財団法人阪本奨学会理事

標茶町林業推進協議会委員

標茶町緑化推進委員

坂野上なお：滋賀県森林審議会委員

#### ■森林環境情報学分野

芝 正己：(財)阪本奨学会 理事

文部科学省初等中等教育局教科用図書検定調査審議会専門委員

日本森林管理協議会 Forsta 理事

FSC International 国際委員（社会部門）

全国演習林協議会表彰委員会委員

FSC 国内森林認証認証評価委員

近畿中国森林管理局森林・林業交流研究会発表審査委員

富山県林業技術センター客員研究員

アミタ(株) 森林管理技術顧問

森林技術協会京都大学支部長

三重県環境事業団技術顧問

### 里域生態系部門

#### ■里山資源保全学分野

柴田 昌三：京都府 緑の公共事業アクションプラン策定に係る検討会議委員

社団法人土地防災研究所 治水防災事業推進委員会委員

林野庁 特用林産物の振興対策研究会委員

森林総合研究所関西支所 所内交付金プロジェクト評価委員

文化庁・富山県砺波市 文化的景観（富山の屋敷林景観）検討委員会委員

西村 和雄：農林水産省有機農業推進委員会委員

有機農業技術会議代表

全国有機農業協議会理事

## ■里海生態保全学分野

山下 洋：東京大学海洋研究所 外部評価委員

京都府農林水産部 京都府農林水産試験研究機関のあり方検討会委員

京都府漁業調整委員

国交省由良川下流水面利用協議会（委員会）委員

京都まいつる立命館地域創造機構運営委員

独立行政法人水産大学校外部評価委員

全国豊かな海づくり推進協会・日本海中西部栽培漁業資源回復等対策事業専門家委員

水産庁藻場資源調査等推進委託事業「藻場資源評価及び管理手法の確立」評価委員

農林水産技術会議農林水産研究高度化事業トラフグ「最適放流手法を用いた東シナ海トラフグ資源への添加技術の高度化」評価委員

日本学術振興会特別研究員等審査専門委員

環境省自然環境資源活用型地域活性化検討会委員

中西 麻美：総合地球環境学研究所 共同研究員

京都府中丹広域振興局・京都府中丹地域戦略会議委員

特定非営利活動法人森林再生支援センター 理事

## 基礎海洋生物学部門

### ■海洋生物系統分類学分野

久保田 信：和歌山県立自然博物館協議会委員

大和 茂之：(財)天神崎の自然を大切にする会評議員

### ■海洋生物進化形態学分野

宮崎 勝己：千葉県 ウミグモ緊急対策検討委員会委員

深見 裕伸：琉球大学 客員研究員

### ■海洋生物多様性保全学分野

白山 義久：財団法人シップアンドオーシャン財団「総合的海洋政策研究委員会」委員

特定非営利活動法人 日本国際湿地保全連合・作業部会への参画

特定非営利活動法人 地球環境産業技術研究機構理事長（CO<sub>2</sub>海洋隔離技術委員会）

経済産業省産業技術環境局「二酸化炭素回収・貯留（CCS）研究会」委員

日本エヌ・ユー・エス株式会社 海洋環境モニタリング検討会検討員・廃棄物海洋投入処分環境影響評価調査検討会検討員

文部科学省科学技術政策研究所 専門調査員

## ◆ 学協会委員

### 森林生物圏部門

#### ■森林生態保全学分野

徳地 直子：日本生態学会 会計監事

#### ■森林資源管理学分野

吉岡 崇仁：日本陸水学会評議員

モニタリングサイト 1000 陸水域作業部会委員（財団法人自然環境研究センター）

#### ■森林環境情報学分野

芝 正己：森林利用学会理事

日本森林学会関西支部学会誌編集委員

国際森林研究機関連合（IUFRO）Division3 S3.06.00 座長・S3.06.02 副座長

米国林業工学協議会（COFE）国際会員・学会誌（IJFE）国際編集員

地盤-車両系国際学会（ISTVS）国際会員

### 里域生態系部門

#### ■里山資源保全学分野

柴田 昌三：社団法人日本造園学会 理事 国際委員会委員

日本緑化工学会 理事 環境林研究部会長 学会賞選考委員会委員

日本生態学会 保全生態学研究編集委員会委員

竹類勉強会 会長

竹文化振興協会 参与 研究誌編集委員会委員

京都竹文化振興財団 評議員

竹資源有効活用コンソーシアム アドバイザー

グリーン購入コンソーシアム アドバイザー

大阪CDMネットワーク アドバイザー

近畿竹資源有効活用コンソーシアム アドバイザー取りまとめ役幹事

NPO 法人環境資源開発研究所 副理事長

セニード（Center for Nepal Environmental and Educational Development）後援会 会長

World Bamboo Organization: Member of Board of Directors

#### ■里地生態保全学分野

梅本 信也：日本雑草学会 用語委員

#### ■河口域生態学分野

田川 正朋：日本水産学会 平成19年度水産学教育推進委員会委員 平成19年度出版委員会委員

中山 耕至：日本魚類学会電子情報委員

■里海生態保全学分野

山下 洋：水産海洋学会常任幹事・編集委員

Fisheries Oceanography 編集委員

甲斐 嘉晃：日本魚類学会庶務幹事（－2007年12月）・評議員（2008年1月－）・電子情報委員（2008年1月－）

日本動物分類学会 Species Diversity 編集委員（2008年1月－）

**基礎海洋生物学部門**

■海洋生物系統分類学分野

大和 茂之：南紀生物同好会編集委員

■海洋生物多様性保全学分野

白山 義久：動物分類学会評議員

日本線虫学会編集委員

日本海洋学会沿岸環境部会編集委員

◆ 学会・講演会の開催（個人）

**森林生物圏部門**

■森林環境情報学分野

芝 正己：緑資源機構近畿北陸整備局現地研修会「樹木識別」

**里域生態系部門**

■里山資源保全学分野

西村 和雄：有機農業技術会議主催 研究会および現地見学会二回開催

有機農業技術会議主催 有機農業大学（於信州大学松本）有機農業の堆肥技術

■里海生態保全学分野

山下 洋：平成19年度日本水産学会秋季大会シンポジウム「水産動物の生態研究における安定同位体比分析の現状と展望」企画責任者

**基礎海洋生物学部門**

■海洋生物多様性保全学分野

白山 義久：NaGISA Sampling Workshop（気仙沼）

◆ 受賞歴

**里域生態系部門**

■里海生態保全学分野

山下 洋：年月：2007年12月

受賞者名：鈴木健太郎・杉本 亮・笠井亮秀・上野正博・山下 洋

授賞内容：平成19年度日本水産学会近畿支部後期例会 最優秀発表, 「由良川水系における懸濁態有機物の挙動」

■河口域生態学分野

中山 耕至：年月：2007年3月

受賞者名：鈴木啓太・杉本 亮・笠井亮秀・小路 淳・中山耕至・田中 克

授賞内容：水産海洋学会論文賞「春季の有明海筑後川の高濁度汽水域における粒状有機物の動態」

**基礎海洋生物学部門**

■海洋生物進化形態学分野

深見 裕伸：年月：2007年11月

受賞者名：深見裕伸

授賞内容：日本サンゴ礁学会川口奨励賞（造礁サンゴ類の進化系統分類に関する研究）

## ◆ 地域貢献

(フィールド研関連事業における活動については、第6項 その他関連事業における活動 参照)

### 森林生物圏部門

#### ■森林生態保全学分野

徳地 直子：竹林整備 天王山森林整備推進協議会 主催 (5月12日)

講演「森林・竹林のしくみと天王山周辺森林整備」島本町森林整備ボランティア講習 (7月7日)

森林整備 天王山森林整備推進協議会 主催 (11月3日)

講演「森林のしくみ・竹林のしくみ」天王山・西山森林整備協議会シンポジウム (12月11日)

講演 龍谷大学社会科学研究所 森林整備と住民参加に関する研究会 (3月22日)

#### ■森林資源管理学分野

吉岡 崇仁：「環境の価値」, KBS 京都・SKY Perfect TV 番組『京都ちゃちゃちゃっ』(7月4日)

安藤 信：郷土の自然に親しみ理解を深める (遠足) 標茶町立標茶小学校 (5月25日)

地域民有林森林所有者研修会 (標茶) 自立林家育成研修会・釧路森づくりセンター普及課 (9月28日)

しべちゃアドベンチャースクールジュニアリーダー養成講座 (標茶) 標茶町教育委員会中央公民館 (10月13日-14日)

#### ■森林環境情報学分野

芝 正己：京都大学シニアキャンパス2007「フィールド学習D『芦生をめぐる』」(芦生研究林)

### 里域生態系部門

#### ■里山資源保全学分野

柴田 昌三：講演 西山から世界へタケの世界をのぞく (京大ローム記念館)

講演 竹のモノづくり-植物の竹から教えられるもの- (京大ローム記念館)

講演 竹林管理の知識-竹林の現状と管理手法- (大阪難波センター)

講演 竹を食べる-竹を口にする人間や動物の話- (京都大学生存圏研究所)

京都大学シニアキャンパス2007「フィールド学習D『芦生をめぐる』」(芦生研究林)

講演 各地における竹林の荒廃と拡大対策の取り組み (島根県中山間センター)

講演 竹林保全のあり方とボランティアの内容 (京大船井記念講堂)

講演 竹を通して見える世界 (大阪市大阪京大クラブ)

講演 竹林整備による竹資源の持続的有効活用 (長野市文化会館)

講演 竹の有効活用を考える-バイオマスとしての竹, 広がる高度利用- (東京ビッグサイト)

講演 バイオマスタウン構想における竹資源の有効性 (高知県森林総合センター)

講演 広がる竹林-ランドスケープの破壊者- (大阪市)

講演 森林再生の意味 (井手町)

講演 竹のバイオマスエネルギー利用 (高知県森林総合センター)

講演 京大が仁淀川安居川流域でやろうとしていること (高知県須崎市池の浦漁協)

- 講演 高知県と竹－竹のバイオマスエネルギー利用－（高知市）  
 講演 竹のバイオマス資源利用（熊本県御船町民会館）  
 講演 森が水土里を作り出すために人がしてきたこと（亀岡市かめりあホール）

### ■里海生態保全学分野

中西 麻美：平成 19 年度女子高校生・車座フォーラム講師 京都大学女性研究者支援センター主催（11 月 10 日）

### ■沿岸資源管理学分野

- 益田 玲爾：講義「海の中から見た舞鶴の魚たち」舞鶴市中央公民館主催見学会 舞鶴水産実験所（7 月 1 日）  
 講演「舞鶴湾の魚たち」舞鶴市ネイチャーガイド養成 舞鶴市商工観光センター（11 月 13 日）  
 講演「水中から見た若狭湾の魚類相の季節変化と温暖化－何をどう食べて、どのように管理するか？－」  
 京都府青壮年・女性漁業者交流大会 宮津市（11 月 28 日）  
 上野 正博：講師 綾部自然の会 学習会（綾部市）  
 講師 但馬ふるさとづくり大学（朝来市）

## 基礎海洋生物学部門

### ■海洋生物系統分類学分野

- 久保田 信：国際交流会（白浜町）講演 神秘のベニクラゲ（7 月 29 日）  
 講演「ベニクラゲの不死の生活史と地球の住民動物篇および白浜町へのクジラ類の漂着」（東京都）  
 講演「地球の住民、動物篇（クラゲの生物学）」（白浜町）  
 出演「解体新ショー（NHK-TV）」  
 出演「Go on（KBS 京都テレビ・関西テレビ京都チャンネル）」  
 出演「京都ちゃちゃちゃっ 濃縮還元（関西テレビ京都チャンネル）」  
 講演「『くらげ』に関する笑えるお話」（和歌山県田辺市）  
 講演「神秘のベニクラゲと海洋生物の歌」（京都市）  
 講演「神秘のベニクラゲの生態」（ステージイベント 神戸市）  
 講演「地球の住民 動物篇－特に「クラゲの生物学」－」AWS 動物学院（アドベンチャーワールド内）、  
 白浜町（6 月 7 日）  
 講演「神秘のベニクラゲと海洋生物-不老不死を歌う－」白浜老人大学，白浜町（8 月 22 日）

### ■海洋生物進化形態学分野

- 宮崎 勝己：白浜商工祭・白浜水族館出張水族館（和歌山県田辺市）  
 深見 裕伸：和歌山県田辺湾のリーフチェックへの参加（和歌山県南部町）

## (4) 国際活動

### ◆ 国際研究プロジェクト

#### 里域生態系部門

##### ■里海生態保全学分野

甲斐 嘉晃：北太平洋におけるサケビクニン種群の生物地理学的・分類学的研究（NOAA・京大総合博物館）

北太平洋におけるイカナゴ属魚類の集団遺伝学的・分類学的研究（NOAA，京大総合博物館）

#### 基礎海洋生物学部門

##### ■海洋生物多様性保全学分野

白山 義久：NaGISA (Natural Geography in Shore Area) ワークショップ（フィリピンマニラ，9月26～28日）

NaGISA (Natural Geography in Shore Area) ワークショップ（マレーシアブサラ島，2008年3月2～3日）

## ◆ 国際学会

## ■ 森林生物圏部門

## ■ 森林資源管理学分野

吉岡 崇仁：International Symposium on Water Resources and Environmental Problems with Social Development  
(南京, 中華人民共和国, 11月8-9日)

## ■ 森林環境情報学分野

芝 正己：Austro2007/FORMEC'07 (Vienna, Austria 10.05-13)  
2007 IUFRO All Division 5 Conference (Taipei, Taiwan, 10.27-11.04)

## ■ 里域生態系部門

## ■ 里山資源保全学分野

柴田 昌三：4th Interanational Symposium of Preservation and Restoration of Environmental Ecology (Yainji,  
China, 7.14-16)

## ■ 里海生態保全学分野

山下 洋：International Symposium on Integrated Coastal Zone Management, Arendal, June 10-15  
第9回京都大学国際シンポジウム2007「人間の安全保障のための地球環境学」(京都, 6月22-23日)  
American Fisheries Society 137th Annual Meeting, San Francisco, September 2-5  
甲斐 嘉晃：International Symposium on Fish Diversity (Tokyo, National Museum of Nature and Science, 2日  
間)

## ■ 沿岸資源管理学分野

益田 玲爾：Second International Jellyfish Blooms Symposium (Gold Coast, Queensland, 2007.6.24-28)  
International Symposium on Systematics and Diversity of Fishes (Tokyo, 2007.3.3-4.)  
Seminar on New Directions in Marine Science and Aquaculture (Kota Kinabalu, Malaysia, 2008.3.  
11-13)

## ■ 基礎海洋生物学部門

## ■ 海洋生物系統分類学分野

久保田 信：VIth Workshop of the Hydrozoan Society, Plymouth, UK. 06.17-2007.07.04

## ■ 海洋生物多様性保全学分野

白山 義久：有輪動物に関する共同研究 (コペンハーゲン大学, 8月24-25日)  
欧州海洋生物学シンポジウム (独 Christian-Albrechts-University, 8月27-31日)  
CoML 科学推進委員会 (ニュージーランド, 11月11-17日)  
CoML 科学推進委員会 (チリ, 2008年2月16-22日)

## ◆ 海外調査

### 森林生物圏部門

#### ■森林資源管理学分野

安藤 信：半乾燥地の植生に関する研究（中国・内蒙古，8月20-28日）

### 里域生態系部門

#### ■里山資源保全学分野

柴田 昌三：竹類 *Melocanna baccifera* 一斉開花地における生態的調査（インド・ミゾラム州，4月21-29日，11月18-28日）

ミオンボ林の利用に関する生態的調査（ザンビア，5月26日-6月2日）

半乾燥地の竹類の生態的調査（マラウイ，6月3-9日）

ルソン島北部における竹資源調査（フィリピン，6月28日-7月2日）

フエ山岳地帯の森林資源とその利用に関する調査（ベトナム，10月6-11日）

#### ■里地生態保全学分野

梅本 信也：中国貴州省ならびに江西壮族自治区における野生大豆の起源探索（10月31日-11月12日）

#### ■里海生態保全学分野

甲斐 嘉晃：フサカサゴ科魚類の分類学的研究（ドイツ・フンボルト大学自然史博物館・1週間）

イカナゴ科・フサカサゴ科の分類学的研究（ドイツ・ハンブルグ大学動物学博物館・3日間）

フサカサゴ科の分類学的研究（オーストリア・ウィーン自然史博物館・4日間）

### 基礎海洋生物学部門

#### ■海洋生物系統分類学分野

久保田 信：シャム湾（タイ）産ヒドロクラゲ相の調査研究（バンコク，6月12-17日）

エチゼンクラゲ大量発生 of 調査研究（中国・青島，9月28日-10月1日）

#### ■海洋生物進化形態学分野

深見 裕伸：イシサンゴの地理的変異の調査（オーストラリア・モートン湾，2007年4月12-27日，グアム，2008年1月21-25日）

## ◆ 在外研究

（2007年度はなし）

◆ その他出張研修

**森林生物圏部門**

■ 森林環境情報学分野

中島 皇：アメリカ合衆国の国立公園における森林保全に関する調査・資料収集（USA，2007年9月27日－10月4日，2008年3月17日－25日）

**里域生態系部門**

■ 里山資源保全学分野

柴田 昌三：スワヤンブー環境公園における環境教育指導（ネパール，8月29－31日，12月15－19日）

**基礎海洋生物学部門**

■ 海洋生物系統分類学分野

久保田 信：エチゼンクラゲ大量発生 of 調査研究 対馬（長崎県8月11－15日）  
エチゼンクラゲ大量発生 of 調査研究 加茂（山形県，8月31日－9月3日）

■ 海洋生物進化形態学分野

深見 裕伸：古座川のセンサーの電池交換（年数回）

■ 海洋生物多様性保全学分野

白山 義久：NOWPAP DINREC FOCAL POINT 会議（北京，5月24～25日）

◆ 外国人客員研究員

（2007年度はなし）

◆ 招聘研究員

**里域生態系部門**

■ 里海生態保全学分野

Md. Shahidul Islam：バングラディッシュ

郭 又哲：大韓民国

◆ 留学生

**森林生物圏部門**

■森林資源管理学分野

農学研究科博士課程2年：呉 初平：中国

**里域生態系部門**

■里海生態保全学分野

農学研究科：Chaitanya Kumar Bhandare：インド

農学研究科：Emily Sucaldito Antonio：フィリピン

農学研究科：Yi-Ting Lien：台湾

農学研究科：陳 炳善：韓国

(5) 教育活動

◆ 学内の講義・実習

講義区分	講義名	担当教員(敬称略)	科目番号	対象	開講期	単位
全学共通科目	水圏生物学入門	白山, 山下, 久保田, 益田, 田川, 宮崎, 上野, 大和, 深見ほか	講義	全回生	前期	2
	基礎生物学 A	白山ほか	講義	主として1・2回生	前期	2
	森里海連環学実習 A	山下, 芝, 益田, 西村, 上野, 中西, 甲斐ほか	実習	全回生	前期集中	2
	森里海連環学実習 B	白山, 久保田, 徳地, 梅本, 宮崎, 大和, 深見ほか	実習	全回生	前期集中	2
	森里海連環学実習 C	吉岡, 安藤, 中山, 甲斐ほか	実習	全回生	前期集中	2
	B群	北海道東部の人と自然	安藤, 坂野上ほか	全回生	前期集中	2
		探求型化学実験-湖と海の化学調査-	久保田ほか	主として2回生	前期集中	2
		森里海連環学-森里海のつなかりと分断-	山下, 白山, 柴田, 吉岡, 徳地, 芝, 中島, 畠山, C.W. ニコルほか	全回生	後期	2
		海域・陸域統合管理論	白山ほか	全回生	後期	2
		森林学	柴田, 徳地, 芝, 安藤, 中島, 坂野上, 嵩元	全回生	後期	2
		生物圏の科学-生命・食糧・環境-	西村, 徳地, 安藤, 上野ほか	全回生	後期	2
		暖地性積雪地域における冬の自然環境	中島	2・3回生を優先	後期集中	1
		北海道東部の厳冬の自然環境	安藤ほか	全回生	後期集中	2
		C.W. ニコル “アファンの森” に学ぶ	柴田	1回生	前期集中	2
		フィールド実習 “森は海の恋人”	白山	1回生	前期集中	2
		河口域の生態学	山下	1回生	前期集中	2
		海岸生物の多様性	久保田	1回生	前期集中	2
		海洋生物の生活史	白山	1回生	前期集中	2
		魚類心理学入門	益田	1回生	前期	2
	B群 (少人数セミナー)	原生的な森林の動き	中島	ゼミ	1回生	前期集中
森のつくりだすもの		徳地	ゼミ	1回生	前期集中	2
森里海のつなかりを清流古座川に見る		梅本	ゼミ	1回生	前期集中	2
森林の再生と動態		安藤	ゼミ	1回生	前期集中	2
節足動物学入門		宮崎	ゼミ	1回生	前期集中	2
豊かな森をめざして!		芝	ゼミ	1回生	前期集中	2
木造校舎を造る: 木の文化再生へ		柴田, 芝ほか	ゼミ	1回生	前期集中	2
有機農業の可能性……持続可能な農業をめざして		西村	ゼミ	1回生	前期集中	2
自然と文化-農の営みを軸に		西村ほか	ゼミ	1回生	前期集中	2
A・B群		地球環境学のすすめ	柴田ほか	全回生	前期	2
農学部	資源生物科学概論Ⅲ	山下, 田川ほか	A107	2回生	後期	2
	動物生理学	田川ほか	A113	2回生	前期	2
	海洋生物科学技術論と実習Ⅰ	水産実験所教員 (山下, 益田, 上野, 中西, 甲斐) ほか	A205	2回生	前期集中	2
	海洋生物科学技術論と実習Ⅱ	中山, 水産実験所教員 (山下, 益田, 上野, 甲斐) ほか	A206	2回生	前期集中	2
	海洋生物科学技術論と実習Ⅲ	水産実験所教員 (山下, 益田, 上野, 中西, 甲斐) ほか	A207	2回生	前期集中	1
	植物調査法と実習	梅本ほか	A208	2回生	前期集中	2
	海洋生物生態学	田中	A224	3回生	前期	2
	資源生物科学専門外書講義Ⅲ	田川ほか	A237	3回生	前期・後期	2
	海洋生物生理学	田川	A248	3回生	後期	2
	海洋生物資源学演習	田川, 中山ほか	A512	4回生	通年	2
	課題研究	田川, 中山	A518	4回生	通年	10

農学部	森林科学科	森林科学IV	柴田ほか	E114	2 回生	後期	2
		森林育成学	柴田, 徳地, 嵩元	E128	3 回生	後期	2
		森林植物学	安藤	E129	3 回生	後期集中	2
		森林管理システム及び応用技術論	芝	E130	3 回生	後期	2
		雪氷学基礎論	吉岡, 中島	E131	3 回生	後期	2
		森林科学実習IV	徳地, 中島, 芝ほか	E214	2 回生	後期	1
		森林総合実習及び実習法	安藤, 嵩元, 中島, 芝, 坂野上ほか	E221	3 回生	前期	2
		研究林実習 I	森林科学科教員, フィールド研教員 (芝)	E236	2 回生	後期集中	1
		研究林実習 II	徳地ほか	E237	3 回生	後期集中	1
		研究林実習 III	安藤, 坂野上ほか	E238	3 回生	前期集中	2
		研究林実習 IV	安藤ほか	E239	3 回生	後期集中	2
		森林基礎科学IV	柴田, 吉岡ほか	E106	1 回生	後期	2
		海洋生物学	白山	2705	2 回生	前期	2
		無脊椎動物学	白山, 久保田, 宮崎	2708	2 回生	後期	2
		理学部	生物科学科	臨海実習第 1 部	白山, 久保田, 宮崎, 大和, 深見	2733	2 回生
臨海実習第 2 部	白山, 久保田, 宮崎, 大和, 深見			3767	3 回生	春期集中	2
臨海実習第 3 部	白山, 久保田, 宮崎, 大和, 深見ほか			3768	3 回生	夏期集中	2
臨海実習第 4 部	白山, 久保田, 宮崎, 大和, 深見			3769	3 回生	夏期集中	2
海洋生物学 (課題研究)	白山, 久保田, 宮崎, 大和, 深見			5707	生物学課題研究	通年	12

(大学院)

農学研究科	農学専攻	雑草学専攻実験	梅本ほか	I 45	修士1・2 回生	通年	10
		森林情報学特論 II	芝	II 114	修士1・2 回生	後期	2
		森林育成学特論 II	安藤, 柴田	II 116	修士1・2 回生	後期	2
		森林情報学専攻実習	吉岡, 芝, 中島, 西村, 坂野上	II 207	修士1・2 回生	通年	8
		森林育成学専攻実習	柴田, 安藤, 徳地, 嵩元	II 208	修士1・2 回生	通年	8
		森林情報学専攻実験	吉岡, 芝, 中島, 西村, 坂野上	II 307	修士1・2 回生	通年	10
		森林育成学専攻実験	柴田, 安藤, 徳地, 嵩元	II 308	修士1・2 回生	通年	10
		海洋資源生物学特論	田川	IV 216	修士1・2 回生	後期	2
		海洋資源生物学実習	田川, 中山	IV 307	修士1・2 回生	通年	6
		里海生態保全学実習	山下, 益田	IV 317	修士1・2 回生	通年	6
理学研究科	応用生物科学専攻	海洋資源生物学専攻実験	田川, 中山	IV 407	修士1・2 回生	通年	12
		里海生態保全学専攻実験	山下, 益田	IV 418	修士1・2 回生	通年	12
		動物系統解析特論 A	白山, 久保田, 宮崎, 大和, 深見	M005	修士1・2 回生	前期	2
		動物系統解析特論 B	白山, 久保田, 宮崎, 大和, 深見	M006	修士1・2 回生	後期	2
		海洋生物学特論	白山, 久保田, 宮崎, 大和, 深見	M043	修士1・2 回生	前期	2
		海洋生物学ゼミナール A	白山, 久保田, 宮崎, 大和, 深見	M549	修士1 回生	前期	2
		海洋生物学ゼミナール B	白山, 久保田, 宮崎, 大和, 深見	M550	修士1 回生	後期	2
		海洋生物学ゼミナール C	白山, 久保田, 宮崎, 大和, 深見	M551	修士2 回生	前期	2
		海洋生物学ゼミナール D	白山, 久保田, 宮崎, 大和, 深見	M552	修士2 回生	後期	2
		景観生態保全論	柴田ほか	3217	修士1・2 回生	前期上半	1
地球環境学	景観生態保全論分野	里山再生論	柴田	3507	修士1・2 回生	後期集中	1
		里域植生保全論	梅本	3563	修士1・2 回生	前期集中	2

## ◆ 学位授与

**森林生物圏部門**

- 学士 阿方 智子：隣接する集水域間で水質の違いを生じる要因  
 鈴木 隆洋：大都市の公園のあり方について  
 三浦きさと：森林組合の製品流通構造への FSC 森林認証の影響  
 – FSC-CoC 認証取得の 5 森林組合を事例に –
- 修士 井上 泰男：溶存有機物の蛍光特性からみた森林生態系の攪乱に対する影響評価  
 尾崎 絵美：道東の北方針広混交林における林分の 18 年間にわたる動態  
 倉田 麻里：京都府産材の利用促進における課題  
 – 緑の交付金制度を利用した住宅における木材利用の分析から –  
 坂本 朋美：日本における FSC 森林認証の展開と森林管理への影響について

**里域生態系部門**

- 学士 吉田 幸弘：京都府西山地域の都市近郊林における受光伐後の植生の現状把握  
 鎌田 遼：クラゲ類に蛸集する魚類の摂餌生態
- 修士 中村 光男：ヒラメの左右非対称な体色を形成する各種色素細胞の発現過程  
 谷本 尚史：魚類仔魚の初期餌料としての尾虫類大量培養法の開発と餌料価値の検討  
 中間 史朗：マアジの仔稚魚期の行動発達における視覚の役割  
 河端 雄毅：バイオテレメトリーによるシロクラベラの日周および季節的行動の解明

**基礎海洋生物学部門**

- 学士 西本 篤史：陸棚上の沈木に付随する生物相における食物網
- 課程博士 岸田 拓士：Evolution of odorant receptor genes in vertebrates: an insight into molecular basis of aquatic re-adaptation

## ◆ 他大学・各種学校の講義・実習

(フィールド研関連事業としての高校生を対象とする講義などは、第6項 その他関連事業における活動 参照)

### 森林生物圏部門

- 徳地 直子：有田川町立田鶴小学校 雨の水・川の水（2008年2月27日）
- 吉岡 崇仁：奈良教育大学 非常勤講師  
人間環境大学 非常勤講師
- 芝 正己：京都府立大学 生物生産環境学特論Ⅰ  
愛媛大学 森林資源学コース特別講義
- 中島 皇：京都教育大学 栽培と飼育の実践Ⅰ・Ⅱ，木や森の育て方に関する講義と実習指導（上賀茂試験地）（9月25日）

### 里域生態系部門

- 柴田 昌三：兵庫県淡路景観園芸学校 まちづくりガーデナーテーマコース「竹林の維持管理手法の修得」
- 西村 和雄：全国愛農会主催 就農準備校（愛農大学） 夏期講習および春期講習で講義：有機農業の基本について  
国際協力機構 マングローブの基礎および閉鎖性海域におけるマングローブの保護として，年二回 沖縄国際センター及び神戸国際センターにて講義
- 田川 正朋：「京の子ども夢大使（大志）派遣事業 科学探偵士」 講師  
宮津市立 栗田中学校 1, 2, 3年生（9月21日）  
宇治市立 笠取第2小学校 全校生徒28名（10月11日）  
京丹後市立 間人中学校 1年生2年生（10月18日）
- 甲斐 嘉晃：近畿大学環境管理学科 実習担当
- 益田 玲爾：JICA 集団研修（高知大学宇佐臨海センター）  
岐阜大学 臨海実習  
国立舞鶴高等専門学校 講義  
舞鶴市立日星高等学校 講義  
宇治市立西小倉中学校 講義  
舞鶴市立高野学校 講義  
舞鶴市立与保呂学校 講義

### 基礎海洋生物学部門

- 久保田 信：神戸市立須磨海浜水族園 臨海実習 8名（7月9-11日）  
大阪市立大学理学部 臨海実習 25名（7月16-17日）  
奈良女子大学附属小学校 5年生 86名（7月20日）  
大阪大学理学部 生物学臨海実習 22名（9月12日）  
和歌山県立田辺高校生物部 海洋生物実習 25名（10月28日）
- 大和 茂之：関西学院大学 臨海実習

宮崎 勝己：大阪教育大学教育学部 臨海実習  
奈良教育大学教育学部 野外実習 A-II  
京都教育大学教育学部 生物学夏季実習 II

深見 裕伸：近畿大学 臨海実習

白山 義久：放送大学 客員教員

## (6) その他フィールド研関連事業における活動

### ◆フィールド研主催事業

#### 1) 公開講座 2007「森のしくみとその役割」(芦生研究林)

日時：2007年7月26日(木)13時～28日(土)12時(2泊3日)

会場：フィールド研森林ステーション芦生研究林(京都府南丹市美山町芦生)

実行委員会委員長：吉岡崇仁

(プログラム：フィールド研教員のみ)

講義	芦生研究林の概要	芝 正己
	芦生の森林	寄元道德
	雨から川へ	徳地直子
	森の役割：人と環境の相互作用環	吉岡崇仁
	森林の観察・体験学習(天然林内での講義並びに実習)	吉岡崇仁, 柴田昌三, 芝 正己, 徳地直子

#### 2) 第4回時計台対話集会「むしに教わる森里海連環学」

日時：2008年3月15日(土)13:00～16:30

会場：京都大学百周年時計台記念館百周年記念ホール

企画責任者：中島 皇

(プログラム：フィールド研教員のみ)

“森里海”連環の現地報告	(1)仁淀川流域圏	柴田昌三
	(2)由良川流域圏	山下 洋
	(3)古座川流域圏	梅本信也

#### 3) 神戸大学・京都大学合同市民公開講座「森と海をめぐる市民公開講座～人・社会・自然を考える～」(神戸市)

(神戸大学大学院海事科学研究科共催 日本財団後援 2回開催)

第1回 日時：2007年11月18日(日)13:30～16:50

会場：神戸国際会館 402号会議室

(プログラム：センター教員のみ)

パネルディスカッション・パネラー： 山下 洋

第2回 日時：2008年2月3日(日)13:30～16:40

会場：神戸国際会館 402号会議室

(プログラム：フィールド研教員のみ)

講演「二酸化炭素の排出と海洋環境」： 白山義久

パネルディスカッション・パネラー： 白山義久, 山下 洋

パネルディスカッション・司会： 深見裕伸

## 4) 第3回由良川フォーラム～森と海へのいざない 心と体の癒しを求めて～ (福知山市)

(京都府中丹広域振興局共催)

日時：2007年9月2日(日) 13時～16時30分

会場：サンプラザ万助(福知山市篠尾新町)

企画責任者：山下 洋

(プログラム：フィールド研教員のみ)

講演Ⅱ 「若狭湾に出現する生物の多様性と季節変化～海から発信する地産地消～」：益田玲爾

## ◆フィールド研共催・後援事業

## 1) 全日空「私の青空・森づくり活動」において、森林・環境教室「京都大学フィールドセミナー(青空塾)」を開講

2007年 5月27日	標茶町湿原の森／釧路空港	竹内典之
7月 8日	高野山／関西国際空港	徳地直子
8月25日	三次市／広島空港	坂野上なお
8月27日	チェンナット／バンコック空港	柴田昌三
10月20日	八百津町／中部国際空港	吉岡崇仁
10月21日	八峰町／大館能代空港	徳地直子
10月28日	北郷町レイクサイドの森／宮崎空港	中島 皇

## 2) 第3回南紀白浜まなびツアー～私たちの暮らしと環境とのつながりを考える～

共催：NPO法人エコロジー・カフェ関西事務所

2007年 7月28日～30日 (熊野古道〈大辺路エリア〉・瀬戸臨海実験所)

7月29日	臨海微生物観察学習プログラム	白山義久他
	：採取物の顕微鏡観察・講義(メイオベントスの顕微鏡観察)	
	：スキndaイビング(円月島付近にて生物の観察)	
7月30日	京都大学白浜水族館見学・バックヤードツアー	白山義久他

## 3) 第2回エコの寺子屋(講義／フィールド学習)

共催：NPO法人エコロジー・カフェ

2007年12月8日 室内学習(元立誠小学校)

「土の健康、作物の健康、そして人の健康」 西村和雄

12月9日 フィールド学習(上賀茂試験地)

「上賀茂試験地の植生と樹木コレクションー遺伝子バンクとしての機能と環境保全ー」

柴田昌三

## 4) 後援：シンポジウム「仁淀川の森と水を考える」(高知県土佐市)

主催：仁淀川漁業協同組合

## 5) 後援：「チャリティトーク&amp;ライブ“森よ、川よ、海よ、甦れ!”」(高知市)

主催：第3回「森里海連環学」のためのチャリティトーク&amp;ライブ」実行委員会

2007年9月29日(高知市文化プラザかるぼーと)

6) 京都大学附置研究所・センターシンポジウム「京都からの提言－21世紀の日本を考える（第3回）」

（京都大学附置研究所・センター主催）

2008年 3月 8日 （横浜 新都市ホール）

◆各施設主催共催事業

1) 芦生研究林

芦生の森自然観察会『春の森を歩きながら樹木観察をしよう』

「なんたん・わくわくキッズ」（南丹市教育委員会との共催 芝 正己）

「樹木識別現地研修会」を開催（緑資源機構近畿北陸整備局管内事務職員と合同）

自然体験教室「美山っこグリーンワールド」（美山町内小学校5校との共催 芝 正己）

芦生の森自然観察会『秋の森を歩きながら樹木観察をしよう』

2) 北海道研究林

総合学習「木工体験学習」を実施（標茶町沼幌小学校）（標茶 6月27日）

「第2回自立林家育成研修会」を開催（釧路森づくりセンター普及課共催）

3) 和歌山研究林

ウッズサイエンスを開講（和歌山県立有田中央高等学校清水分校と共催・3年生・週1回）

「SIMIZU タイム」（ふるさと体験）を実施（和歌山県立有田中央高等学校清水分校と共催・1年生）

「森とあそぶ・まなぶ」森林体験学習を開催（有田川町立八幡小学校5年生・田殿小学校4年生）

「森林体験学習」を実施（芦生研究林にて／県立有田中央高等学校清水分校1年生）

4) 上賀茂試験地

上賀茂試験地春の自然観察会（4月21日 中島 皇）

第4回 昆虫 COE フィールド教育プログラム 上賀茂試験地『夏の一般公開自然観察会』

（21世紀 COE プログラム「昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生」共催 9月1日 中島 皇）

上賀茂試験地秋の自然観察会（11月17日）

5) 北白川試験地

なし

6) 徳山試験地

なし

7) 紀伊大島実験所

古座川合同調査（第17～28回：毎月実施）

第5回 古座川シンポジウム「記録が語る流域環境史」（7月7日）

第6回 古座川シンポジウム「古座川と町づくり」「古座川流域のきのこ」（2008年3月25日）

## 8) 舞鶴水産実験所

講義・臨海実習（SPP 連携講座・SSH 事業等）：

京都府立西舞鶴高等学校理数探究科（山下 洋・益田玲爾・上野正博・中西麻美・甲斐嘉晃）

京都府立南陽高等学校サイエンスリサーチ科（山下 洋・益田玲爾・上野正博・中西麻美・甲斐嘉晃）

京都教育大学附属高等学校（益田玲爾・上野正博）

兵庫県立神戸高等学校（上野正博）

京都府立海洋高校海洋科学科（講義・野外実習（大江山）等 中西麻美）

京都府海洋高校教員に対し研修指導

「由良川ゼミ」（毎月1回開催）

## 9) 瀬戸臨海実験所

附属水族館において「バックヤード体験学習」「日替わり解説ツアー」・「バックヤードツアー」

附属水族館において「水族館の磯採集体験」

放送大学面接授業

附属水族館において「夏休み解説ツアー」「冬休み解説ツアー」

「第3回南紀白浜まなびツアー～自然に学び，五感で学ぶ～」

附属水族館において，きのくに県民カレッジ連携講座「バックヤード体験学習」

講義・臨海実習・生物実習（SPP 連携講座・SSH 事業等）：

兵庫県立尼崎小田高等学校（宮崎勝己 文科省 SSH 事業）

滋賀県立膳所高等学校（久保田 信・宮崎勝己・深見裕伸 文科省 SSH 事業）

和歌山県立向陽高等学校（宮崎勝己 文科省 SSH 事業）

奈良県立奈良北高等学校・校外研修講義（宮崎勝己）

兵庫県立姫路飾西高等学校（久保田 信）

大阪府立豊中高等学校（久保田 信・宮崎勝己）

奈良女子大学附属中等教育学校・臨海実習（宮崎勝己）

◆フィールド研関連刊行物編集委員会等

1) 「森林研究」編集委員（フィールド研教員のみ）

柴田 昌三（委員長）

吉岡 崇仁

安藤 信

芝 正己

徳地 直子

中島 皇

寄元 道徳

坂野上なお

2) 瀬戸臨海実験所 Publications of the Seto Marine Biological Laboratory 編集委員（フィールド研教員のみ）

白山 義久（委員長）

久保田 信

宮崎 勝己

大和 茂之

深見 裕伸

## ●●● 4. 資料 ●●●

### (1) 職員配置表

平成 20 年 3 月 31 日現在

区 分	教 授	准教授	講 師	助 教	事務職員	技術職員	非常勤職員
流 動 分 野 研 究 室		田川 正朋		中山 耕至			黒河七菜子
研 究 室	吉岡 崇仁						植田 晶子 中野 泰美
企 画 情 報 室	センター長 (室長 [兼]) 白山 義久					(兼)山内 隆之 橋田 理也子 向 昌宏 中村 はる奈	新 裕史 上野 亜紀
森里海連環学 プロジェクト支援室	(室長 [兼]) 山下 洋						福澤加里部
事 務 部					(専門員) 仲 豊廣		山本みゆき
図 書 室					大谷 啓子		
芦 生 研 究 林		(研究林長) 芝 正己			(掛長) 長野 敏 (主任) 石田 将人	○藤井 弘明 △大牧 治 △紺野 善和 △浅野 順 △柳本 雅敏 伊藤 健一 太田 敦 長谷川 史 小嶋 宏	
北 海 道 研 究 林		(研究林長) 安藤 信			(掛長) 川合 忍 (主任) 福田 光宏	[標茶区] ○佐藤 修一 △岡部 芳彦 勝山 智憲 吉岡 大輔 古本 大歩 [白糠区] 古本 浩望	川村由紀枝
和 歌 山 研 究 林		☆(研究林長) 徳地 直子		☆坂野上なお		○長谷川 孝 △上西 久哉 △平井 岳志 △細見 純嗣 中川 智之 松場 京子	松場 輝信
上 賀 茂 試 験 地	(試験地長) 柴田 昌三					◎境 慎二 △柴田 泰征 △大橋 健太 黒田 真人 荒井 亮 古田 卓	
徳 山 試 験 地			★(試験地長) 中島 皇			○秋田 豊	近森 道子 藤井美喜子
北 白 川 試 験 地	(試験地長 [兼]) 柴田 昌三			寄元 道德		◎山内 隆之 柳 直文 鬼塚 恵美	北村伊都子
紀 伊 大 島 実 験 所		(実験所長) 梅本 信也					
舞 鶴 水 産 実 験 所	(実験所長) 山下 洋	益田 玲爾		上野 正博 中西 麻美 甲斐 嘉晃	(主任) 松尾 壽雄	○佐藤 一夫 △志賀 生実	亀井まり子 松尾春美 萩野文代 藤原早苗 山下正枝
瀬 戸 臨 海 実 験 所	(実験所長) 白山 義久	久保田 信	宮崎 勝己	大和 茂之 深見 裕伸	(掛長) 深尾 秀正 (主任) 原田 晶夫 (主任) 加藤 雅浩 田中 浩 谷坂 美和子	◎山本 善万 △山本 泰司 △太田 満一 △津越 健哲 興田 喜久男	興田 道子 杉野 晴美

☆勤務地：京都

★勤務地：上賀茂試験地

◎技術長

○技術班長

△技術主任

## (2) 常設委員会名称及び委員一覧

平成 19 年 5 月 1 日現在

### 〈教授が担う委員会〉

将来構想企画委員会	白山・山下・柴田・吉岡
教育研究評価委員会	白山・山下・柴田・吉岡
施設・設備整備委員会	白山・山下・柴田・吉岡

### 〈教授が当面委員長を務める委員会〉

教育プログラム委員会	○山下・徳地・田川・西村・中島・宮崎
研究プログラム委員会	○吉岡・安藤・芝・梅本・益田
広報委員会	○柴田・久保田・梅本・寄元・甲斐・馬渡
人権問題対策検討委員会	○白山・山下・柴田・吉岡・徳地・益田・小坂
情報セキュリティ委員会	○白川・上野（幹事）・中山・中村

### 〈准教授・講師・助教が委員長を務める委員会〉

施設・設備整備委員会ワーキンググループ	
遠隔講義システム等整備 WG	○芝・宮崎・安藤・坂野上・上野
連携棟新営WG	○梅本・久保田・田川・中西
社会連携委員会	○中島・西村・益田・大和
国際委員会	○益田・中西・深見・芝
労働安全衛生委員会	○徳地・坂野上・甲斐・大和

### 技術職員の在り方検討委員会（役職指定）

センター長・副センター長・総務課長・技術長

（○は、委員長）

### (3) 全学委員会等

平成19年5月1日現在

#### 〈部局長が対応する委員会〉

教育研究評議会	大学評価委員会	全学共通教育委員会
研究所長会議	全学情報セキュリティー委員会	地球環境学舎・学舎協議会
生態学研究センター協議委員会	総合技術部委員会	

#### 〈他の教員が対応する委員会〉

大学評価委員会点検・評価実行委員会	山下
全学共通教育システム委員会少人数教育部会	益田
〃 生物学部会	田川
学生の安全対策検討WG	吉岡
教室系技術職員の在り方検討WG	柴田
シニアキャンパス実施検討委員会	柴田
ジュニアキャンパス実施検討委員会	柴田
博物館運営委員会	芝
生態学研究センター運営委員会	徳地

#### (4) 運営委員会

区分	平成 19 年度
議長	白山 義久（フィールド研センター長）
1号	山下 洋（フィールド研教授）
	柴田 昌三（フィールド研教授）
	吉岡 崇仁（フィールド研教授）
2号	渡辺 勝敏（理学研究科准教授）
	谷 誠（農学研究科教授）
	森本 幸裕（地球環境学堂教授）
	河野 泰之（東南アジア研究所教授）
	椿 宜高（生態学研究センター教授）
	大野 照文（総合博物館教授）

#### (5) 協議員会

区分	職名	平成 19 年度
1号	フィールド研センター長	白山 義久
2号	フィールド研教授	山下 洋
	フィールド研教授	柴田 昌三
	フィールド研教授	吉岡 崇仁（H19.5.1～）
3号	高等教育研究開発推進機構長	北村 隆行
	理学研究科長	加藤 重樹
	理学研究科動物学教室教授	堀 道雄
	農学研究科長	奥村 省吾
	農場長	山田 利昭
	学術情報メディアセンター長	中村 裕一
	地球環境学堂長	嘉門 雅史
	生態学研究センター長	大串 隆之
総合博物館長	山中 一郎	

## (6) 新聞記事

センターに関する記事

分類	年	月	日	曜日	掲載面	掲載紙	内容・キーワード等	タイトル	サブタイトル
新聞	2007	4	11	水	朝 23 面	京都新聞	芦生研究林「自然観察会」	春の芦生の森で樹木観察しよう	来月 19 日、南丹で
新聞	2007	4	16	月	朝 25 面	京都新聞	芦生研究林	ネイチャーガイドハイキング 芦生の天然林楽しむ	南丹 11 月まで毎月巡回開催
新聞	2007	4	26	木	朝 1 面	紀伊民報	和歌山研究林	障害者に働く機会を 間伐材でベンチ製作	仕事増やして収入確保 田辺の社団法人 京大が取り組み
新聞	2007	5	1	火	朝 22 面	京都新聞	教授人事	京都大人事 (1 日)	吉岡崇仁
新聞	2007	5	1	火	朝 9 面	紀伊民報	瀬戸臨海実験所	島島を荒らさないで	白浜ロータリークラブ 看板で注意呼び掛け
新聞	2007	5	8	火	朝 11 面	紀伊民報	白浜水族館	体験学習の参加者募集	京大白浜水族館
新聞	2007	5	15	火	朝 30 面	読売新聞	iPod	未造建築, iPod で復権 京大大学院小林研究室	箱組み合わせ構成 地震に強く
新聞	2007	5	20	土	4-5 面	京大学生新聞	間伐材サイコロベンチ	間伐材を有効利用 サイコロベンチ	環境に配慮したアイデアベンチ
新聞	2007	5	25	金	夕 19 面	日本経済新聞	芦生研究林	感動の自然と歴史の景観残す 美山	京都府南丹市
新聞	2007	6	15	土	朝 23 面	毎日新聞	芦生研究林	「京のポップ話 芦生のトロッコ①」	昭和初期に 7.7 キロ完成
新聞	2007	6	22	金	朝 21 面	毎日新聞	芦生研究林	「京のポップ話 芦生のトロッコ②」	公開講座参加者募る
新聞	2007	6	23	土	朝 30 面	京都新聞	国際シンポジウム	「京のポップ話 芦生のトロッコ③」	灰野の先まで 2 キロが現役
新聞	2007	6	24	日	朝 22 面	毎日新聞	間伐材サイコロベンチ	「京のポップ話 芦生のトロッコ④」	「黄葉アラザ」新設や「名勝清風荘庭園」整備
新聞	2007	6	29	金	朝 25 面	毎日新聞	芦生研究林	「京のポップ話 芦生のトロッコ⑤」	安全面から一般利用不可
新聞	2007	6	29	金	朝 27 面	毎日新聞	紀伊大島実験所	古座川上流でアユ大量死 冷水病かチェック	京大紀伊大島実験所
新聞	2007	7	2	月	朝 21 面	中国新聞	徳山試験地	京都大徳山試験地 楢皮剥皮実験 10 年	材質や材色に影響なし
新聞	2007	7	3	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京大大学白浜水族館」	「1 白山義久」世界最大の節足動物 タカアシガニ	浮力に支えられ巨大化
新聞	2007	7	6	金	朝 5 面	毎日新聞	芦生研究林	「京のポップ話 芦生のトロッコ④」	早足のスピード「ゴツン」
新聞	2007	7	7	土	朝 1 面	紀伊民報	白浜水族館	珍しいオナガウツボ	京大白浜水族館で展示
新聞	2007	7	10	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京大大学白浜水族館」	「2 深見裕伸」イシヤンゴの不思議と魅力	田辺湾周辺にも生息
新聞	2007	7	13	金	朝 25 面	毎日新聞	芦生研究林	「京のポップ話 芦生のトロッコ⑤」	先人からのレール「守る」
新聞	2007	7	17	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京大大学白浜水族館」	「3 山本泰司」出迎えるヒラアジ	小魚襲う海のハンター
新聞	2007	7	18	水	朝 8 面	京都新聞	NPO 法人エコロジエ・カフェ	「第 3 回南紀白浜まなびツアー」	7 月 28・29・30 日開催！
新聞	2007	7	24	火	朝 28 面	読売新聞	上賀茂試験地「自然観察会」	京都大が自然観察会	
新聞	2007	7	24	火	朝 10 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京大大学白浜水族館」	「4 久保田 信」イソバナとオウギウミヒドリ	外見似るが「他人の空似」
新聞	2007	7	29	日	朝 27 面	京都新聞	芦生研究林「公開講座」	人と自然の共生 3 日連続で学ぶ	京大芦生研究林で
新聞	2007	7	31	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京大大学白浜水族館」	「5 大和茂之」川エビ類	川と海を行き来する
新聞	2007	8	7	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京大大学白浜水族館」	「6 加藤哲成」解説ツアー	水族館の裏側見せませんか
新聞	2007	8	8	水	朝 21 面	京都新聞	上賀茂試験地「自然観察会」	京大科学教育センター、来月に自然観察会	
新聞	2007	8	14	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京大大学白浜水族館」	「7 太田 満」オニソメとクモヒトデ	奇声上がるボケット水槽
新聞	2007	8	16	木	朝 23 面	京都新聞	芦生研究林「シニアキャンプ 2007」	芦生の対象に 学びの“合宿”	来月 18 日から京大
新聞	2007	8	18	土	夕 8 面	京都新聞	芦生研究林	「8 宮崎勝己」ガマガゼ	京都府青少年科学センターに
新聞	2007	8	21	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京大大学白浜水族館」	和名のないエビ展示	危険なウニの代表選手
新聞	2007	8	21	火	朝 1 面	紀伊民報	白浜水族館	自然豊かなな芦生 優しく丁寧に撮影	白浜 京大大学水族館
新聞	2007	8	24	火	朝 27 面	京都新聞	芦生研究林	森と海へのいざない	石京の会社員 写真集 3 冊目出版
新聞	2007	8	28	火	朝 27 面	毎日新聞	第 3 回由良川フォーラム	「9 久保田 信」タコクラゲ	来月 2 日 由良川フォーラム 福知山
新聞	2007	8	28	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京大大学白浜水族館」	由良川の自然と人の交わり探る	光合成で元気になるクラゲ
新聞	2007	9	3	月	朝 22 面	京都新聞	第 3 回由良川フォーラム	「10 加藤哲成」カイエビス、チカメキントキなど	福知山でフォーラム
新聞	2007	9	4	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京大大学白浜水族館」	原生林の現状知るハイキングツアー	赤い魚はなぜ赤い？
新聞	2007	9	9	日	朝 27 面	京都新聞	芦生研究林	「11 白山義久」カイメン動物	南丹で 15、16 日
新聞	2007	9	11	火	朝 27 面	京都新聞	芦生研究林	「12 深見裕伸」ホネシヤンゴ	イソポンチやクマと、うり二つ
新聞	2007	9	18	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京大大学白浜水族館」	「13 山本泰司」厄介な動物を駆除する魚	飼育員の強力助手
新聞	2007	9	25	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京大大学白浜水族館」	「きれいな自然見たい」	犬学生がフィールド調査 古座川申本沿岸
新聞	2007	9	28	金	朝 4 面	紀伊民報	紀伊大島実験所	「14 太田 満」オオナガレカンザシ	ヤクシマタカラに襲われる
新聞	2007	10	2	火	朝 8 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京大大学白浜水族館」	「15 大和茂之」フジツボとカメノテ	くっついて生きる
新聞	2007	10	9	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京大大学白浜水族館」		

新聞	2007	10	16	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京都大学白浜水族館」	「16 久保田 信」ヤギとウミトサカ	ハードとソフトな海の花
新聞	2007	10	23	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京都大学白浜水族館」	「17 宮崎勝己」ニセクロナマコ	決して食べないで
新聞	2007	10	24	水	朝 22 面	毎日新聞	上賀茂試験地「自然観察会」	京都大・上賀茂試験地で「秋の自然観察会」	
新聞	2007	10	30	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京都大学白浜水族館」	「18 加藤哲哉」オニソメ	体長1メートルの巨大ゴカイ
新聞	2007	10	31	水	朝 24 面	京都新聞	j.Pod	地元産材の湯かみ感じて クラブボックス組み立て開始	北桑田高リサーチ科生徒 京大開発工法で実習
新聞	2007	11	2	金	朝 24 面	京都新聞	芦生研究林	響け芦生の湯かみ 北区のジャズビアニストら	南丹で4日、コンサート 自然のよさ伝えたい
新聞	2007	11	2	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京都大学白浜水族館」	「19 白山義久」トウカマリ	「兜」と「角」を持つ巻き貝
新聞	2007	11	13	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京都大学白浜水族館」	「20 深見裕伸」オオカワリギンチャク	暗闇に咲く黄色い花
新聞	2007	11	19	月	朝 29 面	京都新聞	NPO 法人エロゾー・カフェ	「21 山本泰司」さんご礁魚類	来月 8、9 日に
新聞	2007	11	20	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京都大学白浜水族館」	NPO 法人エロゾー・カフェ	悲劇的な終末待つ魚
新聞	2007	11	25	日	朝 32 面	読売新聞	NPO 法人エロゾー・カフェ	「22 大和茂之」フナムシ	8 日中京、9 日北区内
新聞	2007	11	27	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京都大学白浜水族館」	野菜から学ぶ「温暖化」の問題	海から陸への進化
新聞	2007	11	29	木	朝 28 面	朝日新聞	「水族館へ行こう！京都大学白浜水族館」	「23 宮崎勝己」カコボラ	来月 8、9 日京都で
新聞	2007	12	4	火	朝 1 面	紀伊民報	瀬戸臨海実験所	ツルアジサイを切らないで	小粒で派手で危険なやつ
新聞	2007	12	6	木	朝 1 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京都大学白浜水族館」	「26 ロビン・リグビー」マダコ	みなへ汁で捕獲
新聞	2007	12	11	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京都大学白浜水族館」	「24 太田 満」ウニの仲間	水槽食べて水漏れ？
新聞	2007	12	18	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京都大学白浜水族館」	「25 宮崎 勝己」カコボラ	海産動物最強の毒生物
新聞	2007	12	20	木	朝 22 面	毎日新聞	芦生研究林	ツルアジサイを切らないで	「木にからまり『絞め殺す』は誤解」
新聞	2007	12	22	土	朝 14 面	紀伊民報	白浜水族館	冬休み「解説ツアー」	京大白浜水族館で展示
新聞	2007	12	23	日	朝 1 面	紀伊民報	白浜水族館	直後 40 センチのヒトデ	京大白浜水族館で展示
新聞	2007	12	25	火	朝 5 面	紀伊民報	白浜水族館	「26 ロビン・リグビー」マダコ	水族館の都市伝説
新聞	2008	1	1	火	朝 54 面	紀伊民報	白浜水族館	デカっ！4 倍ヒトデ	地元漁師、驚き捕獲 コブヒトデモドキ
新聞	2008	1	8	火	朝 1 面	紀伊民報	京都大学白浜水族館	無脊椎動物の解説ツアー	
新聞	2008	1	17	木	朝 1 面	紀伊民報	京都大学白浜水族館	本州初確認のアカイセエビ	
新聞	2008	1	14	月	朝 13 面	毎日新聞	和歌山版	京大 白浜水族館「アカイセエビ」仲間入り	人間活動加えた連環学
新聞	2008	1	21	月	夕 14 面	日本経済新聞	森里海連環学	「森と海をめぐる市民公開講座」	
新聞	2008	1	25	金	朝 1 面	紀伊民報	白浜水族館	「29 久保田信」カワイヒミドリとシワホラダマン	
新聞	2008	1	22	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京都大学白浜水族館」	「30 太田満」タコノマクラ	不思議な共生関係
新聞	2008	2	5	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京都大学白浜水族館」	「31 山本泰司」メジナ類	前後があるウニ
新聞	2008	2	7	木	朝 2 面	毎日新聞	和歌山版	マンジュウヒトデ展示	3 種とも紀南に生息
新聞	2008	2	19	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京都大学白浜水族館」	「32 白山義久」ホヤ	人間と親せき関係
新聞	2008	2	24	日	朝 6 面	紀伊民報	白浜水族館	白浜沖で捕獲相次ぐママンジュウヒトデ海水温上昇で北上か	
新聞	2008	3	3	月	夕 18 面	日本経済新聞	第 4 回時計台対話集会	「33 加藤哲哉」カイクマリとカラッパ	カニの「アバート」群見
新聞	2008	3	4	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京都大学白浜水族館」	「34 太田満」ハコフグ	愛嬌の裏に意外な一面
新聞	2008	3	8	土	朝 33 面	読売新聞	第 4 回時計台対話集会	(植物案内記事)	
新聞	2008	3	8	土	朝 5 面	朝日新聞	第 4 回時計台対話集会	(植物案内記事)	
新聞	2008	3	9	日	朝 18 面	読売新聞	j.Pod	府立北桑田高校森林リサーチ科	地元の木を使って「ウッドマレイジ」を減らそう！
新聞	2008	3	11	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京都大学白浜水族館」	「35 山本泰司」ホソジユズモ	旺盛な生命力を持つ緑藻
新聞	2008	3	13	木	朝 27 面	京都新聞	第 4 回時計台対話集会	(植物案内記事)	
新聞	2008	3	16	日	朝 23 面	京都新聞	第 4 回時計台対話集会	虫に救われる環境保全	養老猛司氏の問題提起：京大で集会
新聞	2008	3	18	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京都大学白浜水族館」	「36 宮崎勝己」イセエビ	謎多い名前の由来
新聞	2008	3	25	火	朝 5 面	紀伊民報	「水族館へ行こう！京都大学白浜水族館」	「37 大和茂之」シャコ	甲殻類としての共通性
新聞	2008	3	28	金	朝 12 面	紀伊民報	瀬戸臨海実験所	センチュウの同定法学ぶ	東府研究者白浜の京大実験所
紀要・雑誌等	2007	6	No. 624			京大広報	芦生研究林「公開講座」	フィールド科学教育研究センター 2007	森のしくみとその役割
紀要・雑誌等	2007	9	No. 626			京大広報	瀬戸臨海実験所	(隔地施設紹介) フィールド科学教育研究センター	瀬戸臨海実験所
紀要・雑誌等	2007	10	No. 627			京大広報	芦生研究林	(隔地施設紹介) フィールド科学教育研究センター	芦生研究林
紀要・雑誌等	2007	11	No. 628			京大広報	上賀茂試験地	(隔地施設紹介) フィールド科学教育研究センター	上賀茂試験地
紀要・雑誌等	2007	12	No. 629			京大広報	和歌山研究林	(隔地施設紹介) フィールド科学教育研究センター	和歌山研究林

紀要・雑誌等	2008	1			京大広報	徳山試験地、北白川試験地	[隔地施設紹介] フィールド科学教育研究センター 徳山試験地、北白川試験地
紀要・雑誌等	2008	2			京大広報	舞鶴水産実験所	[隔地施設紹介] フィールド科学教育研究センター 舞鶴水産実験所
紀要・雑誌等	2008	3			京大広報	北海道研究林	[隔地施設紹介] フィールド科学教育研究センター 北海道研究林

教職員に関する記事

分類	年	月	日	曜日	掲載面	内容・キーワード等	タイトル	サブタイトル
新聞	2007	7	25	水	朝 11 面	白石義久教授	白良浜の砂変化問題 黒ずみの原因は硫化鉄	県「海水浴に支障なし」
紀要・雑誌等	2007	4			No. 622		フィールド科学教育研究センター長	
新聞	2007	4	18	水	朝 23 面		最新の研究、話題 紹介	京大で来月講座
新聞	2007	5	17	木	朝 27 面		「地震知って備えを」桂校地	京大公開講座 尾池総長が講演
新聞	2007	5	16	水	朝 4 面		市民に親しまれてきた春秋講義 桂キャンパスでも新たに開講	初回講師は尾池総長 学内外から多くの聴衆
新聞	2007	6	27	水	夕 1 面	柴田昌三教授	日本の NGO オイスクス チャイナート県 学校の植林活動	ちまきに重用 調達困った
新聞	2007	9	23	水	15 面		竹の有効活用を考えるセミナー受講者募集	全日空が資金協力
新聞	2007	11	26	月	朝 21 面		山の資源見直しを訴え	
新聞	2008	3	31	月	朝 23 面	山下洋教授	「知の最前線 京大附置研究所・センターの人々」	亀岡でフォーラム
新聞	2007	3	8	土	朝 6 面		南方面で	森・里・海 つながり考える
新聞	2007	4	27	金	朝 1 面		ベニクラゲは不老不死	温暖化との関係探る 京大准教授が調査開始
新聞	2007	5	5	土	朝 4 面		希少種クラゲ確認	白浜で海洋生物を研究する 久保田 信 准教授
新聞	2007	6	12	火	14 面		西のサワラ、東北の海に	西海パールセンター水産館 国内では 2 例目
新聞	2007	7	5	木	朝 33 面		「地球の住民たち」1冊に	温暖化、日本の漁場に異変
新聞	2007	7	21	土	朝 7 面		刺されたら安物に	久保田京大准教授が体験連載
新聞	2007	8	22	土	朝 1 面		インギンチャック “夏ばて”	
新聞	2007	9	26	水	朝 25 面	久保田信准教授	タコクラゲが大量発生！ 白浜の沿岸で	南方クラゲが大量発生も 白浜沿岸
新聞	2007	10	11	水	朝 10 面		珍しいマミズクラゲ	温暖化で海水温下がらないため
新聞	2007	11	16	金	朝 12 面		久保田京大准教授 海の生物の本贈る	紀南の小中高校に
新聞	2007	11	23	金	朝 28 面		海洋生物本 225 校に寄贈 京都大・久保田准教授	紀南に生息する動物の世界知って
新聞	2007	11	25	日	朝 1 面		珍しい南方系イボクラゲ	白浜で捕獲
新聞	2007	12	19	水	朝 1 面		クラゲのポリプ付着	田辺市天神崎のタツノオトシゴ 国内 4 例目
新聞	2008	1	1	火	朝 68 面		日本の海 サンゴもピンチ！すでに異変 海水温が上昇	流水来なくなる
新聞	2008	1	1	火	朝 35 面		黒潮がつかなくサンゴ	世界的にも多様な生態系 久保田京大准教授
新聞	2008	2	2	土			キョヒメクラゲ確認	世界 2 例目希少種発見
紀要・雑誌等	2007	10			No. 20		海洋生物に懸せられて～白浜老人大学 8 月例会～	
新聞	2007	10	19	金			21 日八森でブナ植樹	ANA、大館能代空港 T ビル
新聞	2007	10	20	土			私の青空 森づくり 八幡でブナ 500 本植樹	徳地准教授 (京大) 迎え「青空義」も
新聞	2007	10	22	月	8 面		環境保全願いブナ植樹 八幡町 私の青空 森づくり	「豊かな海」も豊野に 宮崎からも参加 泊川上流部に苗木 250 本
新聞	2007	10	22	月		徳地直子准教授	白神山地にブナ植樹	全日空など 市民参加で「森づくり」
新聞	2007	10	24	水			ANA グループが森づくり 苗木 250 本を植樹	育てシロブナ 八森
新聞	2007	12	16	日	朝 26 面		天王山と西山 ともに守ろう	大崎 森林保護団体が交流シンポジウム
新聞	2008	2	27	水	朝 32 面		森の大切さを水から学ぼう	専門家招き「学習会」有田川・田股小
新聞	2007	10	12	金	朝 22 面		黒板のない授業にようこそ 臨時の先生が活躍	笠取第二小、魚博士が講演
新聞	2007	5	6	日	朝 31 面		海中の不思議に興味津々	宇治・笠取第二小 京大准教授が授業
新聞	2007	6	21	木	夕 9 面		魚の心だっけ揺れている	魚たちの学力テスト
新聞	2007	8	6	月	夕 13 面		若狭湾に南方系魚	
新聞	2007	11	29	木	朝 28 面		府内の漁業者 取り組み発表	舞鶴水産実験所益田准教授講演 「温暖化すすみ変化」
新聞	2007	11	29	木	朝 24 面	益田玲爾准教授	海、山、人の多様な生態系を守ろう!!	宮津で交流大会
新聞	2008	1	1	火	朝 1 面		「舞鶴の自然、知って」	冠島の海、タイニミックスと繊細さの壓力に溢れる
新聞	2008	2	27	水	朝 24 面		「景観・地形・動植物…残したい、舞鶴の自然」	絶滅危惧種など 197 種項目収録 データブック作製
新聞	2008	2	27	水	朝 32 面		「舞鶴の豊かな自然環境を紹介」	行政・市民ら協力 環境データブック完成
新聞	2008	2	27	水	朝 1 面			市と市民スタッフ協働で 197 項目 データブック作製

新聞	2007	5	16	水	朝 4 面	紀伊民報	梅本信也准教授		清流古座川取り戻す会 川下りで清掃 瀬りの深知さも実感 生の記録を後世に 清流取り戻すきっかけに	ごみ 軽トラック 2 台分 京大紀伊大島実験所
新聞	2007	8	22	水	朝 4 面	紀伊民報			ホソバアラシノキ 季節外れに咲く	串本
新聞	2007	10	6	土	朝 4 面	紀伊民報			ウミゾモ繁殖 アサリ大量死	ウミゾモ、謎の繁殖
新聞	2007	7	29	日	朝 3 面	京都新聞	宮崎勝己講師		東京湾岸でアサリ大量死	千葉・木更津の漁協悲鳴
新聞	2007	7	29	日	朝 38 面	日本経済新聞			「有様」こたわり 農業学校開校へ	研究先駆け 京大講師 来春、南丹で
新聞	2007	12	8	土	夕 1 面	京都新聞	西村和雄講師		楽しんでゴミ減量	すころく教材 授業出前
新聞	2008	1	7	月	朝 30 面	京都新聞			環境問題と嘘	
新聞	2007	4	25	水	2 面				磯の香り	
新聞	2007	5	23	水	2 面				魚を数える	
新聞	2007	6	27	水	2 面				船回め (ふながため)	
新聞	2007	7	25	水	6 面				農業が悪い?	
新聞	2007	8	22	水	6 面		上野正博助教 「日本海に遊ぶ」		サケ放流事業打ち切り	
新聞	2007	9	27	水	6 面				微小貝	
新聞	2007	10	24	水	6 面				エビの骨わた	
新聞	2007	11	28	水	6 面				地産地消	
新聞	2008	1	23	水	6 面				リサイクルは環境に優しい?	
新聞	2008	2	27	水	6 面				大江山で緑の実習	海洋高、森の役割など学ぶ
新聞	2007	10	2	火	朝 33 面	朝日新聞			海守のため森林学ぼう	海洋高生が野外実習 福知山
新聞	2007	10	3	水	朝 20 面	京都新聞	中西麻美助教		海洋高の生徒ら山の学習	大江山で 森と海のかかわり知る
新聞	2007	10	3	水		阿丹日日新聞				

その他

分類	年	月	日	曜日	掲載面	掲載紙	内容・キーワード等	タイトル	サブタイトル
新聞	2007	8	1	水	夕 1 面	掲載紙	島山重篤氏	森と海の恋 植林で見守る	
新聞	2007	11	23	金	朝 28 面	朝日新聞	人工林研究会 (倉田麻里氏)	北山杉便い京大に茶室	手作り、11 月祭お目見え
新聞	2007	11	23	金	朝 29 面	京都新聞	人工林研究会 (倉田麻里氏)	北山杉と伝統技法 「ぬくもり感じて」	京大 11 月祭に登場
新聞	2007	12	18	火	夕 1 面	舞鶴市民新聞	チャイタンニャ・バンターレ氏	地域に溶け込み交流深める	京大水産実験所で学ぶインド入留学生 バンターレさん
紀要・雑誌等	2007	4				文藝春秋 4 月特別号	島山重篤氏	気仙沼 汽水の恵み	

(7) 各施設利用許可数 (2007 年度)

施設名	許可数	利用区分			所属区分		
		教育	研究	その他	京都大学	他大学	他機関等
芦生研究林	110	34	54	22	56	10	44
北海道研究林	32	9	17	6	17	3	12
（標茶区）	(21)	(6)	(10)	(5)	(8)	(3)	(10)
（白糠区）	(11)	(3)	(7)	(1)	(9)	0	(2)
和歌山研究林	20	6	10	4	5	2	13
上賀茂試験地	56	21	25	10	27	10	19
北白川試験地	32	9	22	1	31	0	1
徳山試験地	8	0	3	5	3	0	5
紀伊大島実験所	253	10	240	3	66	5	182
舞鶴水産実験所	373	35	313	25	291	34	48
瀬戸臨海実験所	214	46	155	13	38	91	85
合計	1,098	170	839	89	534	155	409

(8) 各施設利用人数 (2007 年度)

施設名	教育利用		研究利用		公開講座等 イベント	一般利用	合計
	教職員等	学生	教職員等	学生			
芦生研究林	872	580	575	842	216	7,475	10,560
北海道研究林	200	383	130	22	0	152	887
（標茶区）	(178)	(278)	(96)	(15)	(0)	(103)	(670)
（白糠区）	(22)	(105)	(34)	(7)	(0)	(49)	(217)
和歌山研究林	297	24	86	95	0	43	545
上賀茂試験地	326	702	542	386	124	290	2,370
北白川試験地	28	308	322	575	0	180	1,413
徳山試験地	0	0	27	5	0	48	80
紀伊大島実験所	89	356	65	168	0	591	1,269
舞鶴水産実験所	123	994	288	4,935	8	515	6,863
瀬戸臨海実験所	351	2,390	276	476	151	66,150	69,794
計	2,286	5,737	2,311	7,504	499	75,444	93,781

## (9) 人事異動 (2007 年度)

氏名	新職名	旧職名	異動年月日
白山 義久	センター長・企画情報室長(兼)・教授	瀬戸臨海実験所長・教授	2007. 4. 1
柴田 昌三	副センター長・上賀茂試験地長(兼)・教授	教授	〃
中島 皇	徳山試験地長(兼)・講師	上賀茂試験地長・講師	〃
長谷川敦史	芦生研究林・技術職員(採用)		〃
林 大輔	北海道研究林・技術職員(採用)		〃
小嶋 宏和	芦生研究林・技術職員(採用)		〃
吉岡 歩	北海道研究林・技術職員(採用)		〃
古田 卓	上賀茂試験地・技術職員(採用)		〃
古本 浩望	北海道研究林・技術職員(再雇用)	北海道研究林・技術職員	〃
松場 京子	和歌山研究林・技術職員(再雇用)	和歌山研究林・技術職員	〃
馬渡 和則	企画情報室・技術班長	北白川試験地・技術主任	〃
仲 豊廣	事務室・フィールド担当専門員	工学研究科経理課・課長補佐	〃
山下 敦子	国立曽爾青少年自然の家・事業支援課総務係長	北海道研究林・事務主任	〃
福田 光宏	北海道研究林・事務主任	医学部附属病院経理・調達課契約掛主任	〃
柳本 順	芦生研究林・技術主任	芦生研究林・技術職員	〃
大橋 健太	上賀茂試験地・技術主任	芦生研究林・技術職員	〃
佐藤 修一	北海道研究林・技術班長	北海道研究林・技術主任	〃
岡部 芳彦	北海道研究林・技術主任	北海道研究林・技術職員	〃
平井 岳志	和歌山研究林・技術主任	和歌山研究林・技術職員	〃
細見 純嗣	和歌山研究林・技術主任	和歌山研究林・技術職員	〃
境 慎二郎	上賀茂試験地・技術長	企画情報室・技術班長	〃
山内 隆之	北白川試験地・技術長	北海道研究林・技術班長	〃
山本 善万	瀬戸臨海実験所・技術長	瀬戸臨海実験所・技術班長	〃
吉岡 崇仁	森林生物圏部門森林資源管理学分野・教授	総合地球環境学研究所・准教授	2007. 5. 1
Patricia Robin Rigby	特定有期雇用教員(NaGISA プロジェクト)・准教授(採用)(パトリシア ロビン リグビー)		2007. 8. 1
馬渡 和則	辞職	企画情報室・技術班長	2007. 8.31
Patricia Robin Rigby	死亡	特定有期雇用教員(NaGISA プロジェクト)・准教授	2007.12. 9
西村 和雄	辞職	北白川試験地長・講師	2007.12.31
柴田 昌三	北白川試験地長(兼)・教授	教授	2008. 1. 1
橋田理也子	辞職	企画情報室・技術職員	2008. 3.31
太田 満	定年退職	瀬戸臨海実験所・技術主任	〃
大牧 治夫	定年退職	芦生研究林・技術主任	〃

## (10) 規程の改正等

- 「年俸制特定教員の選考に関する申合せ」の一部改正（平成19年4月18日改正）
- 「流動分野の教員が、流動期間中に異動等により欠員が生じた場合の補充の方法について」の一部改正（平成19年4月18日改正）
- 「京都大学フィールド科学教育研究センター災害等危機管理計画」（平成19年9月20日制定）
- 「瀬戸臨海実験所図書利用内規」の一部改正（平成19年11月21日改正）
- 「京都大学フィールド科学教育研究センターの内部組織に関する内規」の一部改正（平成20年1月16日改正）

京都大学フィールド科学教育研究センター 年報 第5号  
平成21年1月30日 発行

発 行 京都大学フィールド科学教育研究センター  
〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

印 刷 株式会社 北斗プリント社  
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町38-2

